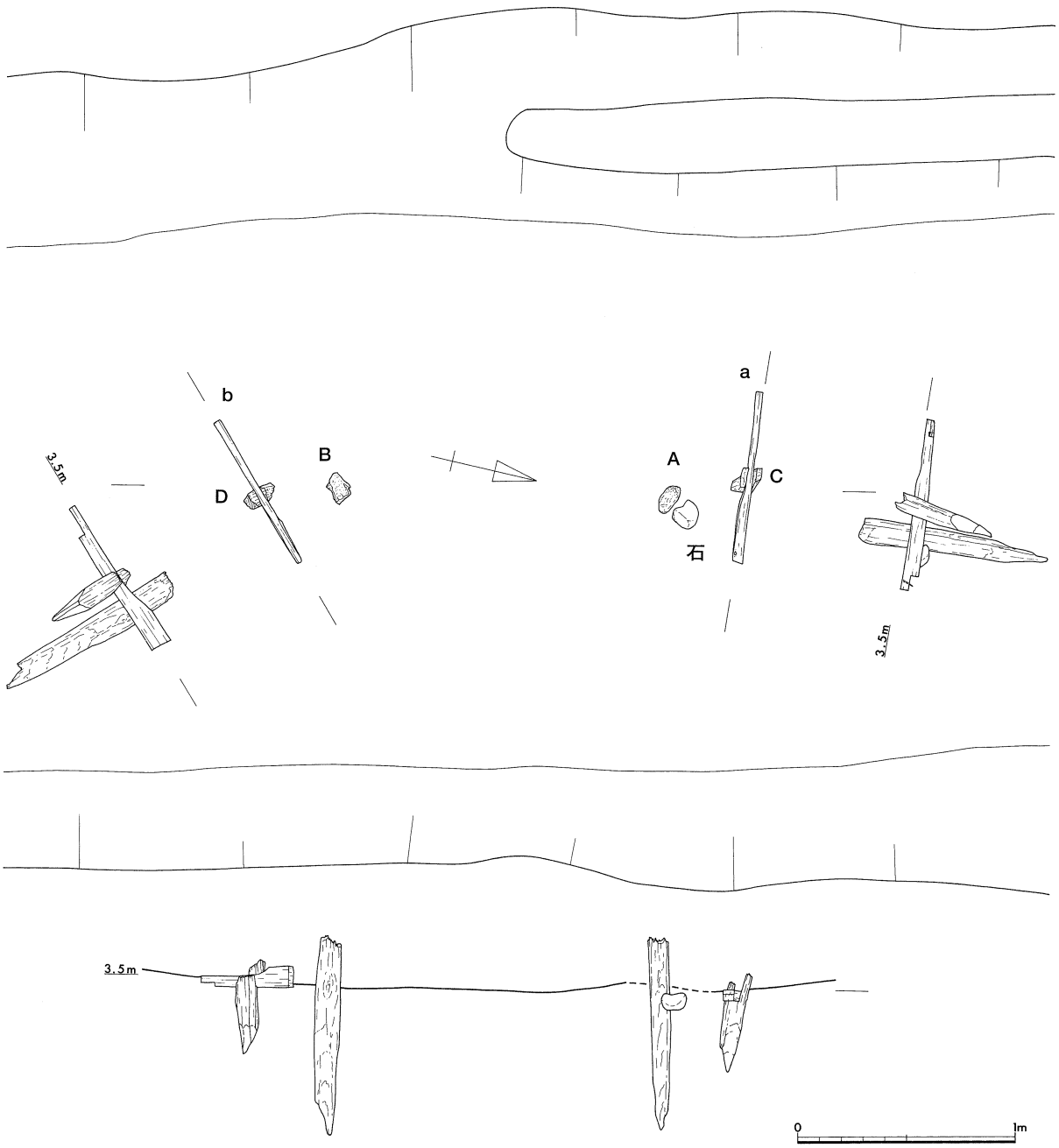


図105　B2区橋梁遺構実測図（S=1/30）

橋梁遺構　橋脚・部材　計測表

単位はcm

	長　さ	幅	厚　さ	くりこみの高さ	くりこみの幅
橋脚A	97.1	11.5	6.9		
橋脚B	91.5	13.0	6.2		
杭　C	45.2	9.2	8.5		
杭　D	46.5	11.8	7.3		
部材a	79.0	7.1～3.1	3.3	12.5	3.5
部材b	73.5	9.2～1.4	3.5	14.4	4.0

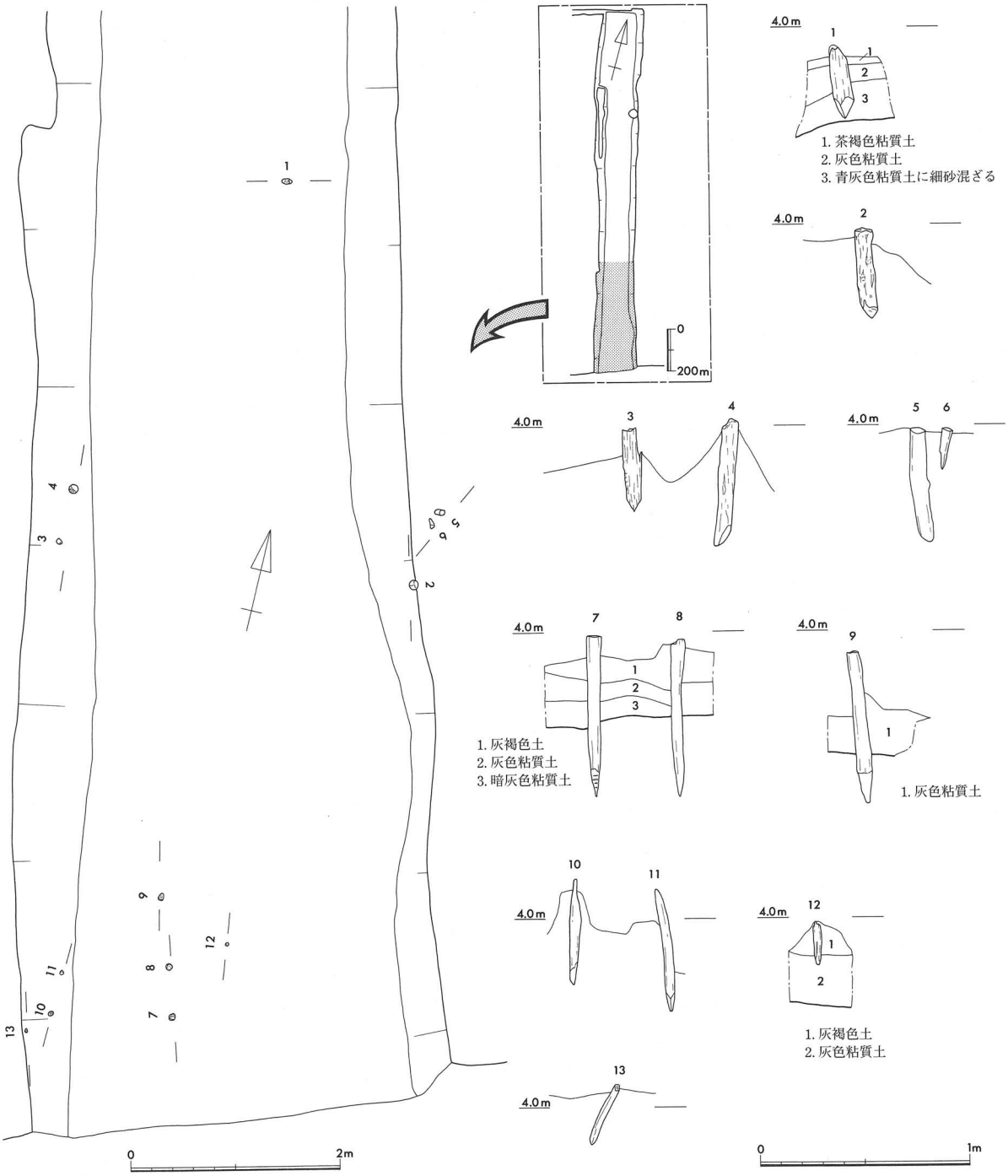


図106　B2区西大溝内の杭列遺構実測図（平面はS＝1/60、立面はS＝1/30）

そのほかの遺構（図106）　大溝の南側1／3の範囲で大溝の肩部や埋土に打ち込まれた杭を検出した。大溝内から検出した杭のうち１、２、12は先端が底面にまで到達していないことから埋没後に打ち込まれたものと考えられる。７、８、９は大溝と平行に南北方向に並んいることや、杭の先端が大溝底面を突き抜け、標高3.2mにまで達することから大溝に伴う遺構と考えたい。その他の大溝肩口の杭については時期・性格とも明確でない。

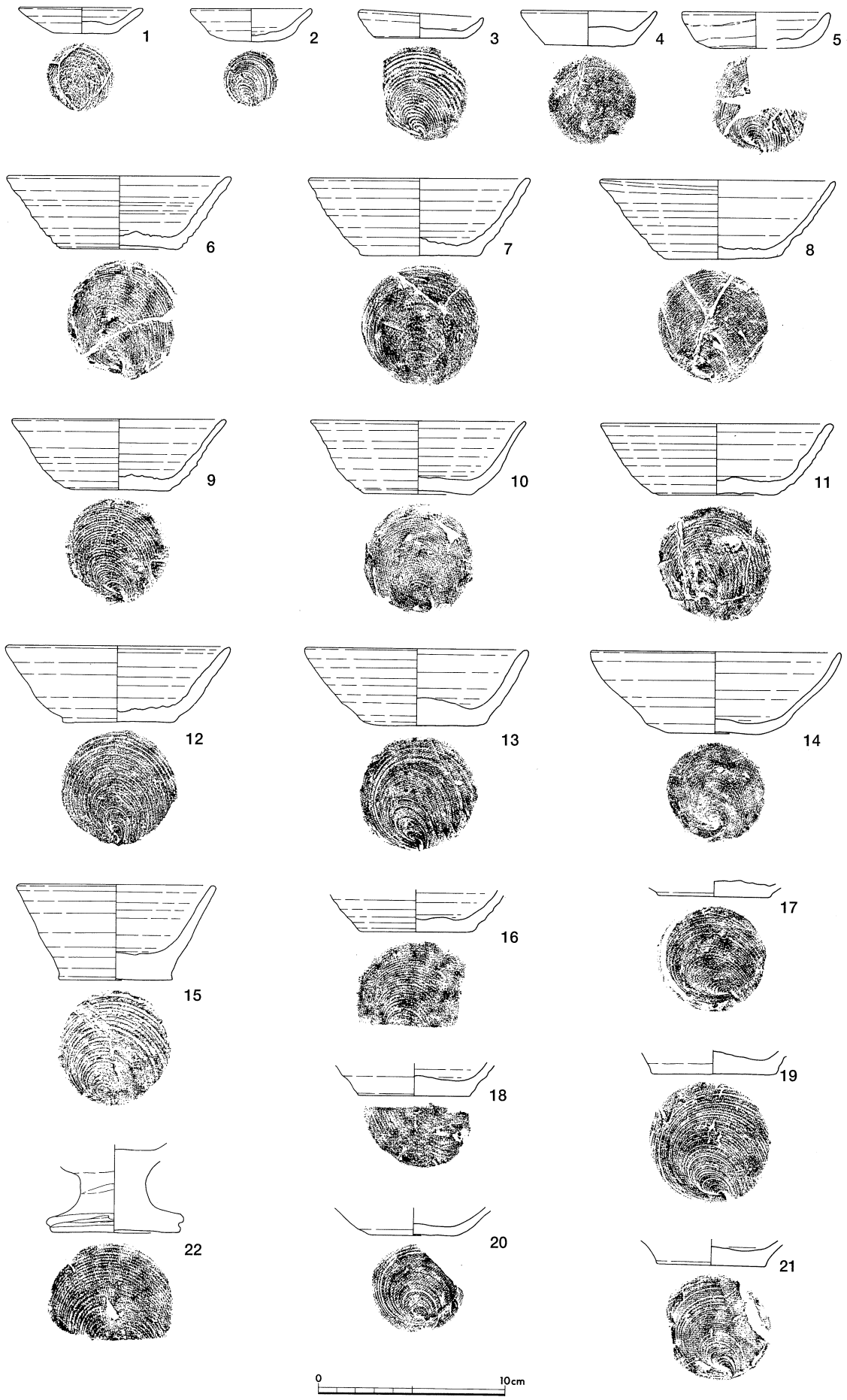


図107　B2区西大溝出土遺物実測図（1）―土師器―（S=1/3）

土師器（図107）　1から5は皿。形態、法量ともバラつきが見られる。1は逆ハ字に直線的に開く体部をもつ。2は底部と体部の境が円くおさめられ、体部中ほどが湾曲する。3も丁寧な作りで、口径に対して底径が大きい。4は底部の器壁が厚く口縁端部に向けて薄く仕上げている。体部は逆ハ字に外方に開く。5も丁寧な作りで、体部は円みがある。6から21は坏。6から8は、やや赤みがかった肌色を呈するもので、底部から口縁部に向けて逆ハ字に開く。9、10は体部が底部から外方に立ち上がった後わずかに内湾して口縁端部に至る。11は体部が円みのある立ち上りである。12、13は底部が厚くやや粗い作りである。14はロクロ成形時の痕跡を残さない丁寧な作りのもの。白色に近い色調を呈する。体部下半が凹みをもち口縁端部に至る。15は器壁の厚い体部にしっかりとした底部が付く。体部は逆ハ字に開く。白色の粗い砂粒が多く混ざる。16から21は底部から体部にかけての破片。22は台付き皿。底径6.9cm。

国産・貿易陶磁（図108）　1、2は瓦質土器。1は鉢。復元口径20.8cm。口縁端部は肥厚し玉縁状を呈する。内面は粗いハケ調整。2は底部。内外面ともナデ調整。3、4は常滑系陶器。甕の胴部。内面に輪積みの痕跡が見られる。4は甕の口縁部。端部は上下に拡張させ、拡張部分が若干内側に傾く。5は越前焼の片口の鉢の底部。内面は輪積みの跡が見られる。外面下半は横方向のケズリ。底部外縁には断面三角形の高台が付く。6から10は中国製磁器。6は白磁の皿。内面見込みに段が付く。太宰府分類のⅨ類に相当する。7は青白磁の小壺。釉調は淡い緑がかった乳白色で、外面下半部はかからない。8は青磁無文の椀。9は青磁椀。口縁部が外反することから上田D類に相当するものと思われる14世紀後半から15世紀。10は龍泉窯系青磁椀。太宰府分類Ⅰ－1類。

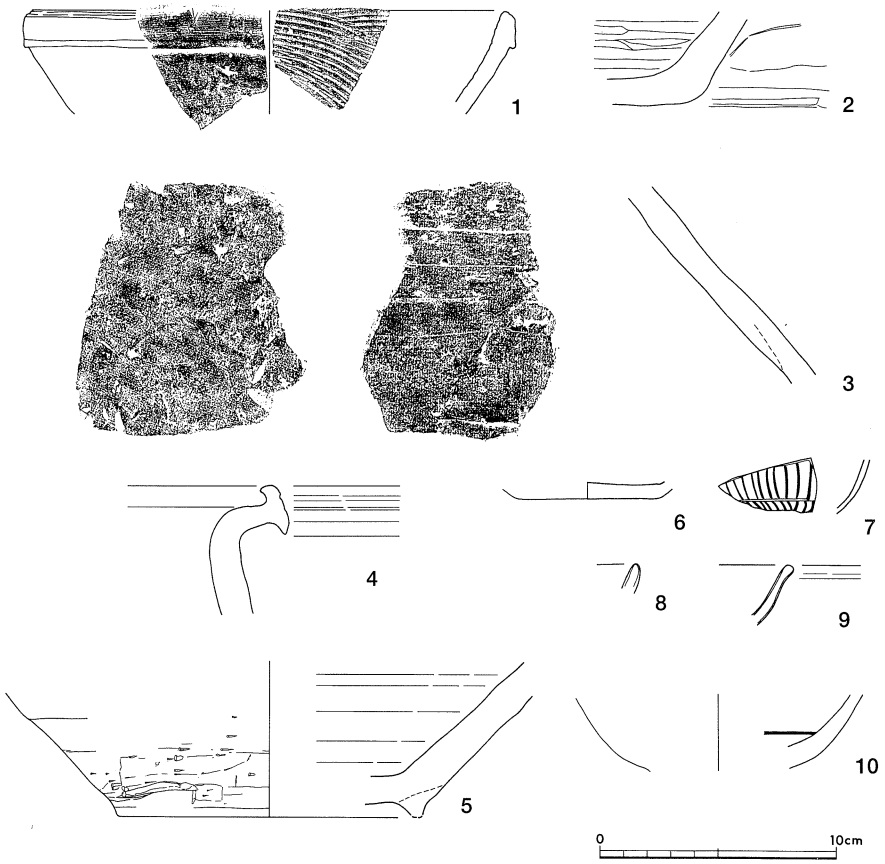


図108　B2区西大溝出土遺物実測図（2）—国産・輸入陶磁器—（S＝1/3）

木製品・漆器（図109）　4を除き総て内外面とも黒色漆塗り。4は内外面とも赤色漆である。器形は4～6以外は高台を有する椀。1は外面、2は見込み、3は内外面に赤色漆で絵が描かれている。1と3のモティーフは草花のようである。4の赤色漆塗りは漆膜が厚く、内面にはハケ塗りの跡が残っている。

木製品・その他（図110～111）　図110の1は杓子。偏平な皿部をもつ。現存長20.0cm、皿部の幅6.2cm、柄の幅は3.2cm、厚さ1.0cm前後。2から4は円形曲物の底板。2は径6.4cmの小形品。中心から7時の方向に径1cmの木釘が打ち込まれている。3は径11.9cm。中心から9時の方向に二個一対の木釘が打ち込まれている。おそらく反対側も同様の構造であったのであろう。3は径13.8cm。厚さ7.0cmと厚手である。側板との接合のための木釘、円孔は見られない。5は折敷。隅をわずかにカットすることから平折敷と考えられる。桟の有無は不明である。6、7は円形曲物の側板。6はケビキの入らないもの、7は入るものである。7は小孔が横方向に連続して空けられている。

図111の1から3は用途不明品。1は工具の柄か。現在縦方向半分に割れ上端を失っている。木

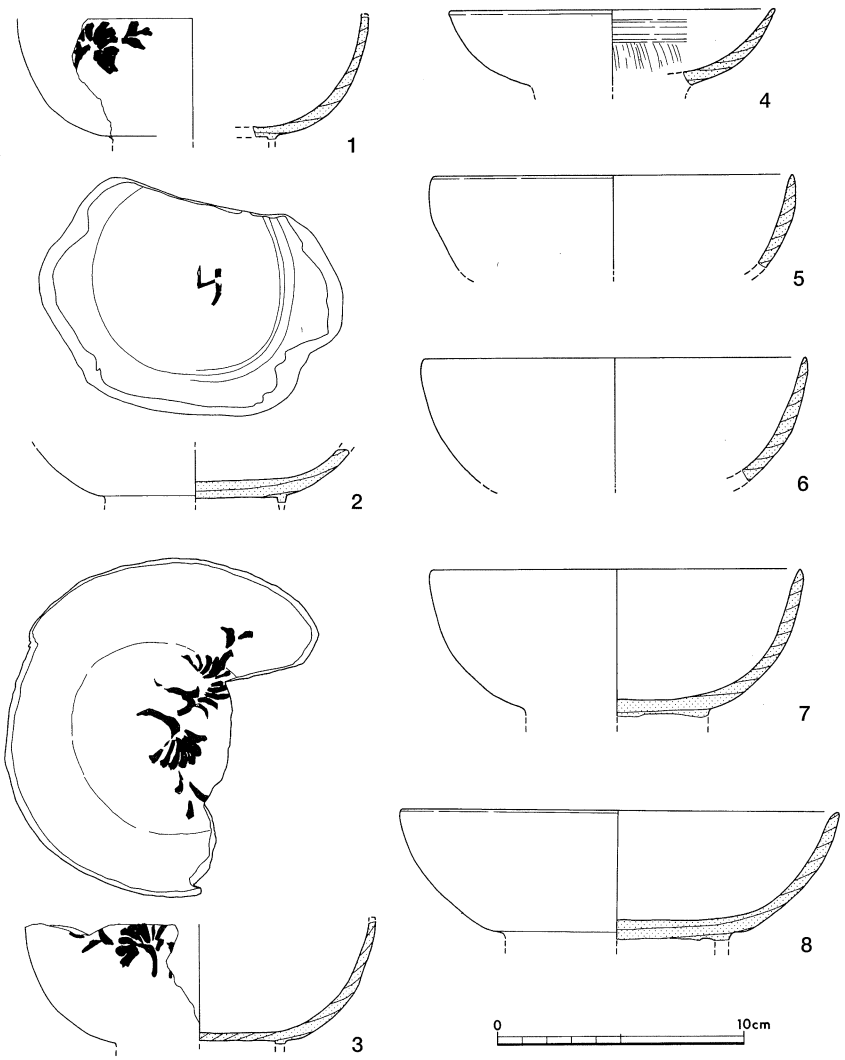


図109　B2区西大溝出土遺物実測図（3）—木製品—（S=1/3）

理と平行に丁寧な加工がなされている。2は付け札状の木製品。長さ17.7cm、幅1.6cm、厚さ0.3から0.4cmの板材の一端を山形にし、もう一方の上位の側縁のV字の切欠きをいれている。切欠きは紐かけ用と考えられる。3は不定形の直方体をなす芯持ち材である。両小口を切り落とし両側縁は割取っている。図面で右側の側面には1.5×2.0cm、奥行き1.8cmの孔が空く。余材、廃材の類かもしない。4は下駄。連歯下駄。図は手前に指先、奥にかかとがくるように履いた状態にしている。長さ16.8cm、幅7.8cm、全高4.6cm。台部は長楕円形。前歯は欠く。台の表の前顎と前緒穴の間には圧痕が見られる。二つの後緒穴には鼻緒一杯の大きな楔が打ち込まれている。後緒穴から後木口が長い。後歯は逆台形になっている。5は竹笛か。(4) 現在半分に折れ変形した状態になっており、全体に劣化が著しい。特に半分に折れた上側の部分は傷みがひどいため図面の作成を一面しか行っ

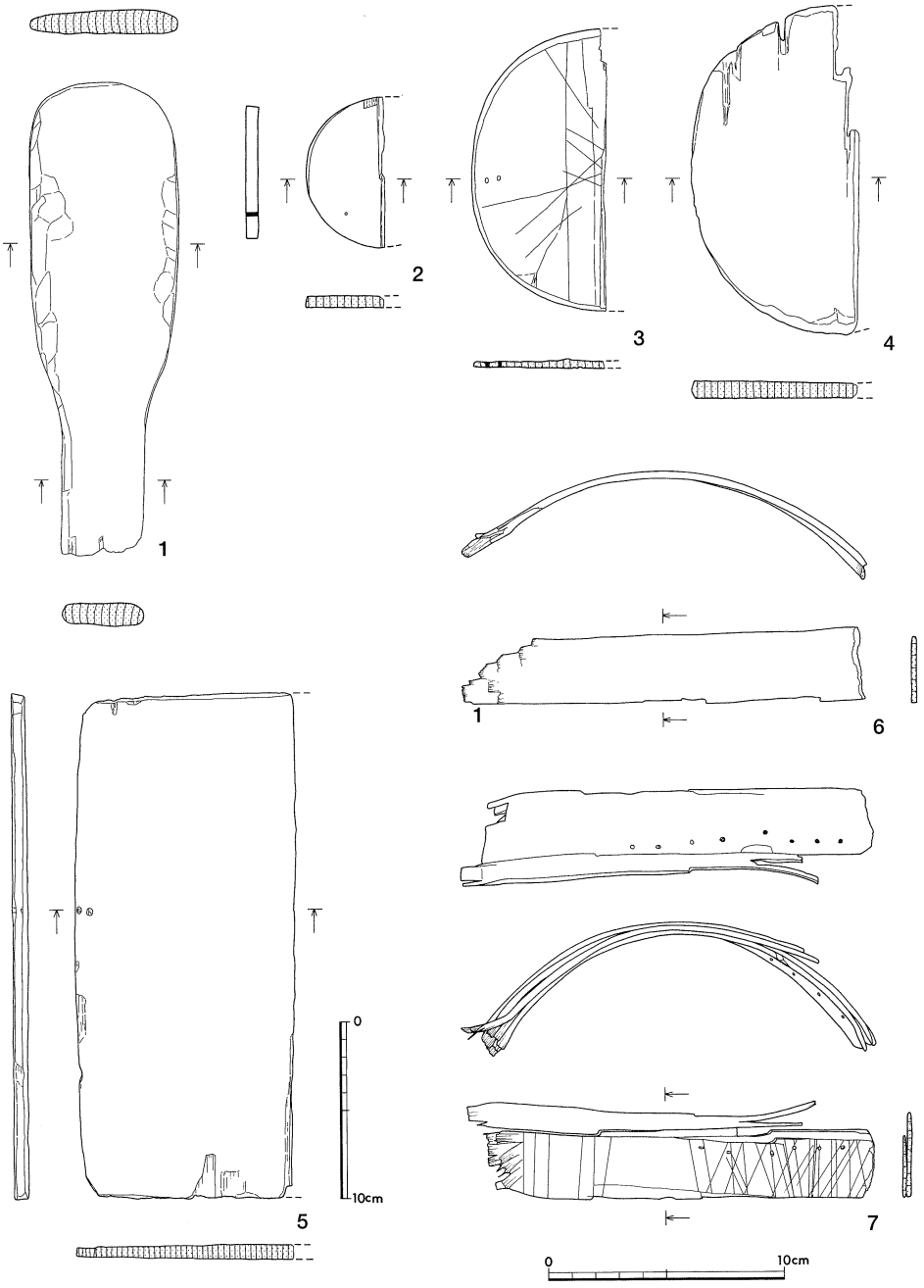


図110　B2区西大溝出土遺物実測図（4）—木製品—（S=1/30、5はS=1/4）

ていない。全長は17.6cm以上。断面は楕円形で長径1.6cm、短径1.4cm。表面には樺巻き後、黒色漆を塗布している。A面には長径0.6cm、短径0.4cmの孔が空けてある。B面には桜皮をはさんで三段に0.7～0.6cm×0.4cmの楕円形の孔が空けている。6、7は横櫛。6は大形のもので高さ8.7cm、棟の厚さ1.6cm。7は高さ4.0cm、棟の厚さ0.9cm。8は容器状の木製品の縁の一部。黒色漆

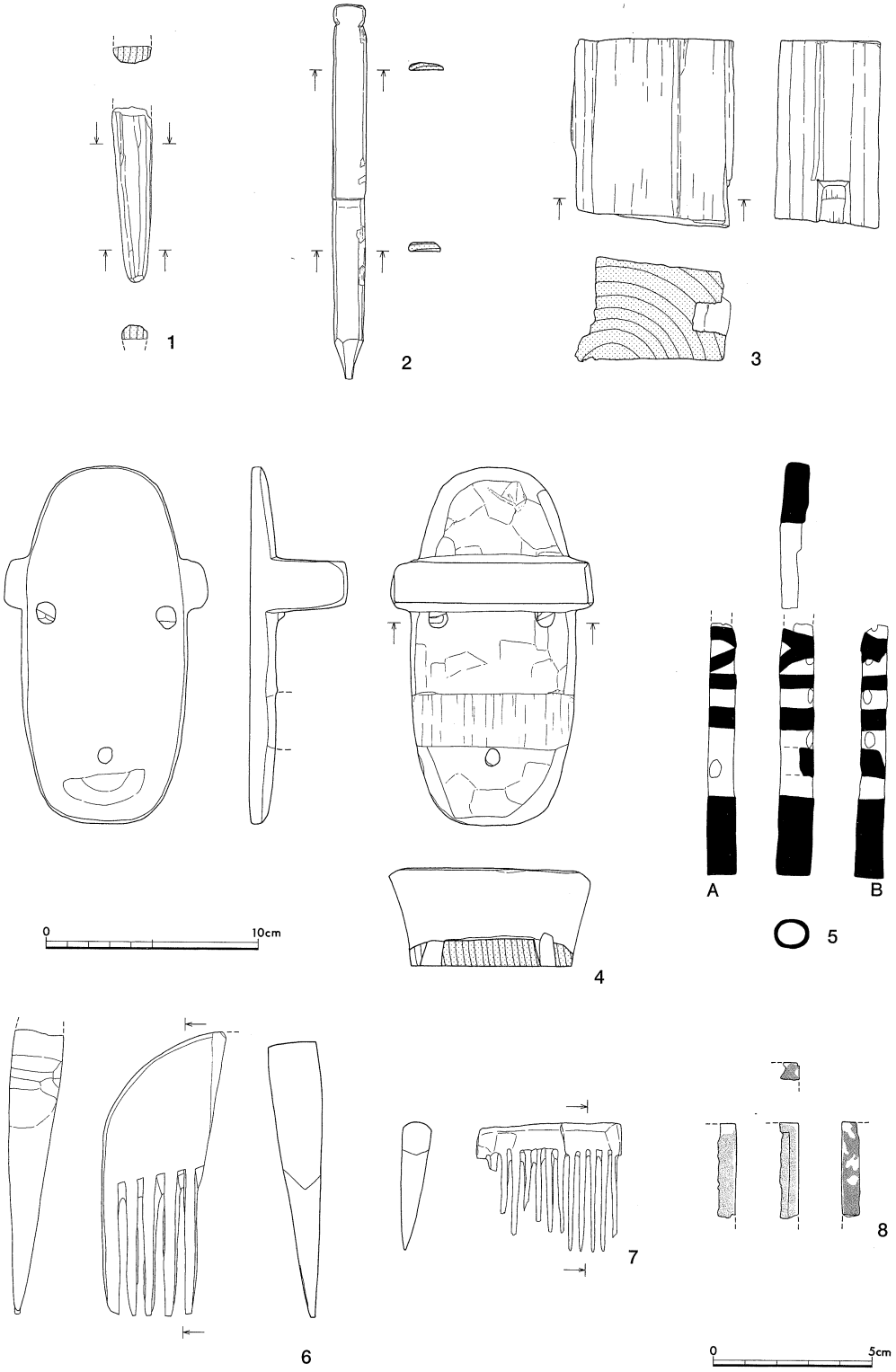


図111　B2区西大溝出土遺物実測図（5）—木製品—（1～5はS＝1/3、6～8はS＝1/2）

の上に金色漆（図のトーン部分）を塗布している。

金属製品（図112）　1は刀子。刃部の先端を欠いており現存長17.5cm。刃部の長さ11.9cm、最大幅1.9cm。茎部は長さ5.6cm、最大幅1.2cm。2は小柄。半ばで「く」の字に折れ曲がっている。表面には瓜の文様が鏨で表現されている。長さ10.3cm、幅1.7cm、高さ0.5cm。

銭貨は8枚出土している。6は模鋳銭でその他は渡来銭である。7は磨滅しており銭種不明。8は二つに割れており一部欠けている。内訳は表の通りである。

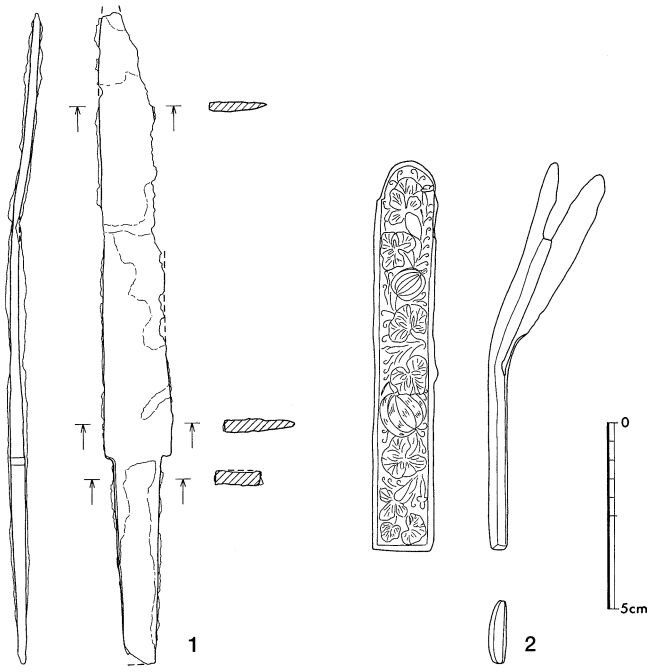


図112　B2区西大溝出土遺物実測図（6）
—金属製品—（S=1/2）

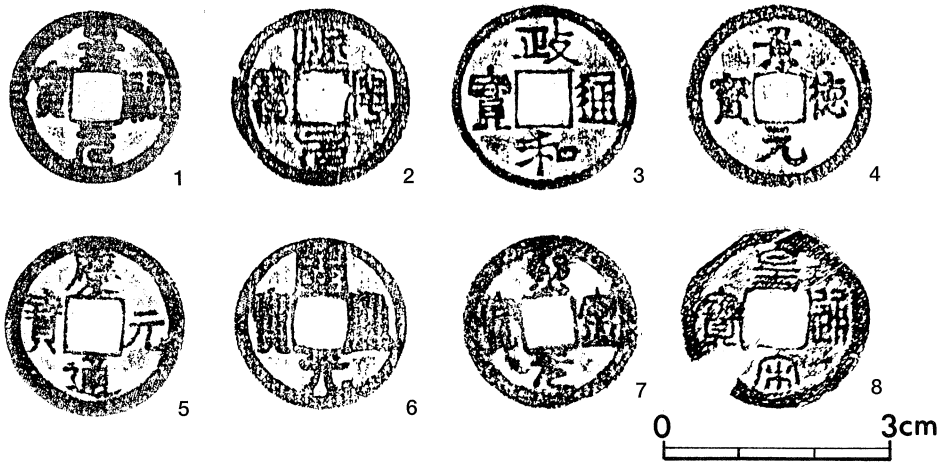


図113　B2区西大溝出土銭貨拓影（実大）

西大溝出土銭貨観察・計測表

	名　称	初鋳年	銭径(A)／銭径(B)		内径(C)／内径(D)		銭　厚	量　目
1	景祐元寶	1034	23.01cm	22.94	19.80cm	18.70	0.61～0.55	2.78 g
2	治平元寶	1064	23.71	23.88	20.31	18.92	1.21～0.92	3.99
3	政和通寶	1111	24.68	24.78	21.03	21.29	1.22～1.07	3.80
4	景德元寶	1004	24.62	24.52	20.85	20.70	0.89～0.70	2.57
5	慶元通寶	1195	23.94	23.97	19.81	19.81	0.94～0.71	3.47
6	開元通寶	621	22.95	22.98	20.04	19.61	0.85～0.72	3.02
7	□□元寶		23.35	23.68	19.99	20.08	1.40～0.99	3.34
8	皇宋通寶	1039	24.70	24.59	21.10	20.60	0.89～0.75	(2.05)

参考文献　永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会1994
表は同書の「8．古銭の計測」（9～10ページ）をもとに作成している。

5．建物

柱穴総数650あまりの検出された。特に調査区の北東部分で検出密度が高い。幾度となく建て替えが行われたのであろう。この中から８棟の建物を復原した。建物４は縁ないし庇を有するが、それ以外は身舎だけの構造である。また８棟のうち５棟が棟方向を東西にとるもの、残り３棟は南北方向である。軸方位は北方向基準で３～６°西に振るものが３棟、８から9.5°西に振るものが３棟、12から13°西に振るものが２棟となる。高い規則性をもって建物が配置されたものといえよう。低地に立地するため柱穴内には礎板、根石を備えるものが多く見られた。また柱根が遺存している場合も多く見られた。なお建物の柱間寸法等の計測値については図中に記した。規模と軸方向は表にまとめている。

建物１（図114上）　調査区北東部に位置する。３間×１間の規模を有する建物である。棟方向をＮ－9.5°－Ｗにとる。桁行き間7.88m、梁行き間約3.79m、床面積29.75m²。柱穴の形状は楕円形から円形のものまである。規模は南桁行きが径34～60cm、深さ18～31cm。北桁行きは平面楕円形で長径58～90cm、短径48～58cm、深さ21～38cmとまとまりを欠いている。北桁行きに大形のものが並ぶようである。この建物の柱穴には礎板、根石を備えたものが多く見られたのが特徴的である。その内訳は①礎板のみ②根石のみ③根石＋礎板といったパターンが見られた。①については１枚のみのものからＰ319のように３枚重ねられた状態のものまである。柱根は直立するものと、横倒しで出土したものの両者がある。次に形状と法量を見てみる。礎板の平面は長方形で15×20cm、厚さ５cm前後であった。特異な例では、Ｐ110の礎板は12～13cm角の板材の隅を落し多角形にしている。柱根の太さは14×11cm前後である。柱材の断面は多角形だがＰ74の柱根は四面を整えた12～13cm角の柱材であった。根石は22～34cm角、厚さ７～10cmの自然石が用いられている。

Ｐ58、312、52、110、111の柱穴掘り方の埋土からは土師器細片が微量出土している。１はＰ74から出土した土師器皿。口径6.8cm、底径3.8cm、器高1.7cm。体部中ほどで稜線をもつ。２はＰ83から出土した土師器坏。底部は器壁が厚い。底径6.2cm。

建物２（図114下）　調査区北東部に位置する。建物１とは切り合い関係にある。３間×１間の規模を有する建物である。棟方向をＮ－12°－Ｗにとる。桁行き間8.2～7.5m、梁行き間4.14m、床面積32.34m²。柱穴はＰ94が楕円形（63×42cm）である他は径20～39cm、深さ18～46cmである。柱穴には根石、礎板等は見られなかった。

Ｐ61、68、87の柱穴内の埋土からは土師器細片が２、３点ずつ出土している。またＰ94からは青磁片が１点出土している。口縁部の小破片。口縁部は外反しており上田分類のＤ類に相当するもの思われる。時期は14世紀後半から15世紀前半。

建物３（図115）　建物１、２の南に位置する。３間×１間の規模を有する。棟方向はＮ－13°－Ｗにとる。桁行き間9.40m、梁行き間4.38m、床面積39.33m²。Ｐ44、281、263、243、276の柱穴内には太さが16～20cm前後の非常に長大な柱根が残されていた。最も良く残っているＰ44の柱根の長さは91cm。柱根の側面が面取りされ、いびつな多角形を呈している。また、Ｐ431の柱根は加工痕が明瞭に残っていた。Ｐ44、142、261、260の柱穴掘り方の埋土からは土師器の細片が微量出土している。建物の東辺と平行に柱穴が並ぶが、この建物に付随するものか否かは不明である。この柱穴列のＰ414の埋土から中国銭の大観通寶が１枚出土している（図116）。計測値は表の通りである。

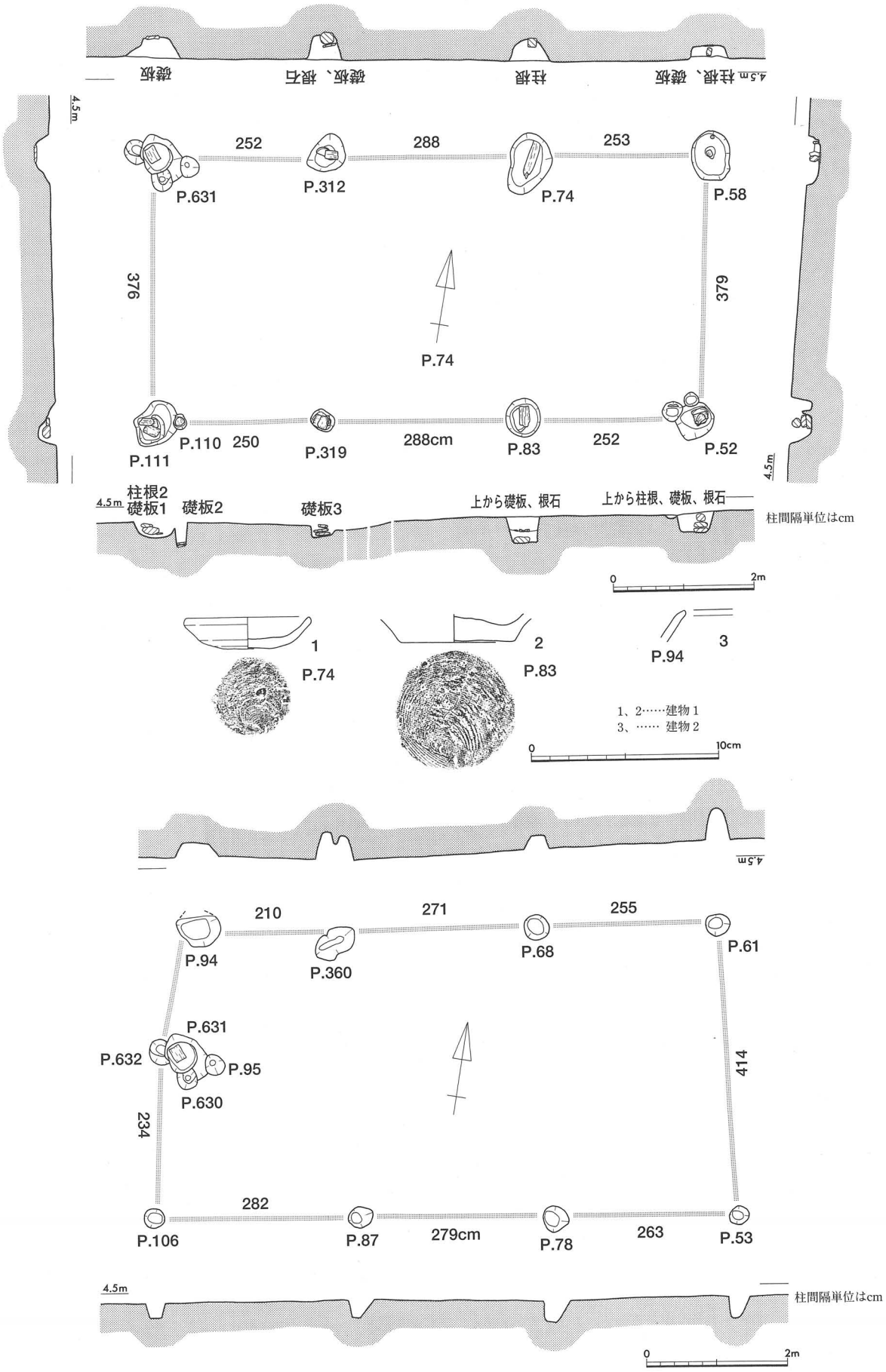


図114　B2区建物1・2実測図（遺構はS＝1/80、遺物はS＝1/3）

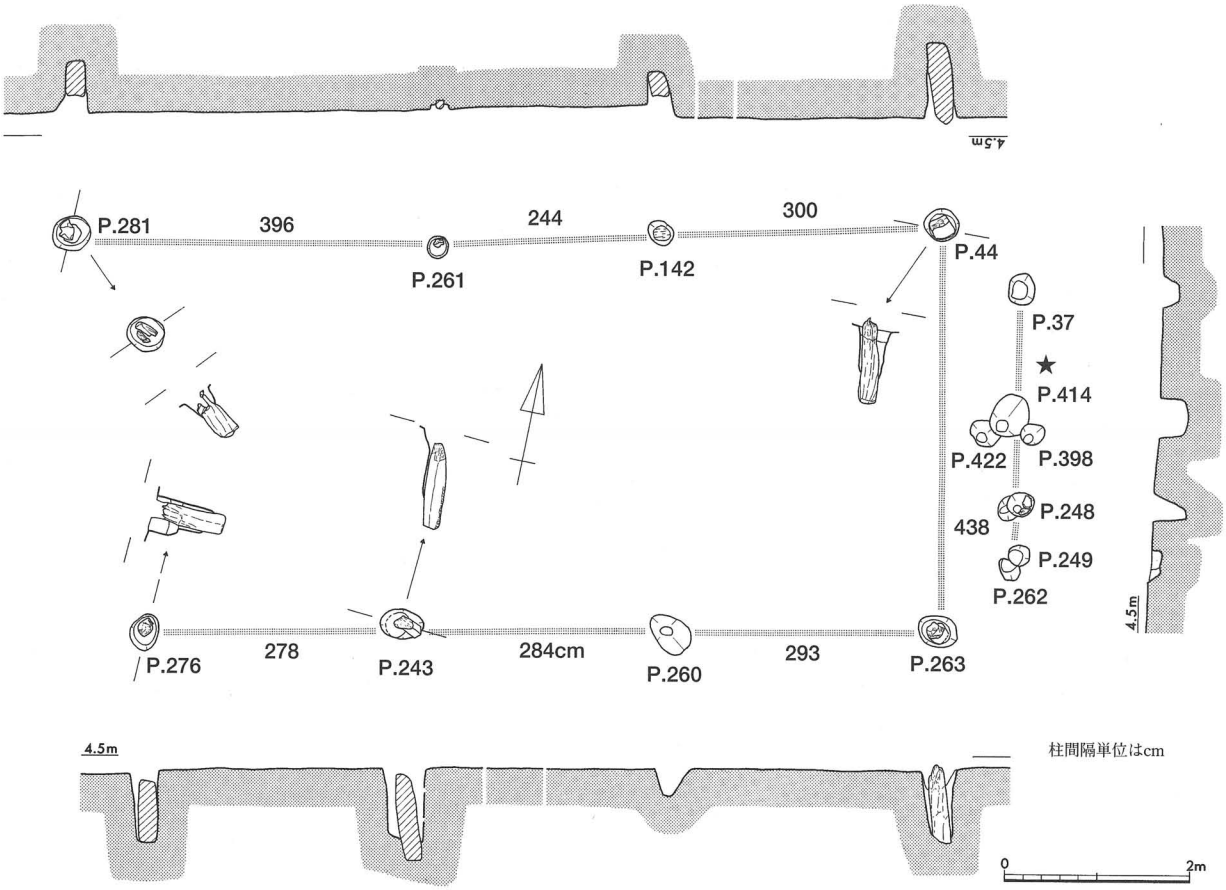


図115　B2区建物3実測図（S=1/80）

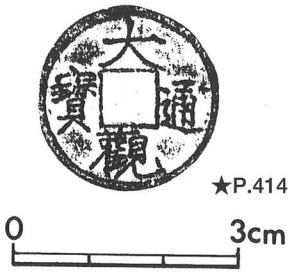


図116　B2区建物3東の柱穴出土銭貨（実大）

P 414出土銭貨観察・計測表

名　称	初鋳年	銭径(A)／銭径(B)	内径(C)／内径(D)	銭　厚	量　目
大観通寶	1107	24.85mm　24.53	21.83mm　22.54	1.05～0.92mm	3.06 g

建物１～３計測表

遺構名	桁行×梁行	規模（m）	面積（m²）	主軸方位
建物１	4×1	7.88×3.79	29.75	N－9.5°　－W
建物２	4×1	8.20×4.14	32.34	N－12°　－W
建物３	3×1	9.40×4.38	39.33	N－13°　－W

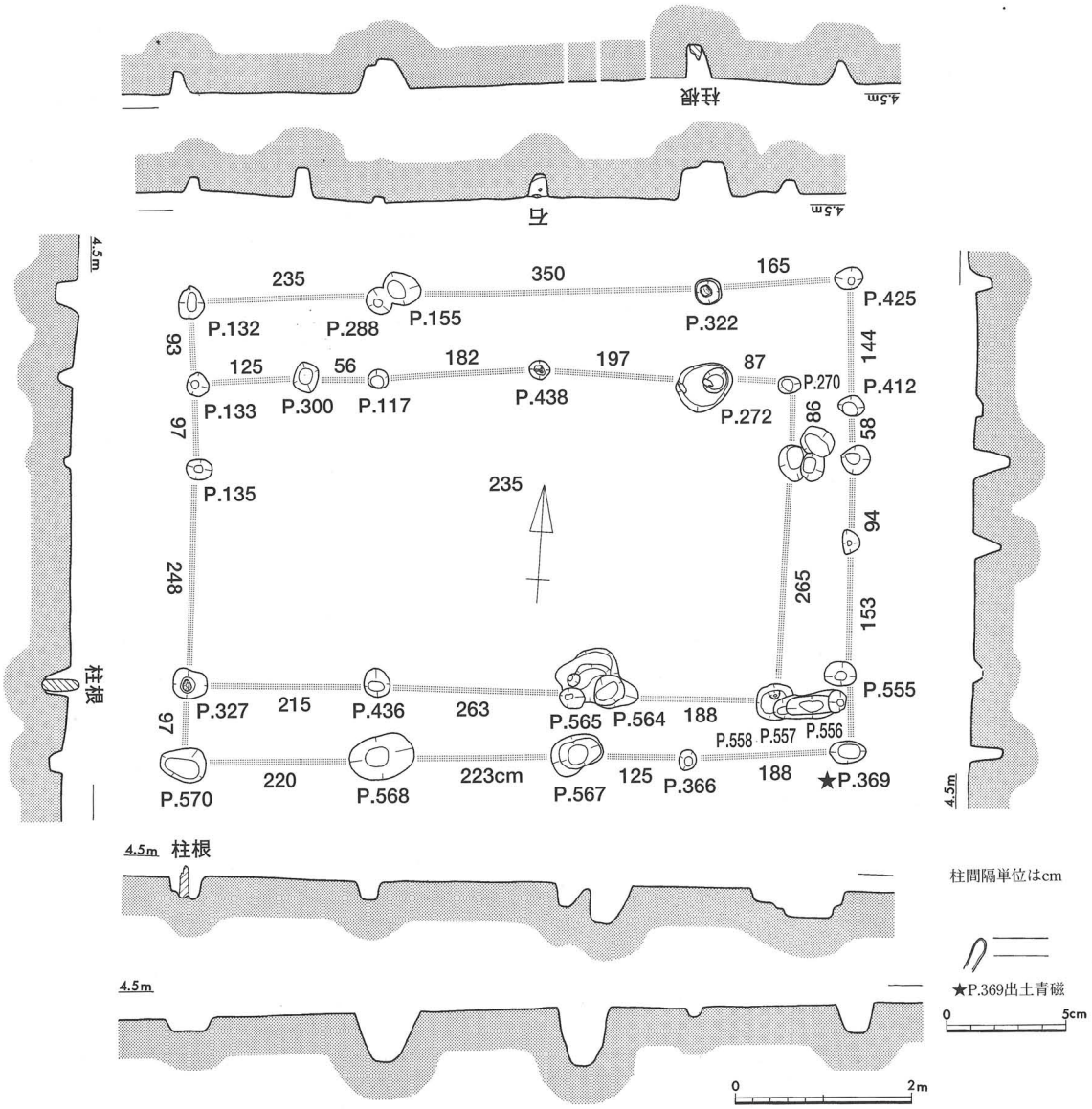


図117　B2区建物4実測図（遺構はS＝1/80、遺物はS＝1/3）

建物４計測表

遺構名	桁行×梁行	規模（m）	面積（m²）	主軸方位
建物４	４×４	7.46×5.25	39.01	N－３°－W

建物４（図117）　建物３の南に位置する。この調査区内で最も柱穴の検出密度が高い部分である。３間×２間の建物の東、南、北側に庇か縁側と思われるものが付く。棟方向はN－３°－Wにとる。梁行き間5.25m、桁行き7.46m，床面積39.01m²。柱穴は形状、規模とも不揃いであり、柱間寸法も一定でない。柱穴の内部に礎板、根石を備えたものは見られなかった。柱根はＰ322と327で遺存していた。Ｐ322、413、555、567、568、327、564、565、558、556、557、270、272、438、117、133の柱穴の埋土からは土師器の細片が微量出土している。柱穴の中に弥生土器が混入しているものも見られた。

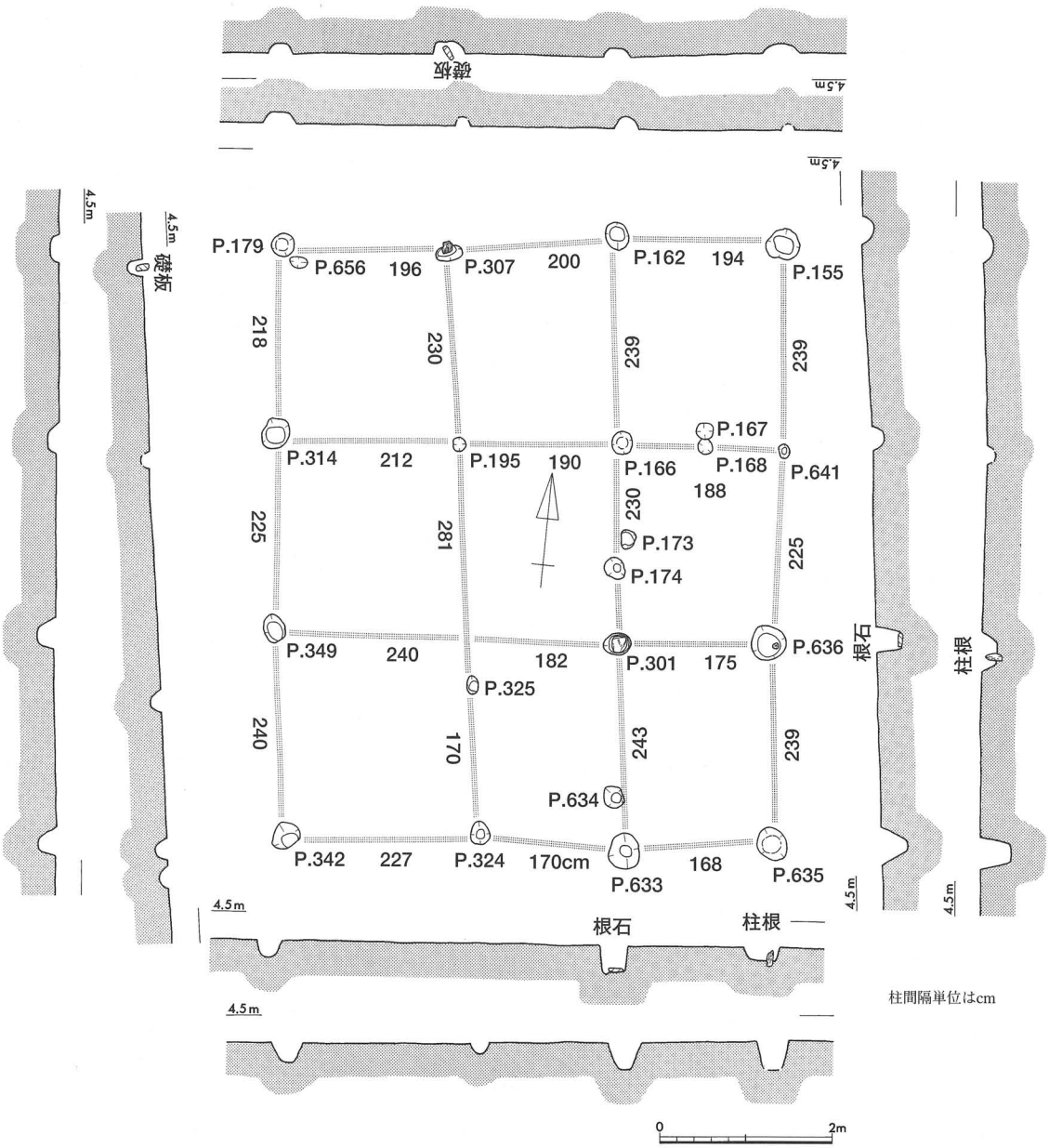


図118　B2区建物5実測図（S＝1/80）

建物５計測表

遺構名	桁行×梁行	規模（m）	面積（m²）	主軸方位
建物５	３×３	6.85×5.86	39.88	N－５°－W

建物５（図118）　建物３、４の西側3.0mに位置する。３間×３間の規模を有する。棟方向はN－５°－Wにとる。桁行き6.85m、梁行き5.86m、床面積は39.88m²。P349と301の間の柱穴は認められない。柱穴は径12～40cm、深さ11～33cmと不揃いであり、柱間寸法も一定ではない。柱穴に礎板、根石、柱根が残されていたものはわずかである。そのうちP307の柱根は筏穴を残しているものであった。

P314、634の柱穴掘り形の埋土からは土師器の細片が１点ずつ出土している。

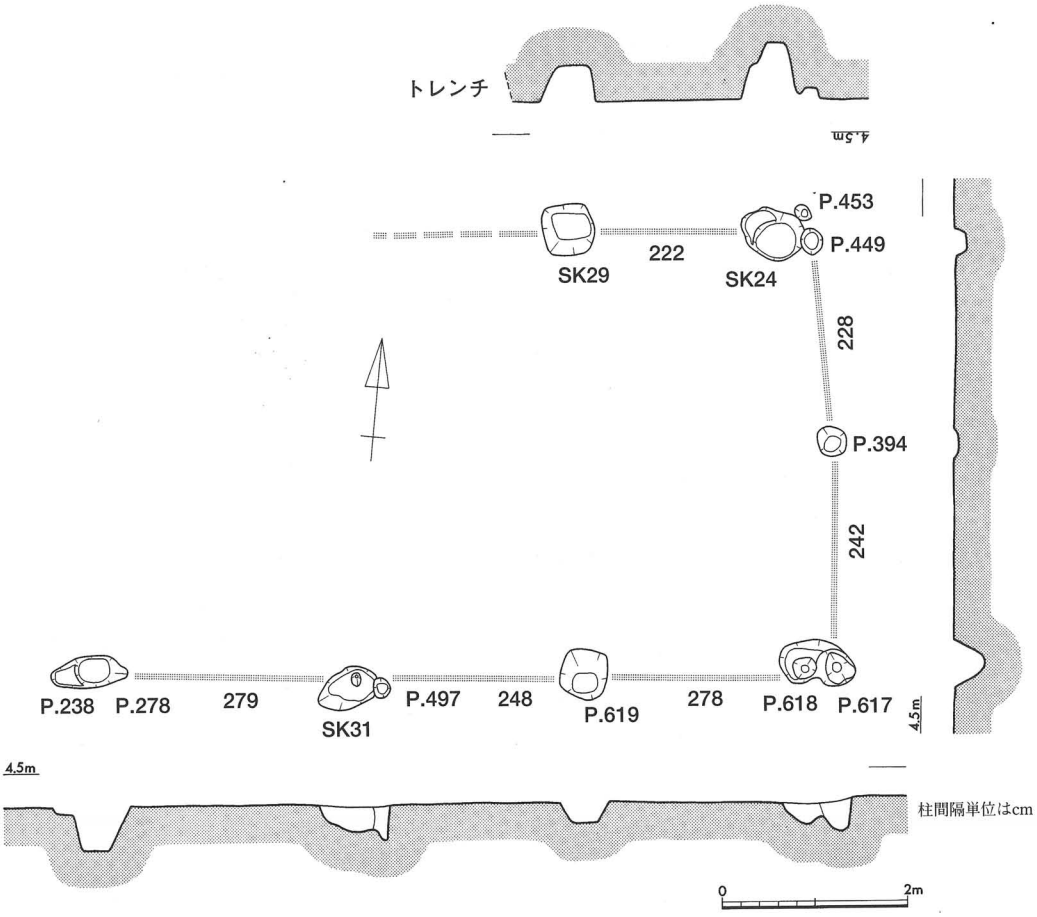


図119　B2区建物6実測図（S＝1/80）

建物６計測表

遺構名	桁行×梁行	規模（m）	面積（m²）	主軸方位
建物６	３×２	8.00×4.90	39.20	N－６°－W

建物６（図119）　調査区の中央から少し南東側に位置する。トレンチにより北側桁行きの約1／2を壊している。復元すると３間×２間の規模を有する。棟方向はN－６°－Wにとる。桁行き8.00m、梁行き4.90m、床面積39.20m²。柱穴は径33～58cm、深さ25～62cm。

Ｐ453、459、394、618の柱穴掘り方の埋土からは土師器細片が微量出土している。

建物７（図120左）　建物６の3.8m東に位置する。２間×１間の規模を有する。棟方向はN－８°－Wにとる。桁行き間4.88m、梁行き間3.01m、床面積14.34m²。柱穴はやや歪つな円、楕円形を呈しており径28～42cm、深さ17～48cm。

Ｐ388、453、463の柱穴掘り方の埋土からは土師器細片が微量出土している。

建物８（図120右）　調査区南東隅に位置する。１間×１間の調査区内で最も小規模な建物である。桁行き間2.80m、梁行き間2.17m、床面積6.06m²。Ｐ520は土坑12によって切られている。礎板、根石を備えた柱穴は見られなかった。Ｐ507に遺存していた柱根は太さ7.5cm、長さ15.5cmであった。

Ｐ514の柱穴掘り方埋土からは土師器３点と弥生土器１点が出土している。

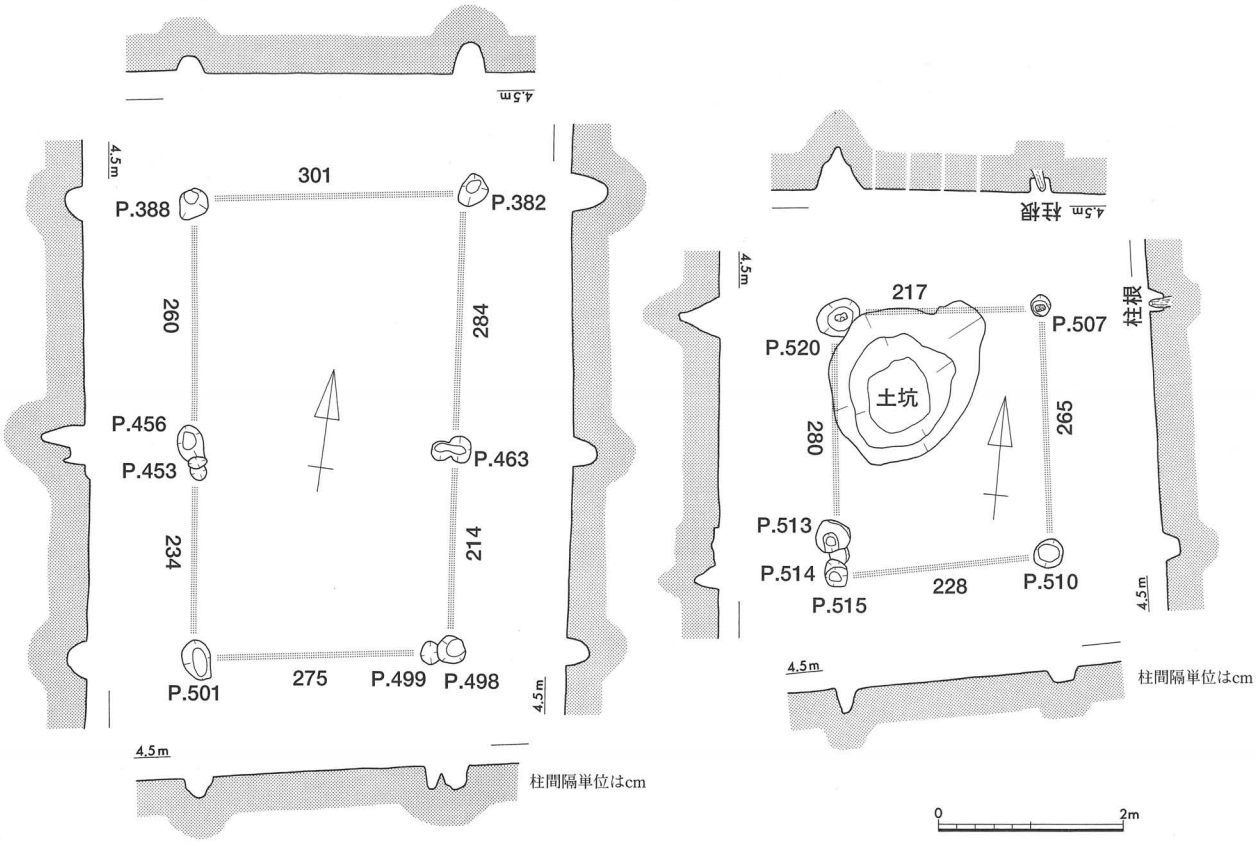


図120　B2区建物7・8実測図（S=1/80）

建物７、８計測表

遺構名	桁行×梁行	規模（m）	面積（m²）	主軸方位
建物７	２×１	4.88×3.01	14.34	N－８°－W
建物８	１×１	2.80×2.17	6.06	N－８°－W

柱穴列（図121）　調査区北西側の西大溝と溝１の中間あたりに位置している。南北方向に２間、4.68mの規模を有する。P 351には根石が置かれていた。またP 351の柱穴掘り方埋土からは土師器小破片２点が出土している。

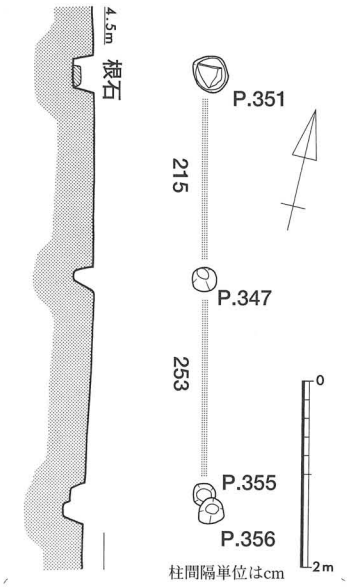


図121　B2区柱穴列1実測図（S=1/80）

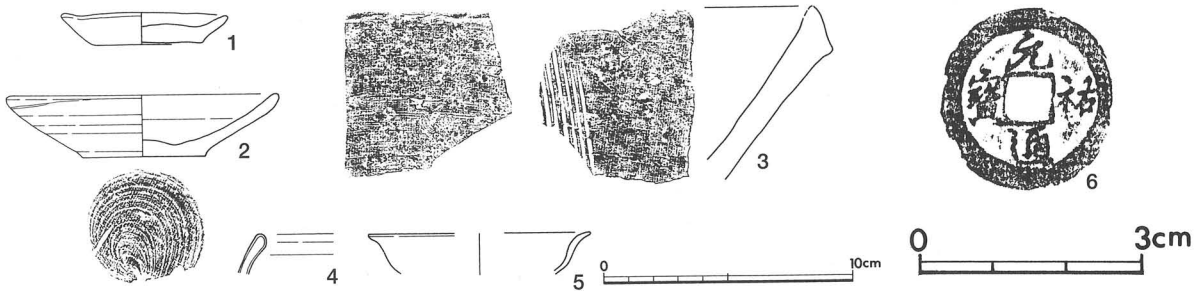


図122　B2区柱穴出土遺物実測図（1～5はS＝1/3・6は実大）

柱穴内出土銭貨観察・計測表

名　称	初鋳年	銭径(A)／銭径(B)	内径(C)／内径(D)	銭　厚	量　目
元祐通寶	1068	24.82mm　24.55	19.39mm　18.88	1.22～0.93mm	2.50 g

柱穴出土遺物（図122）　柱穴は総数650余り検出された。このうち大形の柱穴や柱根、礎板、根石の有無等を手がかりにして上記の建物を復元した。建物以外の柱穴掘り形の埋土中からも遺物は出土している。遺物は土師器小破片が中心だが中国製磁器、国産陶器もわずかに見られた。このうち実測可能な遺物について図122に掲げた。

1は土師器の皿、2は坏。1は底部が厚く体部は逆ハ字に開く。口径6.7cm、器高1.3cm、底径4.4cm。2は内外面にススが付着し赤変している。体部は逆ハ字に開く。3は備前焼の擂り鉢。内面に7条以上の放射クシ描き条線をもつ。備前Ⅳ期、15世紀前半か。4は青磁椀。口縁部が外反するもので上田分類のD類に相当するものと思われる。14世紀後半から15世紀前半。5は白磁。端反りの口縁をもつ。15世紀末を中心とする時期か。[5]　6は中国銭の元祐通寶。計測値は表の通りである。

中国製磁器と国産陶器から15世紀代まで機能したことが考えられる。

4．土坑　土坑は全部で24基を検出した。このなかには井側等の内部施設を持たない井戸も含めている。また屋内土坑に相当するものは確認できなかった。土坑の分布を見ると西大溝の東に位置するものと、西に位置するものに大別される。大溝の東側の分布状況からは、特に集中する区画が見られるような傾向は伺えない。個々の土坑の機能については明確にし得ない。しかし、当初の機能を喪失した後には館内のゴミを投棄する廃棄土坑になったようである。そのほか、土坑の中には掘り方の壁が上場のラインよりもオーヴァーハングするものが見られた。これは掘削当初からの形状ではなく、その後の崩落に伴うものであろう。また、土坑は涌水層に達するまで掘り下げられているものが大半であった。調査も涌水の影響を受け、土坑底面の形状等の記録が不十分なものとなっている。

以下、西大溝から東側の土坑について西から順に見ていきたい。

土坑１（図123・124・125）　調査区内で土坑９と並び遺物およびゴミの多く出土した遺構である。平面は円形。南北1.87m、東西1.74m、深さ81cmの規模をもつ。底面の標高は3.35m。壁はほぼ垂

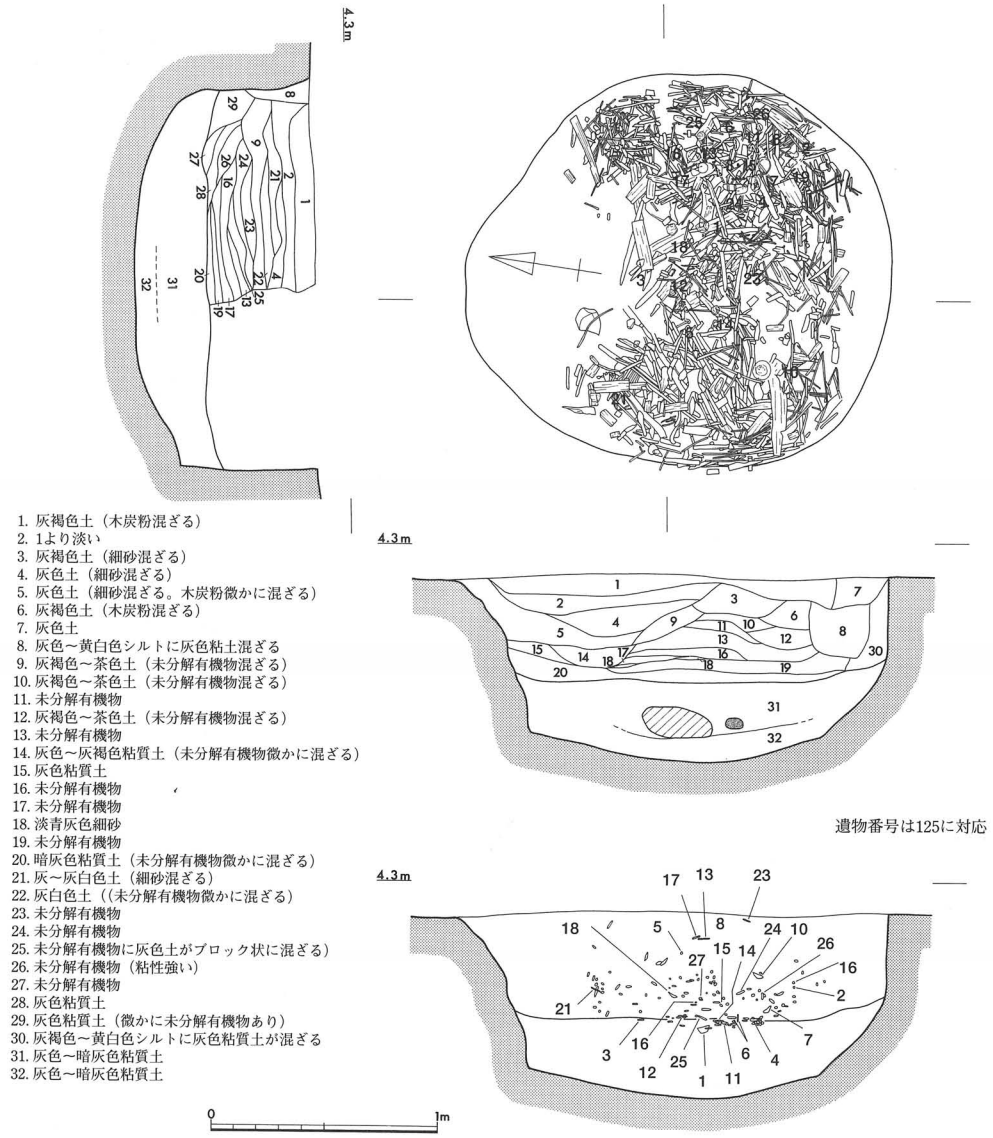


図123　土坑1実測図（1）～遺物出土状況～（S=1/30）

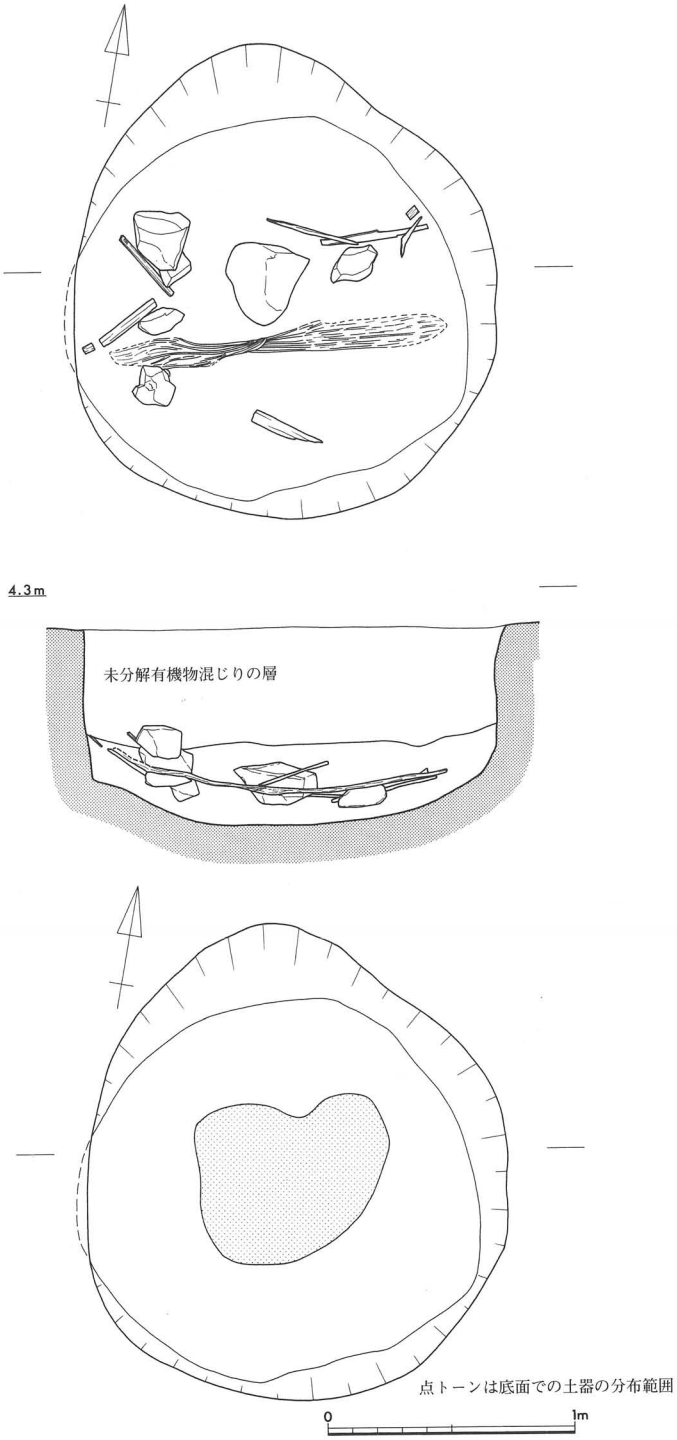


図124　土坑1実測図（2）（S=1/30）
～未分解有機物層除去後及び底面～

直に掘り込まれ底面は皿状を呈する。埋土は細分しているが上層から地山の細砂混じり灰色粘質土、未分解有機物層、比較的均質な粘質土層の三つに大別できる。このうち未分解有機物層は間層を挟みつつ厚さ30cmにも及んでいる。土坑の性格は不明だが、本来の機能を失い、均質な粘質土層である程度埋まった段階から、ごみの投棄が開始されたようである。土層断面でごみの上面を追いかけると土坑中央よりやや南側辺りが高く、厚さも厚いことがわかる。この部分がごみの山の頂部にあたるようである。ごみの間には薄い細砂がサンドイッチ状に挟まれていることから、ごみは数次にわたって投棄されたものと思われる。また最下層の灰色～暗灰色粘質土中には35～20cm角の自

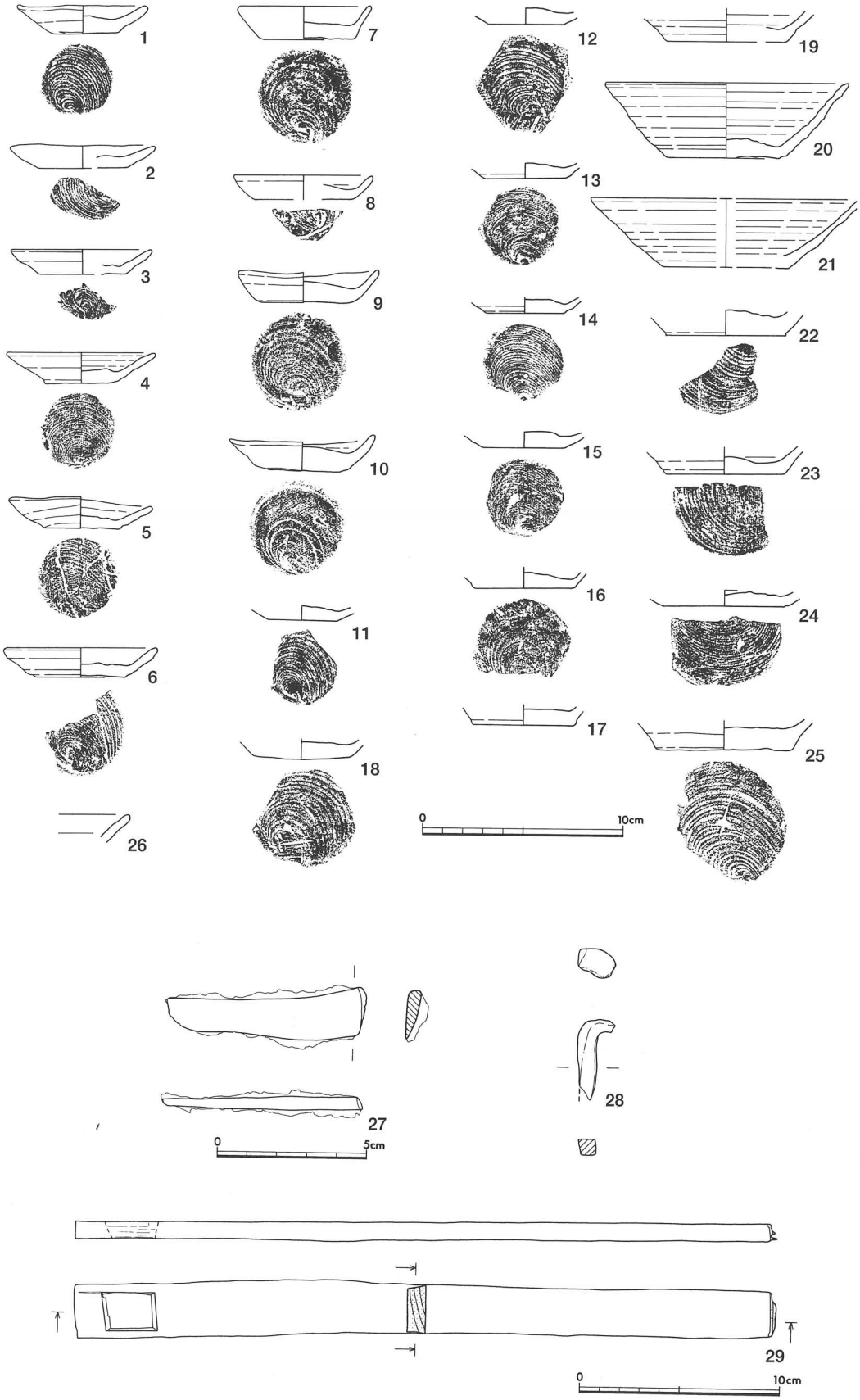


図125　B2 区土坑1遺物実測図（S＝1/3、27・28はS＝1/2）

然石が６個出土し、その周囲から木製品（図125の28）のほか、長さ約1.2mのわら状の植物を束ねて中央でねじった状態のものが検出された（図124の上段）。これらは同一レヴェルであることから同時期に投棄されたものと考えられるが、底面から浮いた状態であり、遺構本来の機能とは関係ないものと思われる。また土坑の中央底面には、非常に脆弱な状態の土師器が南北65cm、東西80cmの範囲で散らばって出土した（図125の下段）。

出土遺物の大半は土師器である。１から18は皿、19から25は坏である。１から６は色調は赤茶色を呈し器壁は薄い作りである。体部は逆ハ字状に開くものでロクロ成形痕を残している。口径6.4～7.6cm、器高1.2～1.6cm、底径3.5～4.5cm。口径に対する底径の比率は１：0.5～0.7である。７から10は肌色を呈し、底部が厚手の作りである。体部は前者よりも立上りが強くなる。口径6.7～7.5cm、器高1.2～1.9cm、底径4.7～5.1cm。11から18は底部。11から15は赤茶色、16から18は肌色を呈する。19から21は赤茶色を呈し器壁は薄い作りである。体部は逆ハ字状に立ち上りロクロ成形痕を残している。20は口径12.2cm、器高3.7cm、底径5.3cm。22から25は全形は伺える資料はない。色調は肌色から灰色を呈し底部は厚手の作りである。26は同安窯系青磁皿。

27、28は金属製品。27は刀子、28は角釘。釘は角釘で頭部がＬ字状に屈曲する。

木製品は29のみ図化している。長さ35.0cm、幅2.3～2.8cm、厚さ0.9cmの板材に1.9×2.7cm長方形の孔を穿っている。

土坑２　溝１と同じ覆土であることから同時期に機能していたものと考えられる。平面はややいびつな円形で、南北1.55m、東西1.35m、深さ34cm。底面の標高は3.75m。最下層は流れ込みや崩落による細砂混じりの粘質土であり、その直上には木屑や葉っぱなどの未分解有機物が堆積していた。その上から漆器椀が、最上層から土師質の擂り鉢が出土している。１の擂り鉢は在地産と考えられる。２は外面に赤色漆による絵が描かれている。

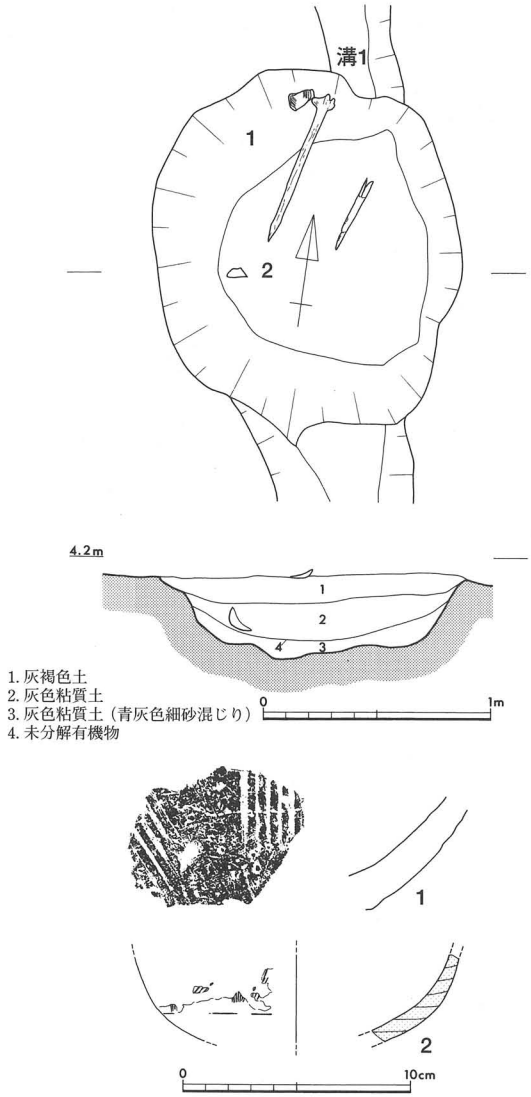


図126　B2区土坑2遺物実測図
（遺構はS＝1/30、遺物はS＝1/3）

図127の土坑３から５は土坑１の北西に位置するものである。

土坑３　平面形は円形。径85cm、深さ80cmの小土坑である。底面の標高は3.4m。埋土は４層に分けられるが、最下層には未分解有機物が多量に混ざった灰色～黒色粘質土が堆積していた。

土坑４　平面形は楕円形。規模は東西1.0m、南北0.75m、深さ1.15mである。土坑底面は

中央より西側のみ一段深くなる。標高は3.05m。埋土は5層に分けられ、3層より下層が粘質土層となる。

遺物は第1層より白磁小破片が出土している。

土坑5　ほぼ円形。東西1.53m、南北1.42m、深さ86cm。底面の標高3.25m。断面は逆台形をなす。埋土は5層に分けられるが、このうち第5層は未分解有機物が多量に混ざっていた。

土坑6（図128）　南北2.45m、東西2.65m、深さ85cmの大形の土坑である。二段掘りで深さ25cmの辺りまで垂直に掘り込まれた後、皿状となり底面に至る。土坑底面は水平でなく中央部分の南北80cm、東西70cmが一段深く凹地状となる。底面の標高は3.43m。土坑底面には基盤層の崩落などによる細砂混じりの粘質土が堆積した後に未分解有機物層が堆積していた。このことは土坑1と同様に遺構本来の機能を失った後にゴミが投棄されたことを示すものといえる。この上面では土師器小皿（2）と坏（4）が出土した。出土状態を見ると投げ捨てたのではなく置いたかのようである。このほか遺物は第1層から1の皿と5、6の鉄釘が出土している。

1、2は皿。1は口径7.3cm、器高1.4cm、底径4.6cm。体部は逆ハ字に開く。底部の器壁は厚い。2は口径8.0cm、底径5.3cm、器高1.9cm。底部外縁から体部の立上りに強いナデで稜を作る。体部は円みがある。口縁端部を中心にススが付着しており灯明皿として使用されたようである。3、4は坏。3の口縁端部はすうっと引き延ばし、体部は逆ハ字に開く。4は器壁が薄く非常に堅緻な作り。復元口径は15.0cm。内外面にススが付着する。5と6は鉄釘。5は頂部をL字に折り曲げたもの。長さ4.0cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm。6は頂部を欠いている。

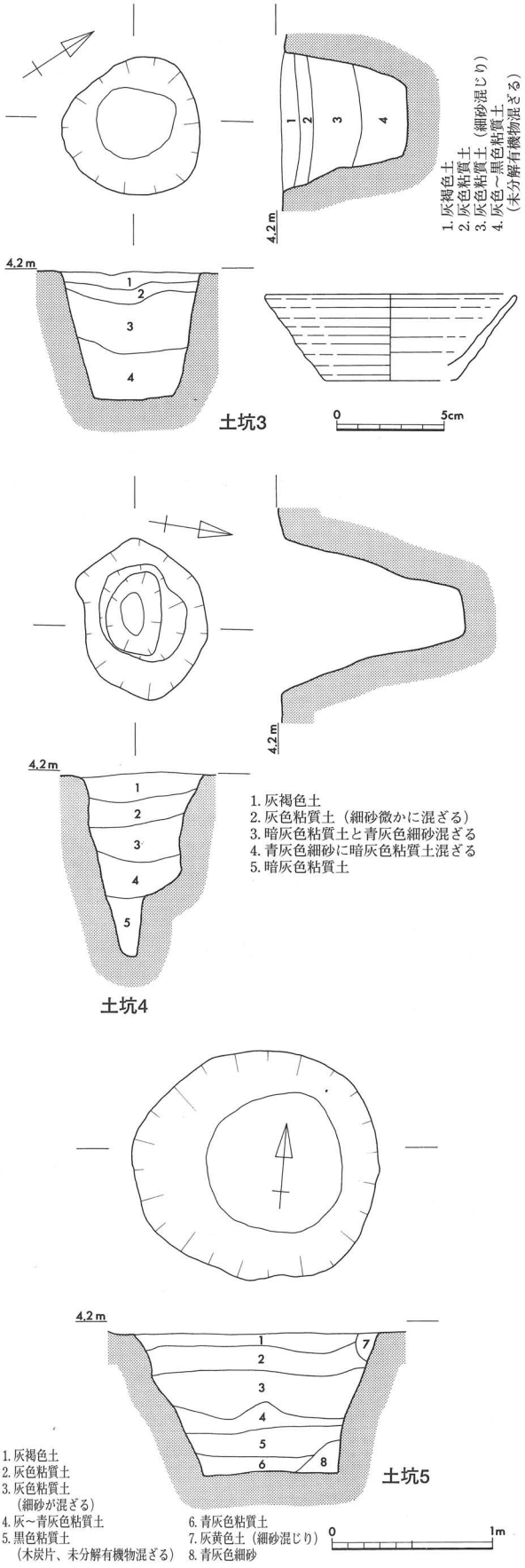
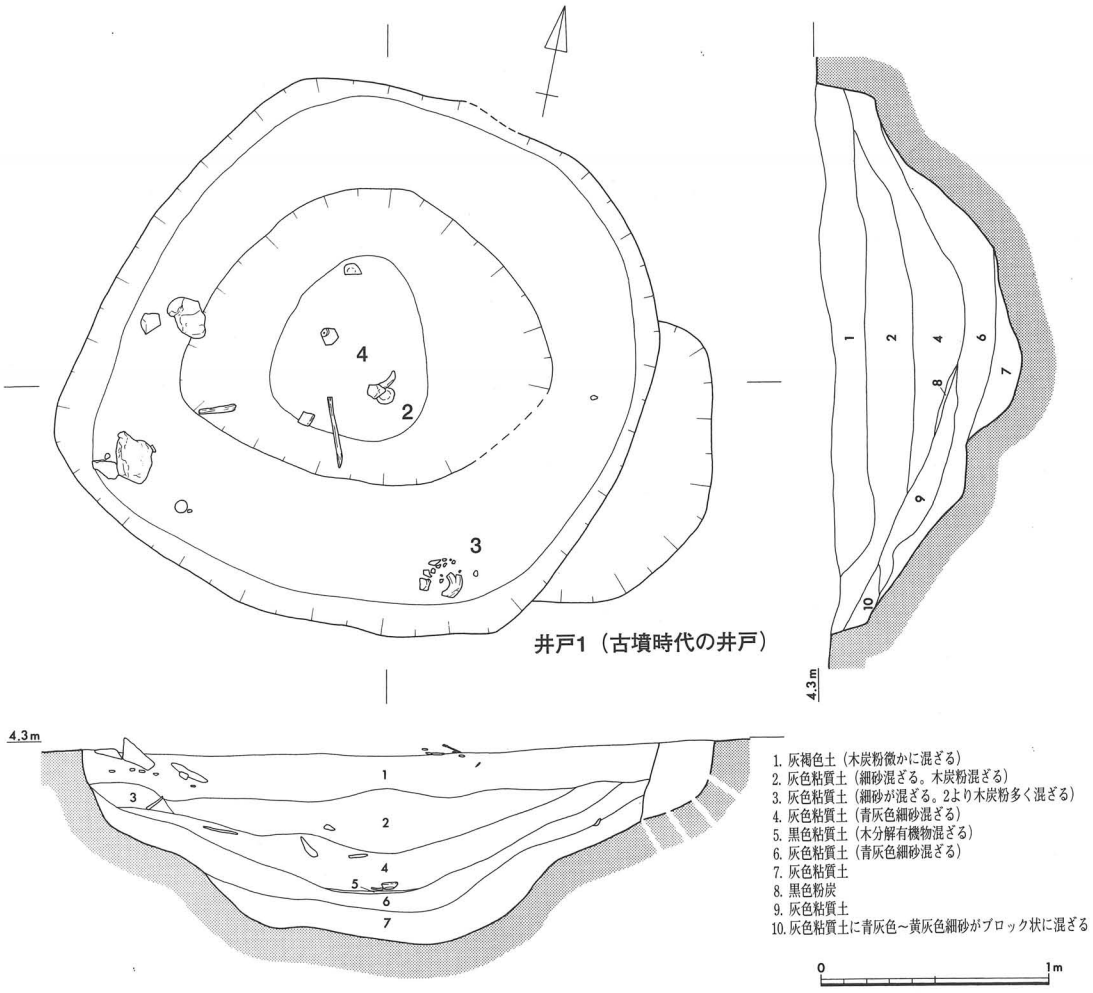


図127　B2区土坑3～5実測図（S=1/40）



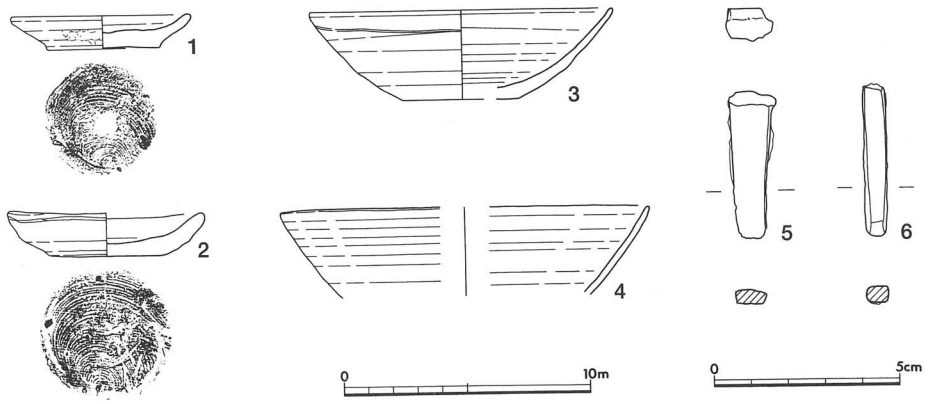


図128　B2区土坑6・遺物実測図（遺構はS＝1/30、遺物1～4はS＝1/3、5・6は1/2）

土坑７（図129）　土坑６の北東に並んで位置している。墓４と切り合い関係にあり、本遺構のほうが旧い。平面はいびつな楕円形。南北3.12m、東西2.69m、深さ90cmの非常に大形の土坑である。底面の標高は3.4m。掘り形は二段掘りで検出面から深さ40cmの辺りまで垂直に掘り込まれた後、幅35cmの段をもち底面に至る。この段に対応して第４層が堆積する。底面に基盤層の崩落に伴う堆積土（第６層）が15cmほどあり、その上面に未分解の有機物が皿状に堆積していた。その面から厚さ30～40cmほど未分解有機物混じりの粘質土層が見られる。この層の大半は竹や葦などで構成されていたが、板材なども散見された。これらは木製品を作る際に出る廃材の類と思われる。遺構本来の機能は不明だが土坑１、６等と同様に最終的にゴミ穴として利用されたものと考えられる。出土品のうち図示したのは図130の通りである。

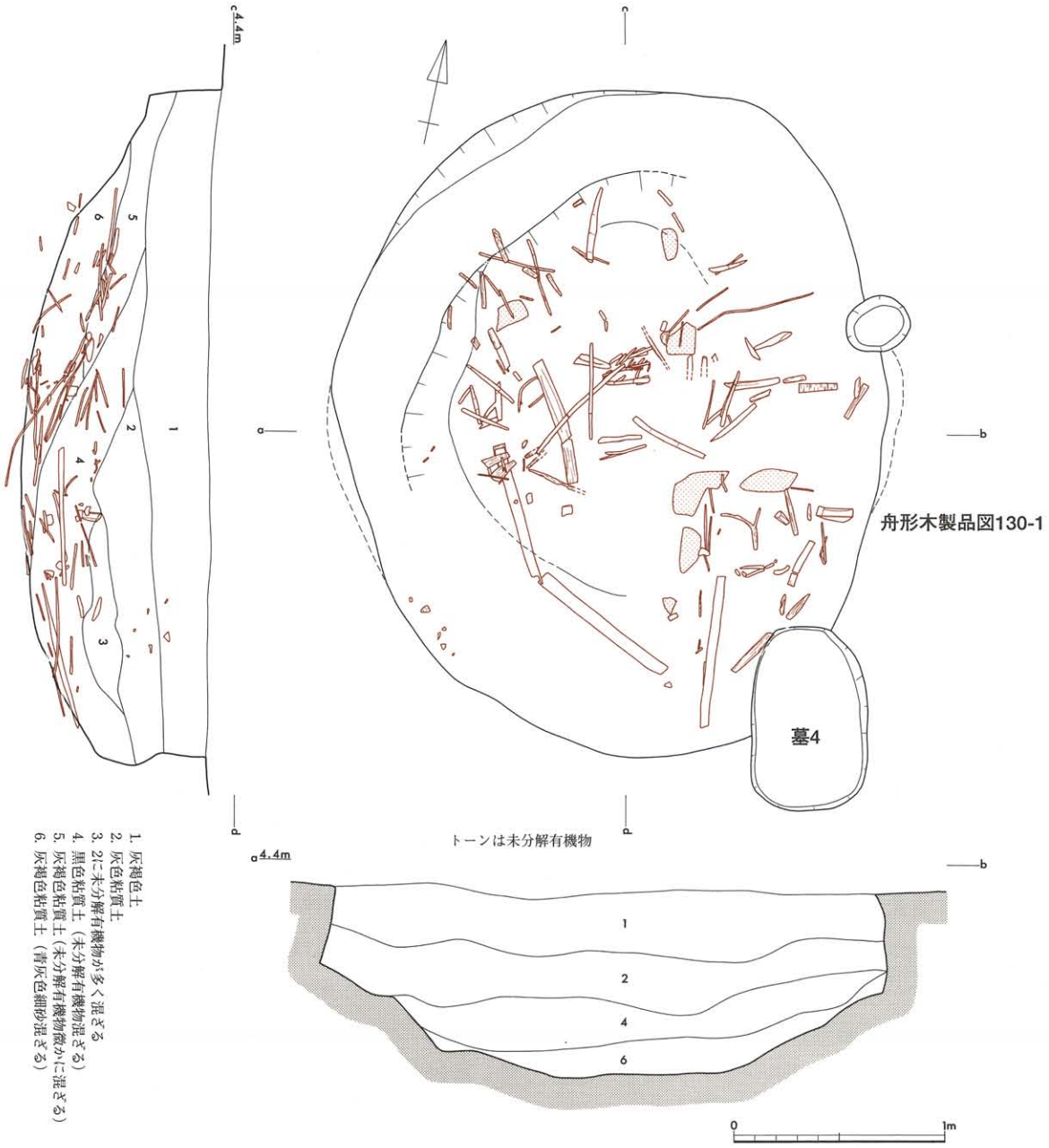


図129　B2区土坑7実測図（S＝1/30）

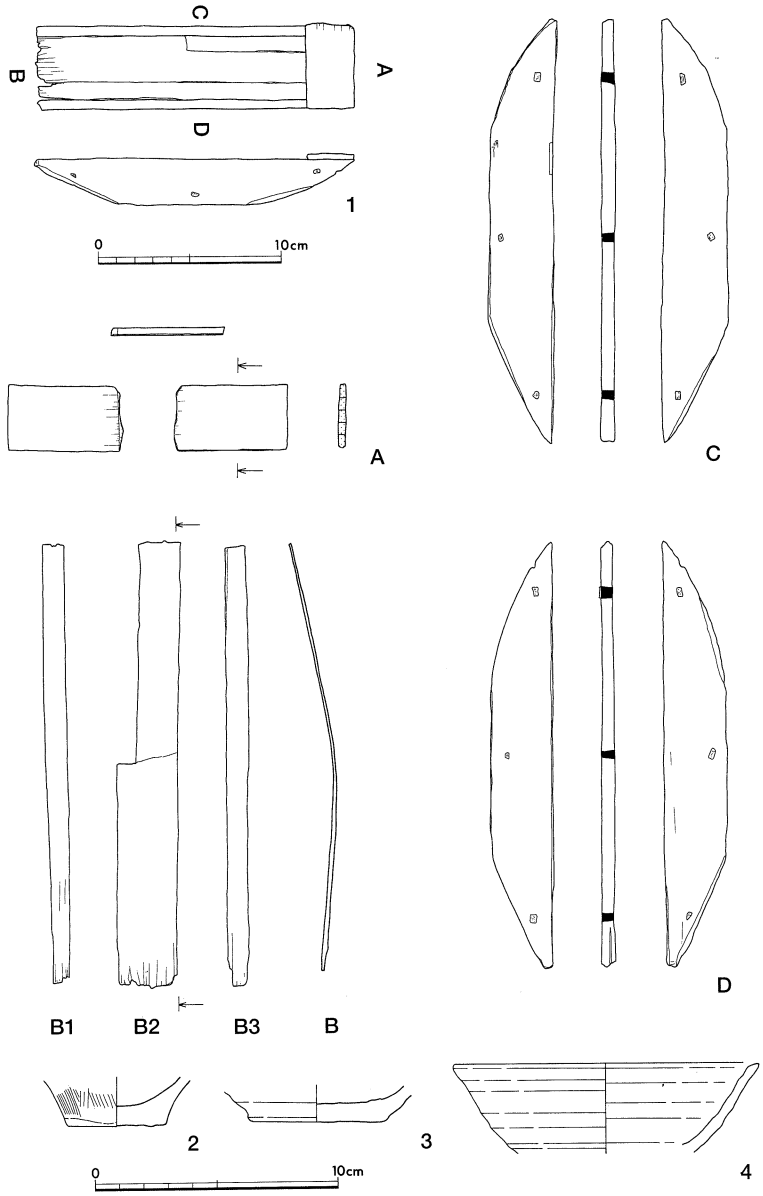


図130　B2区土坑7出土遺物実測図
（1はS＝1/4、A～D、2～4はS＝1/3）

1は舟形木製品。取上げ時にバラバラとなったため復元図と各部の図面を掲げている。組み合わせ式の構造で四つの部分からできている。Aは船首側の板、Bは底板、C、Dは側板である。組み合わせたとき長さ17.4cm、幅4.5cm、高さ2.6cmになる。Bの底板は厚さ0.1～0.2cmの薄い板である。これを3枚を重ねて「く」字に折り曲げていた。C、Dの側板にはそれぞれ3か所の小孔（断面黒塗り部分）が空けられている。各部の接合のためと考えられるが木釘の類は見られなかった。2は弥生土器の底部で3、4は土師器坏である。3は底径5.7cm。底部と体部の境がしっかりと段をなす。4は復元口径12.6cm。端部は肥厚し外に短く折れる。

土坑８（図131）　南北1.87m、東西1.80mの円形の土坑の中央に井側の痕跡が残る。土坑の掘り形は二段掘りとなっていたが、調査中の崩落により平面的には確認できなかった。井側は楕円形を呈し長径1.0m、短径0.75mに復元できる。深さは80cm以上で、底面の標高は3.45mである。埋土は中～下層が未分解有機物混じりの粘質土となっている。遺物は主に上層から出土している。

１～３は皿。１は濃橙色を呈する。口縁端部は肥厚する。２は肌色を呈する。体部は円みのある立上りである。３はほぼ完全な形。口径7.5cm、器高1.6cm、底径5.8cm。口径に対する底径の比率が１：0.77となる。体部は短く外方へ立ち上がる。４から７は底部から体部の破片。４は皿、その他は坏か。８は坏。復元口径13.8cm、器高3.5cm、底径6.7cm。口縁端部は薄く引き延ばしている。

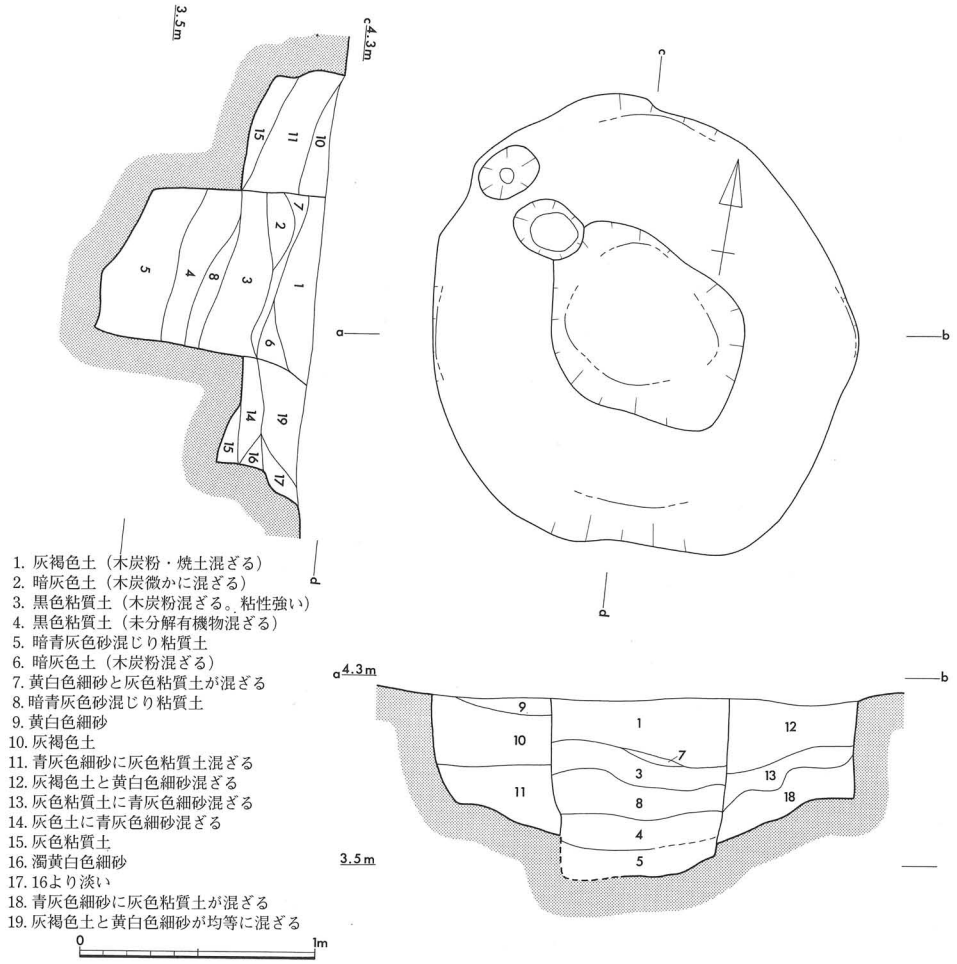


図131　B2区土坑8実測図（S＝1/30）

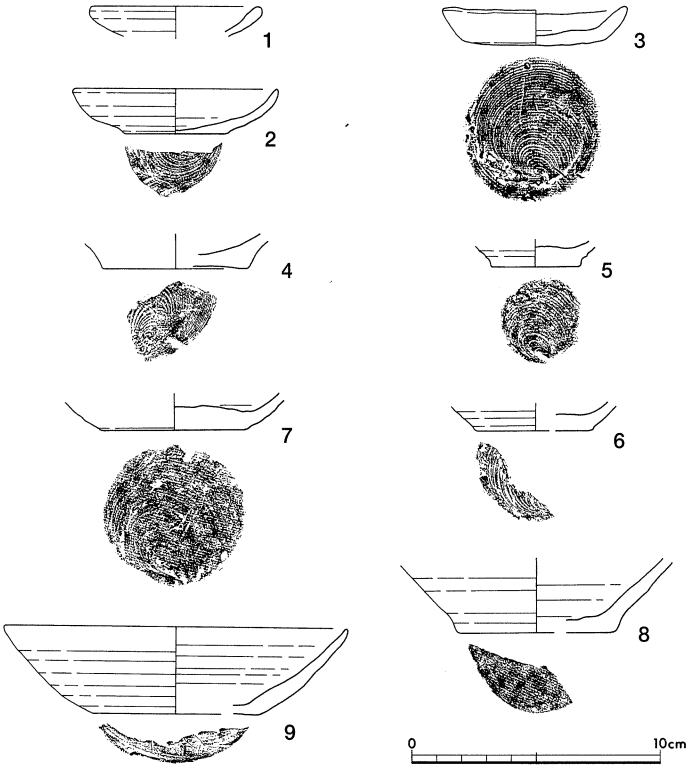


図132　B2区土坑8出土遺物実測図（S＝1/3）

土坑９（図133～135）　土坑１とともに遺物が多く出土した遺構である。当初は井戸として機能し、その後にゴミ坑に利用されている。平面は円形。南北2.58m、東西2.40m、深さ1.10mの大形の土坑である。底面の標高3.15m。土坑の壁は北側では２段掘りとなり、深さ65cmのあたりまでは垂直に掘り込まれ、幅40cmほどの段を持ち底面に至る。井戸設置の際の足場としての築かれたものかも知れない。埋土は細分しているが上層からＡ：地山ブロック粒・木炭粉混じりの層、Ｂ：未分解有機物混じりの層、Ｃ：比較的均質な粘質土層の三層に大別できる。Ｂの未分解有機物層は厚さ0.5～1.0mで、間に細砂をサンドイッチ状に挟んで堆積している。この層は竹や葦、木の葉のほか木屑の類が中心であり館跡内のゴミが投棄されたものと思われる。この下層のＣは基盤層の崩落や流れ込みにともなう自然堆積層と考えられる。

土坑底面には井戸の水溜め用の曲物が一段置かれていた。掘り形は涌水層である細砂層に掘り込んでいるため明確に検出できていない（図133のトーン点線部分）。曲物は平面が楕円形を呈し径48×42cm、高さ25cm。曲物内には細砂をベースにわずかに粘質土の混ざったａ～ｃ層が堆積していた。序々に側方からの流れ込みで埋まったものと推測される。

１から26までが土師器。１～11までが皿。１、２は濃肌色を呈し、その他は肌色である。１、２は体部が逆ハ字に開く。２の方が大形である。口径7.2～8.1cm、器高1.5～1.7cm、底径4.5～5.2cm。３、４は体部の作りは粗く歪みがある。口径6.8～7.2cm、器高1.3～1.5cm、底径4.4cm。５、６は口径7.5～7.8cmの大形のもの。器高1.6～1.9cm、底径5.0～5.1cm。７～９は底部の器壁が厚い作りのものである。８、９は底部と体部の境が屈曲気味を呈する。口径7.1～7.2cm、器高1.5～1.7cm、底径4.1～5.2cm。10、11は色調が白色を呈するもので口縁端部を薄く引き出したものである。口径

7.4～8.0cm、器高1.4～1.6cm。底径4.9～5.2cm。13は台付き皿。13は皿部の内面にススが付着している。台部は短くどっしりした形態である。17から26は坏。色調は14から19は肌色、20から25は濃茶色、26は濃橙から肌色を呈する。17は体部中ほどで屈曲して立ち上がる体部を、18は逆ハ字に直線的に大きく立ち上がる体部をもつ。19は最も丁寧な作りのもの。体部は円みのある立上りをし、口縁端部内面を薄く引き出している。口径11.6～12.4cm、器高3.9～4.6cm、底径4.1～6.6cm。20から24は灰色がかったくすんだ肌色をしている。全形の分かる20、21、25の体部は逆ハ字に大きく開く。口径11.2～12.7cm、器高3.8～4.2cm、底径5.8～6.7cm。26は濃肌色を呈する。底面には回転糸切り後に付いた板状の圧痕が残る。27は古瀬戸の卸皿。口縁部は角張り端部には浅い溝がめぐる。体部は中ほどで稜線をもつ。底部内面にはヘラ状工具による深い刻み目が格子状に施される。外面には底部周辺をのぞき灰釉がハケ塗される。古瀬戸前Ⅳ期、13世紀後半か。(6) 28は龍泉窯系青磁椀。外面に鎬蓮弁を削りだすもので太宰府分類のⅨ類に相当する。29は白磁の坏。内面の見込みに段を

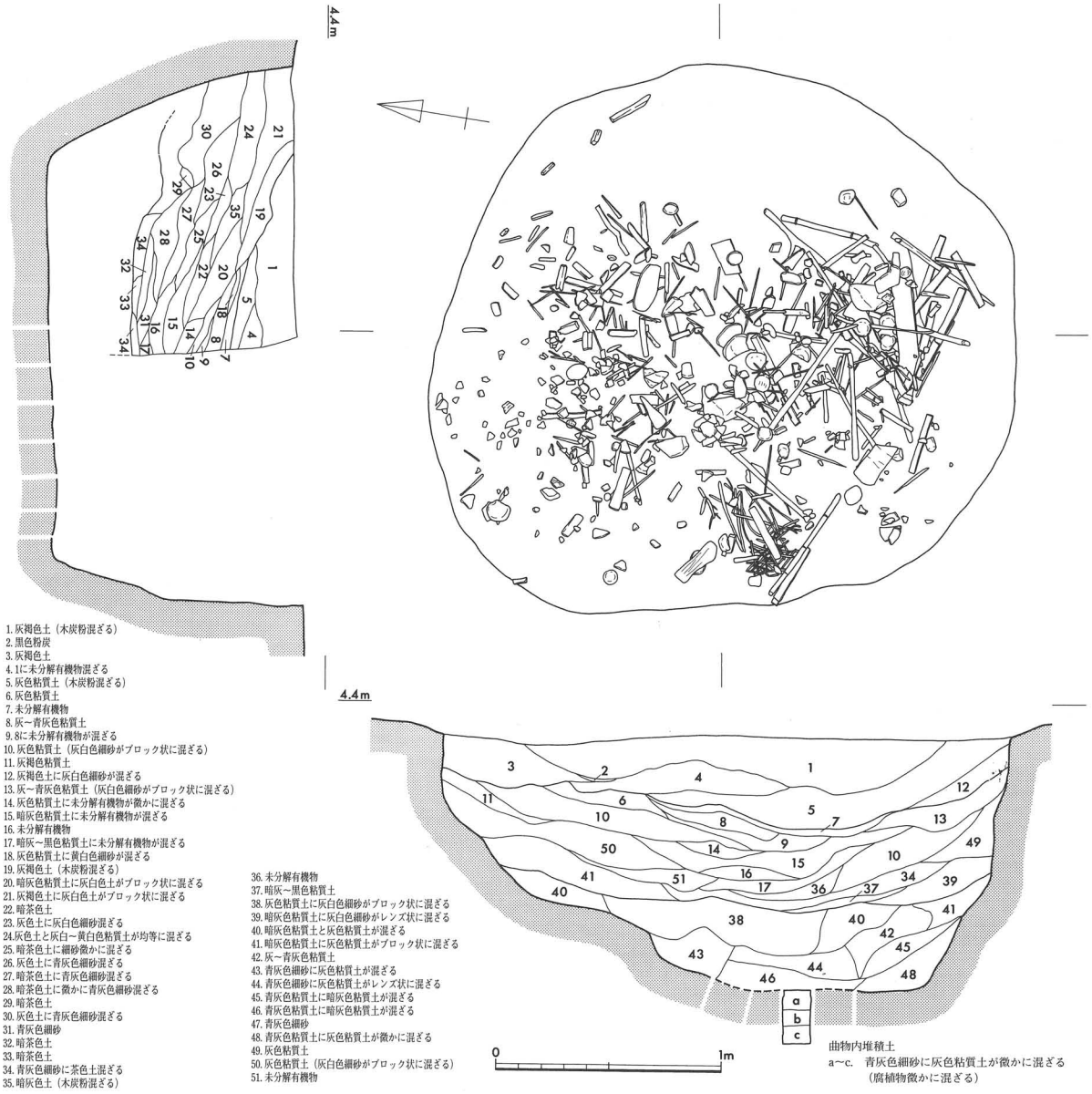
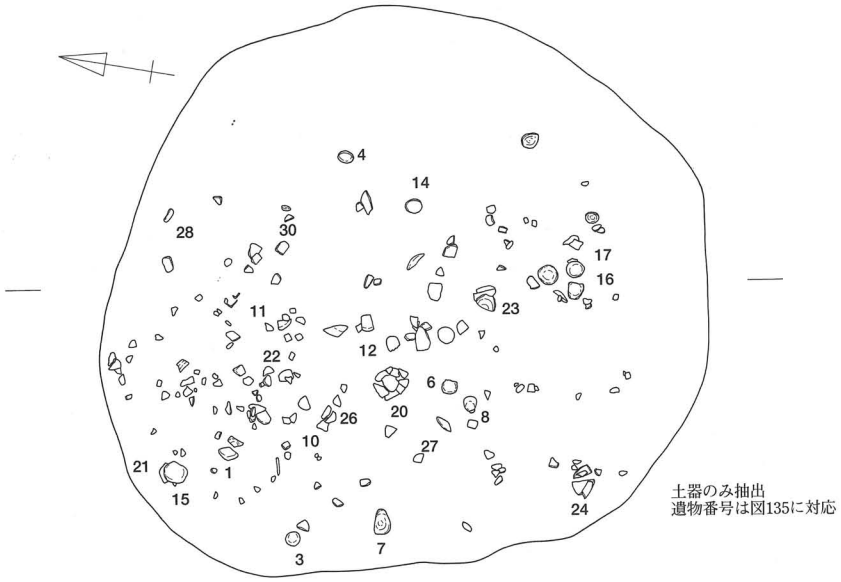
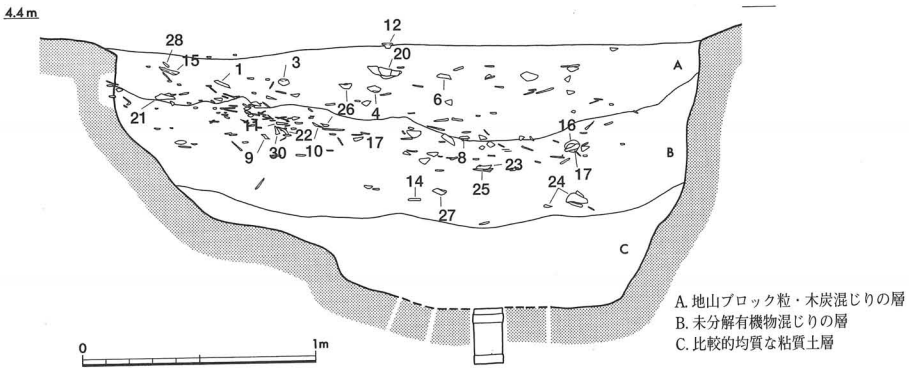


図133　B2区土坑9実測図（1）（S＝1/30）





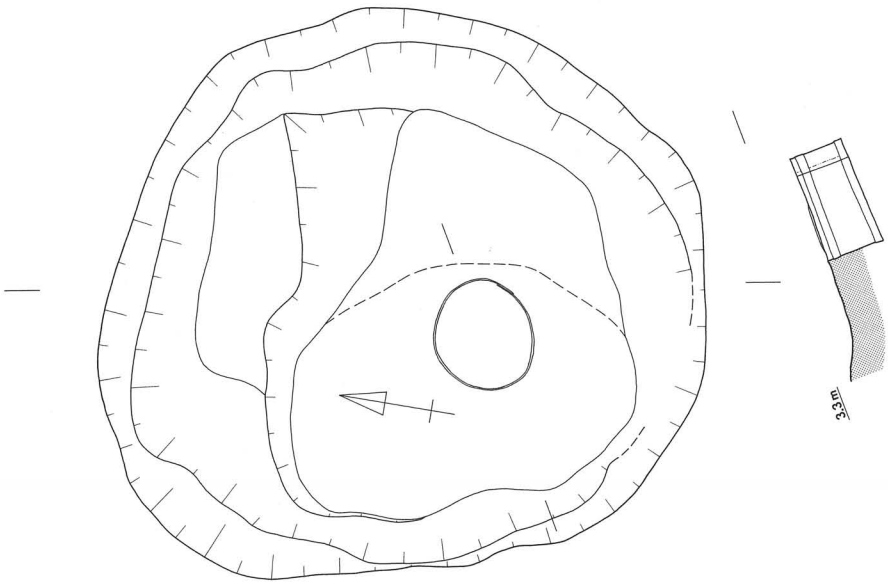


図134　B2区土坑9実測図（2）（S＝1/30）

もつもので太宰府分類のⅨ類に相当する。13世紀。30は青白磁の合子。12世紀。

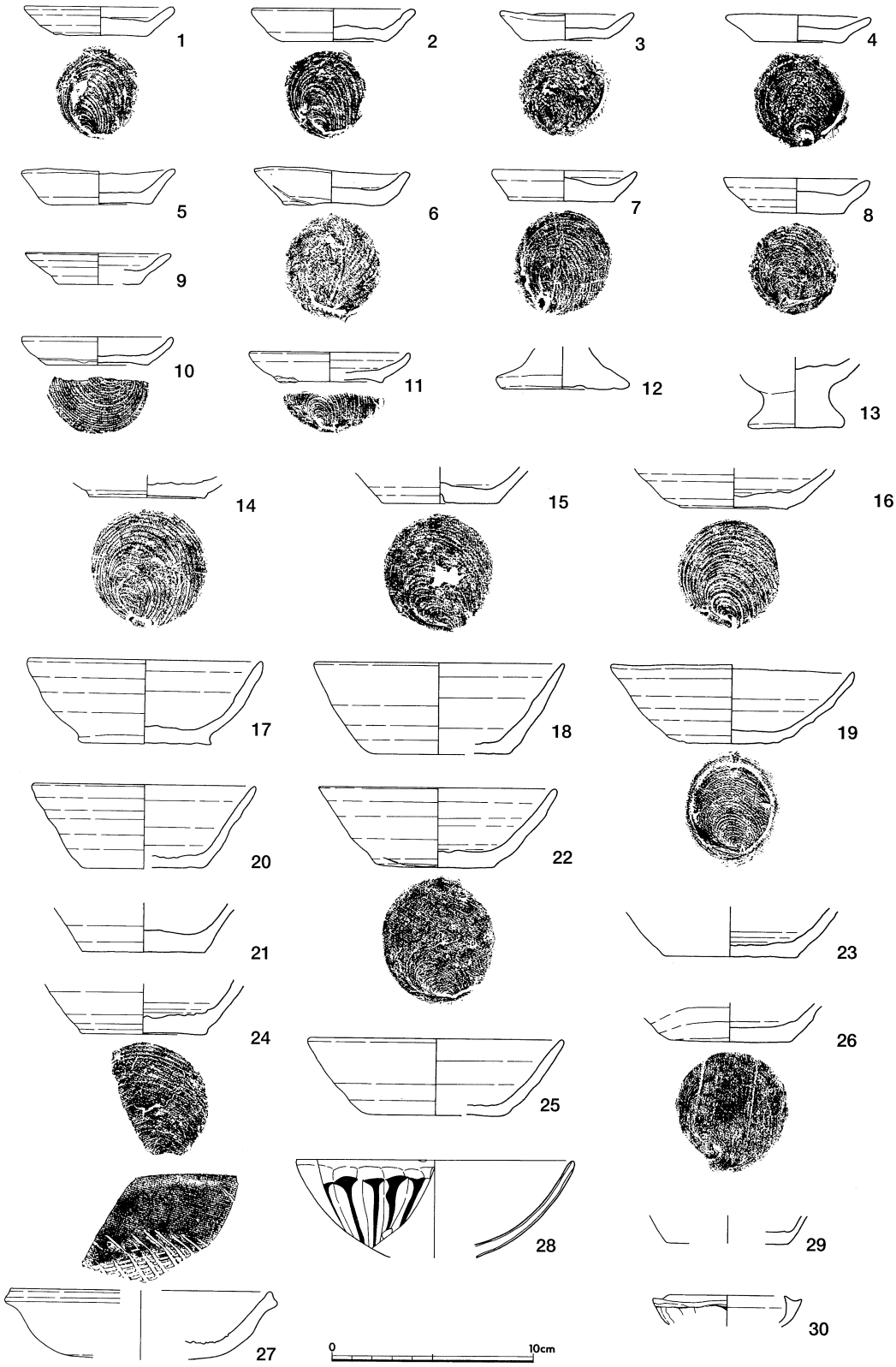


図135　B2区土坑9遺物実測図（S=1/3）

土坑10（図136）　土坑の掘り形は建物３の柱穴で壊されている。この土坑は本来の形状をとどめていないことが土層観察で確認できる。それは５、17～19、26層は基盤層と同質の細砂層に灰色土が帯状に嵌入している点からである。これは基盤層のひび割れ等が原因と考えられるもので、分層してはいるが、本来の掘り方はこれらの内側のラインということになる。その場合、掘り方はオーヴァーハングするわけだが、これも壁面が抉れるように崩れたためであろう。当初はこの土坑は1.5×1.2m程度の規模であったものと思われる。平面はほぼ円形で南北1.84m、東西2.02m、深さ90cm。二段掘りで深さ45cmの辺りまで垂直に掘り込み、幅20cmほどの段をもって底面に至る。底面の標高は3.5m。出土遺物は少なく下層から土師器と漆器椀の小破片が出土した程度である。

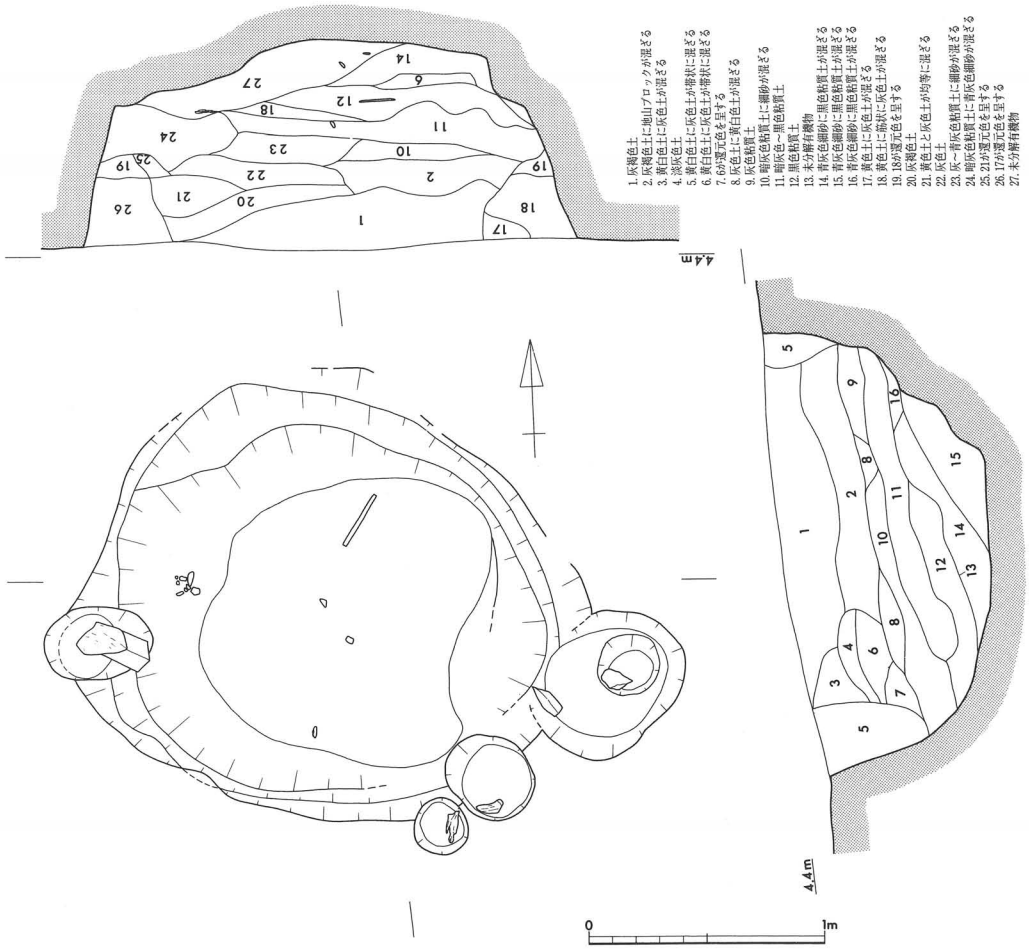


図136　B2区土坑10実測図（S＝1/30）

土坑11（図137）　平面は楕円形。現状で南北1.94m、東西1.65m、深さ1.04m。土坑10と同様に２、３層としている部分は本来土坑の壁であった部分と考えられる。その下方の壁も後に崩れオーヴァーハングしたのであろう。当初の規模は1.5×1.3m程度ではなかったかと思われる。土坑の壁は垂直に掘り込まれ底面は皿状を呈する。底面の標高は3.15m。土坑底面には厚さ25cm前後の黒色粘質土が堆積する。その上層は粘質土をベースにわずかに細砂の混ざった自然堆積層である。この中には未分解有機物や土器も若干見られることから、ゴミの投棄と側方からの流れ込みが繰り返されながら埋没していったものと考えられる。

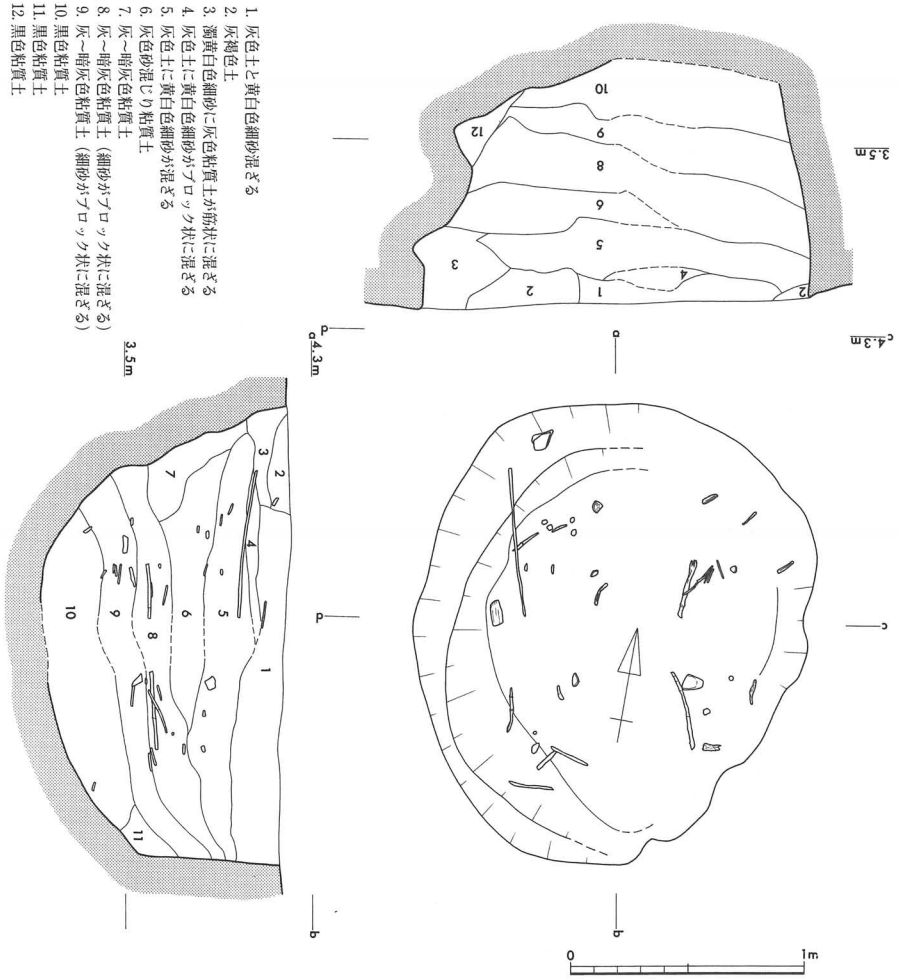


図137　B2区土坑11実測図（S＝1/30）

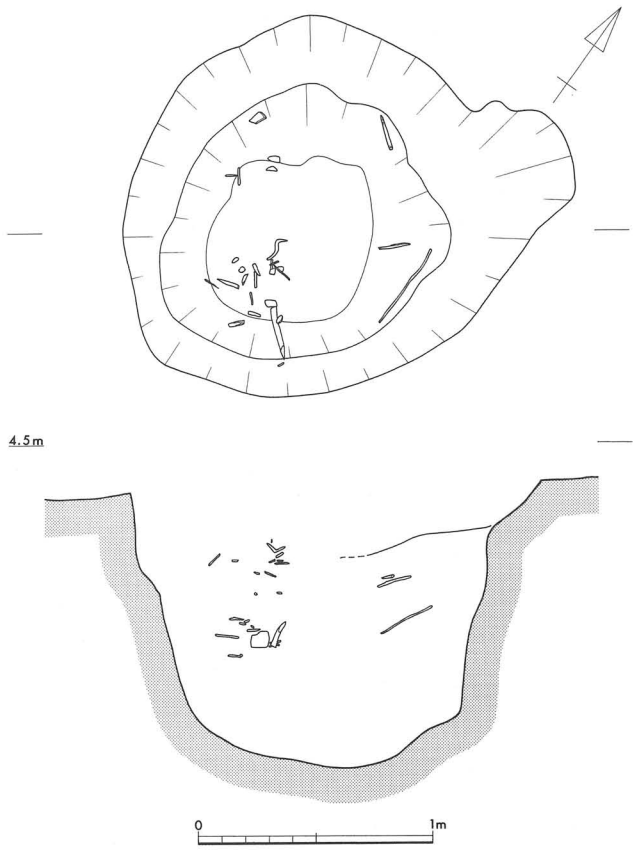


図138　B2区土坑12実測図（S＝1/30）

土坑12（図138）　調査中にセクションベルトが崩れたため土層についての記録がない。規模は1.75×1.60m、深さ1.20m。底面の標高は3.14m。掘り形の北側が突き出たように拡がっているが崩れたためであろう。土坑内からは土師器小破片、杭状木製品のほか未分解の植物遺体が微量ながら出土している。

土坑13（図139）　平面はほぼ円形。南北1.78m、東西1.93m、深さ95cm。壁は２段掘りで深さ80cmのあたりまで皿状に掘り込まれた後、広いところで幅20cmの段をもち底面に至る。土坑底面の標高は3.27m。土坑内には基盤層の崩落にともなう細砂ベースの粘質土の上に未分解の有機物層が拡がっていた。この上層も未分解有機物混じりの粘質土層がつづき、その厚さは40cmにも及ぶ。遺物は土師器小破片が微量出土している。

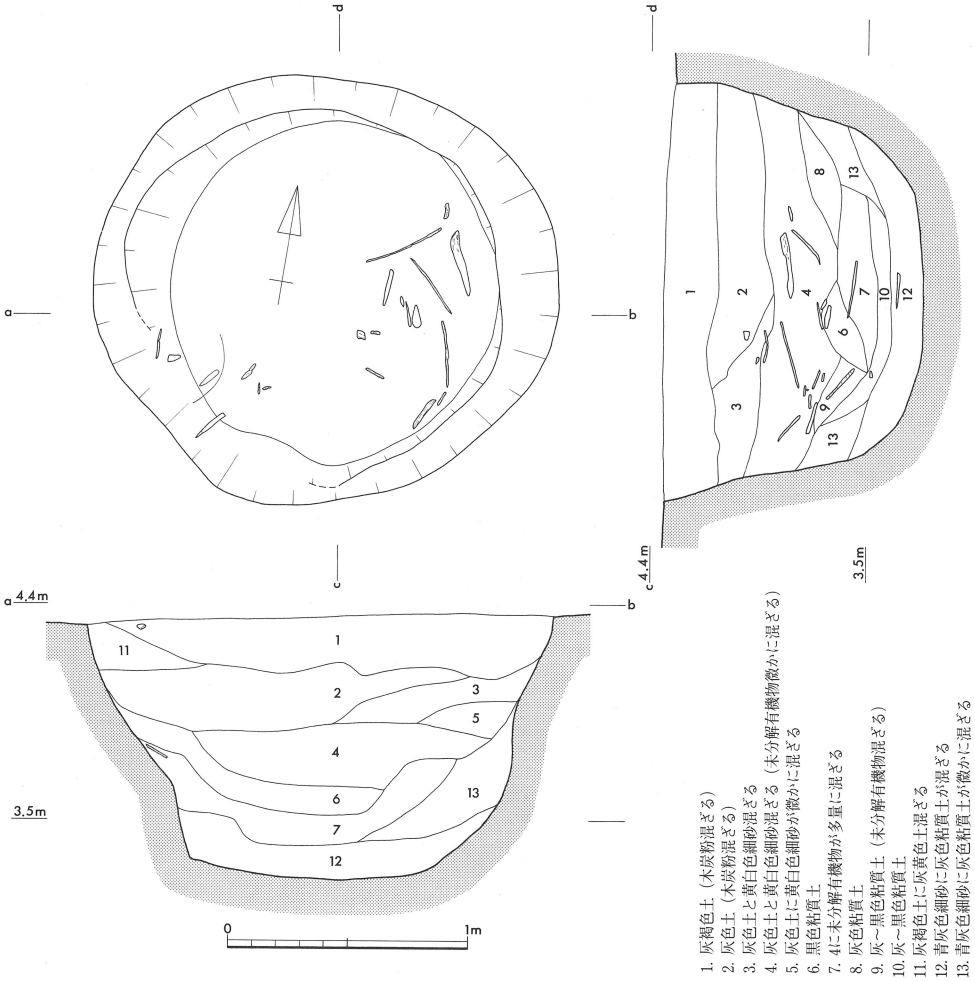


図139　B2区土坑13実測図（S＝1/30）

B２区土坑13土層堆積状況

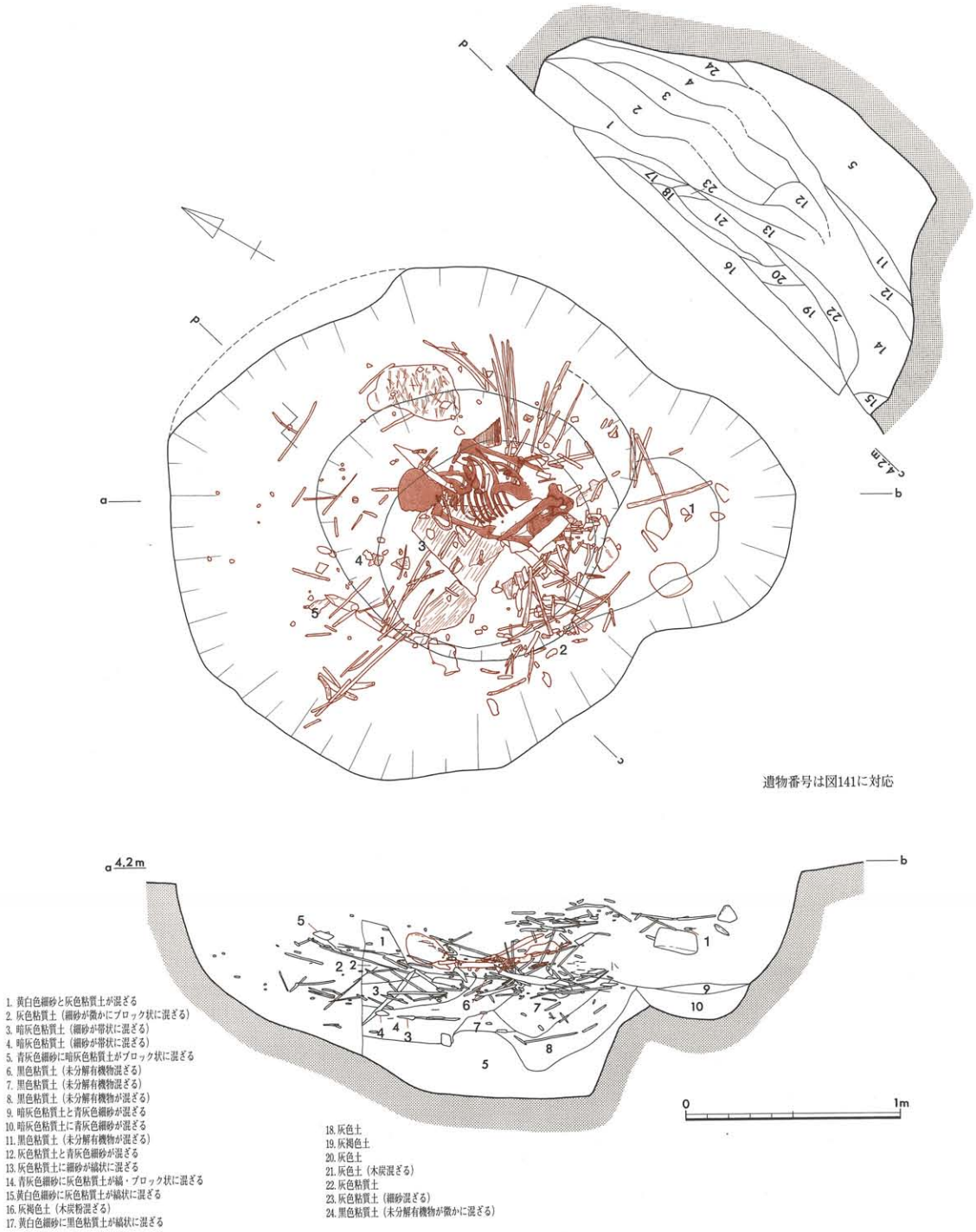


図140　B2区土坑14実測図（S＝1/30）

土坑14（図140）　土坑埋没後に墓５が築かれている。また南西隅には別の土坑が掘り込まれていたようである。土坑内の底面には基盤層の崩落にともなう粘質土混じりの細砂層が10～30cm程度堆積しており、その上層が未分解有機物の層となる。他の土坑と同様に土坑本来の機能喪失の後ゴミが棄てられたようである。南北の幅2.17m、検出面からの深さは1.0mで底面の標高は3.1m。掘り形の壁は北側が急な傾き、南側はゆるやかな傾きで底面に至る。また壁の一部（ｃ－ｃラインのｄ側）はオーヴァーハングしている。

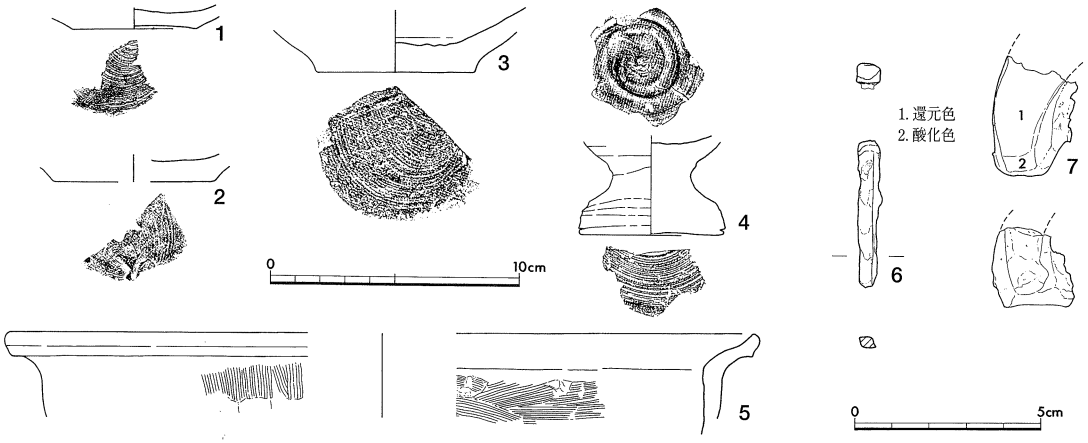


図141　B2区土坑14出土遺物実測図（1～5はS＝1/3、6、7はS＝1/2）

土坑14の出土遺物のうち図示し得たのは図141の通りである。1から4は土師器。1から3は坏の底部、4は台付き皿。肌色を呈する丁寧な作りである。脚端部は肥厚し、しっかりとした面をもつ。5は瓦質土器の鉢。口縁部は「く」字に折れ、端部は肥厚する。内外面ともハケ調整が見られる。6、7は金属製品。6は鉄釘、7は羽口。羽口は小破片のため孔径、外径とも不明である。内径側は融解している。破断面では土色の変化が見られ、先端側が還元色を基部側が酸化色を呈している。この他鉄滓も1点出土している。

図142の土坑15、16は調査区の南西で出土したもので、規模、形態とも非常に良く似ている。

土坑15（図142）　平面は円形。壁は垂直に掘り込まれているが、北側の面は崩落によってオーヴァーハングする。南北75cm、東西65cm、深さ1.04m。土坑底面からは25cm角の自然石がしっかりと置かれた状態で出土した。その上層には厚さ40cmにも及ぶ泥層が堆積していた。

土坑16（図142）　平面は円形。径87cm、深さ97cm。この土坑からも大きな自然石が出土している。自然石は基盤層の崩落にともなう細砂層（第5層）が堆積した後に薄い未分解有機物層を挟んで、投棄されたものと思われる状態で出土している。石は全部で3個あるが、小形の石2個の上に30～35cm角、厚さ20cmの大形の石が出土している。底面から浮いた状態であるだけでなく、石のまわりからも未分解有機物などが出土していることから見て、投棄されたものであろう。土坑内の遺物のうち図示し得たものは1の土師器坏と、2の円形曲物の底板のみである。1の土師器坏は底径6.6cm。2は全体の約1／3が残る。側板との接合のための小孔や木釘は見られない。

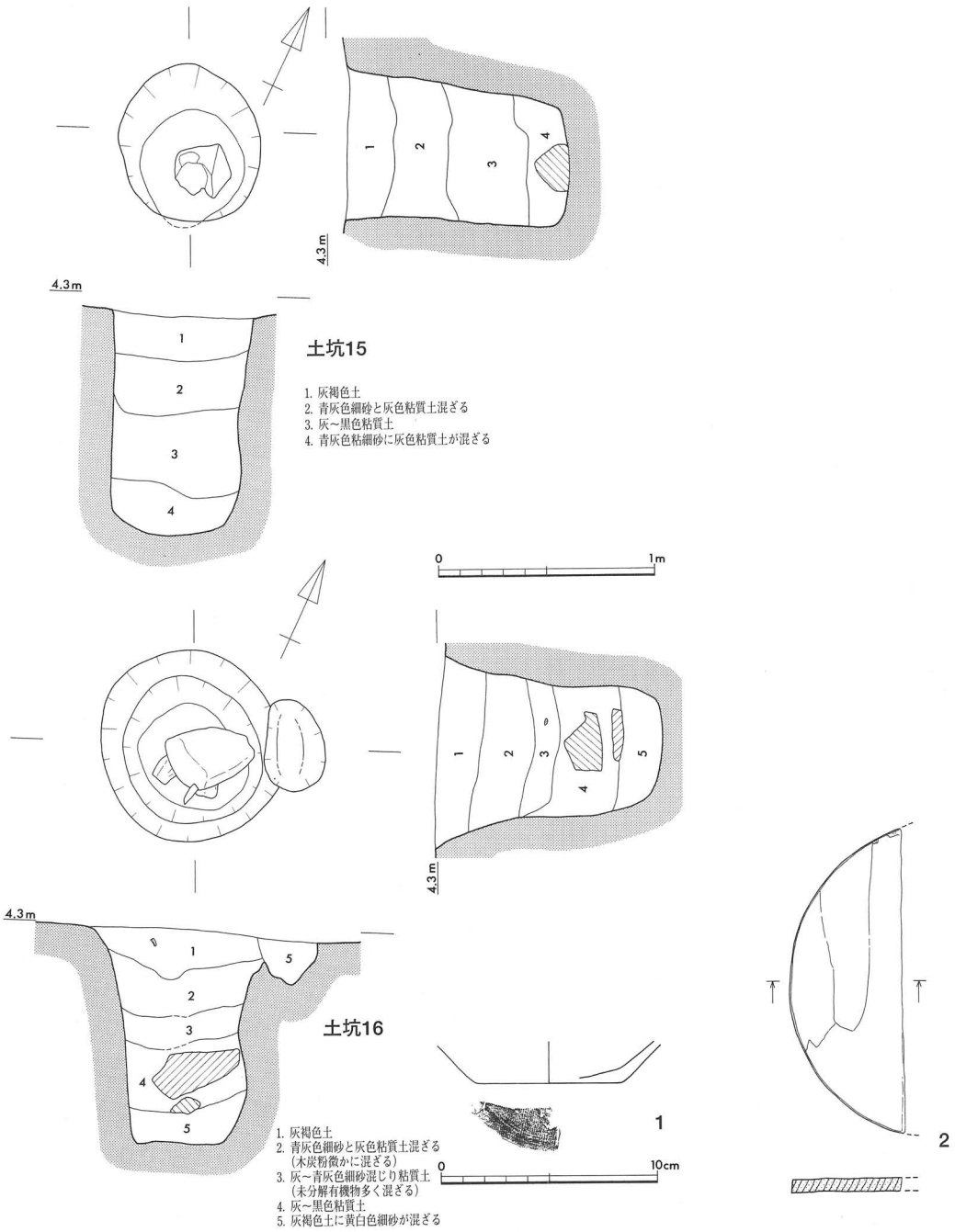


図142　B2区土坑15・16実測図（遺構はS＝1/30、遺物はS＝1/3）

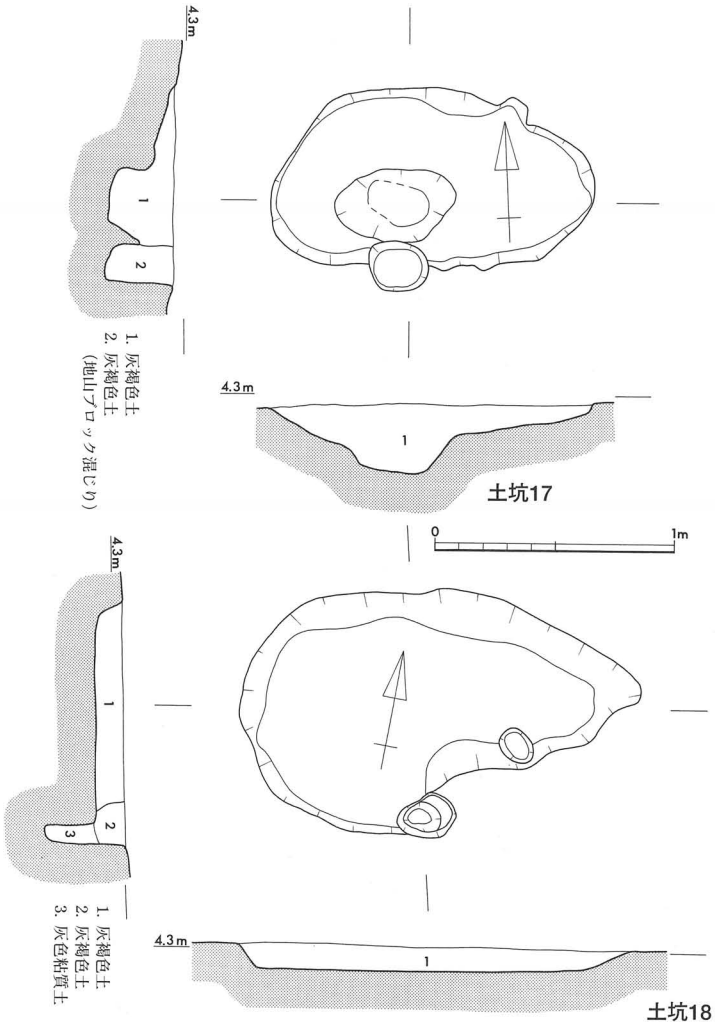


図143　B2区土坑17・18実測図（S=1/30）

図143の土坑17、18はどちらも東西方向に主軸をおき平面楕円形を呈する浅い皿状の土坑である。埋土は単一層で、遺物は出土していない。以下、計測値のみ記す。

土坑17（図143）　東西1.34m、南北0.73m、深さ10～28cm。

土坑18（図143）　東西1.66m、南北0.96m、深さ10cm。

図144は平面形が円形の浅い土坑である。

土坑19（図144）　掘り形の東側を墓２によって壊されている。南北94cm、東西79cm、深さ92cm。下層には黒色粘質土が厚く堆積していた。６層上面にはアワビかと思われる大形の貝化石と５cm角の自然石が出土した。

土坑20（図144）　平面は円形。東西1.0m、南北95cm、深さ87cm。底面の標高は3.35m。断面は逆台形を呈する。遺物は１と２がある。

土坑21（図144）　平面は楕円形。東西1.07m、南北66cm、深さ52cm。底面の標高は3.76m。

土坑22（図144）　平面は円形。南北94cm、東西83cm、深さ36cm。底面の標高は3.84m。埋土は２層で、それと対応するように壁面に稜線がある。南側の浅い凹みを壊して掘り込まれている。

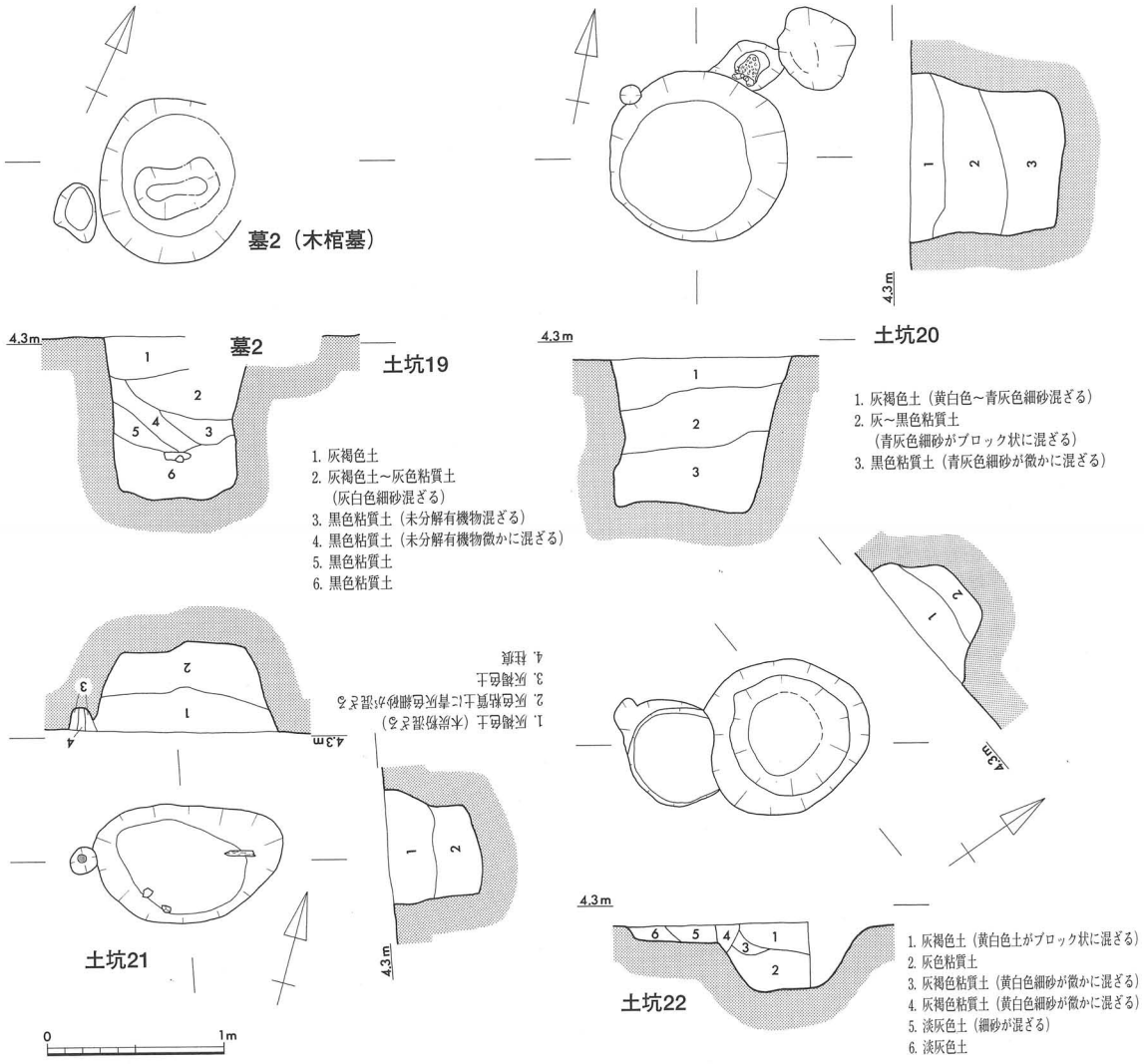


図144　B2区土坑19～22実測図（S＝1/40）

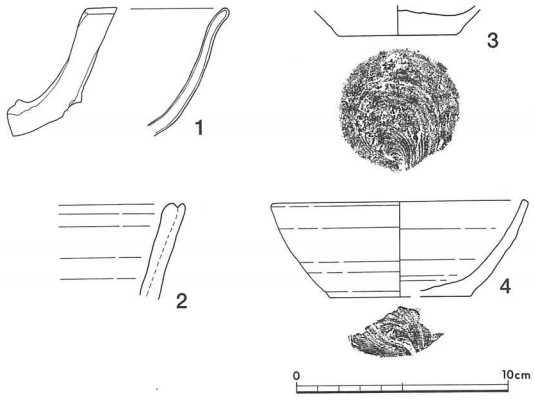


図145　B2区土坑20・21出土遺物実測図（S＝1/3）

図145の１、２は土坑20から３、４は土坑21から出土したものである。１は青磁椀。口縁端部が外方に折れるもので、上田分類のＤ類の相当するものと思われる。14世紀後半から15世紀前半か。２は国産陶器の口縁部。鉢か。３、４は土師器坏。色調は肌色を呈する。４は体部が円みをもって立上り口縁端部は角張る形状をしている。復元口径12.2cm、器高4.5cm、底径6.6cm。

図146の土坑23、24は西大溝より西側にある土坑である。

土坑23（図146上段）　調査中に土坑壁面が崩れ土坑内に流入してしまったため土坑底面まで掘削していない。現状では北側の平面がやや突き出たようになっているが崩落によるものと思われ、本来は隅円方形に近かったのではないかと思われる。規模は南北1.47m、東西1.27m、深さは75cm以上。土坑底面の標高は3.38m以下になる。土坑ほぼ中央の第２層直上には20～30cm角、厚さ13cmの自然石が置かれていた。また第１層からは羽口片が出土しているほか土師器小破片も出土している。図147の１が小皿、その他は坏と思われるが全形のわかる資料はない。

土坑24（図146下段）　平面は本来、径84cmの円形であったものと思われるが、南側は浅い皿状の落ち込みにより壊されている。深さは32cmと浅い。土坑底面の標高は3.84m。

土坑23からは土師器の小破片が出土している。１は皿、２から５は坏の底部。１は復元底径3.9cm。２から５は復元底径6.0～7.0cm。

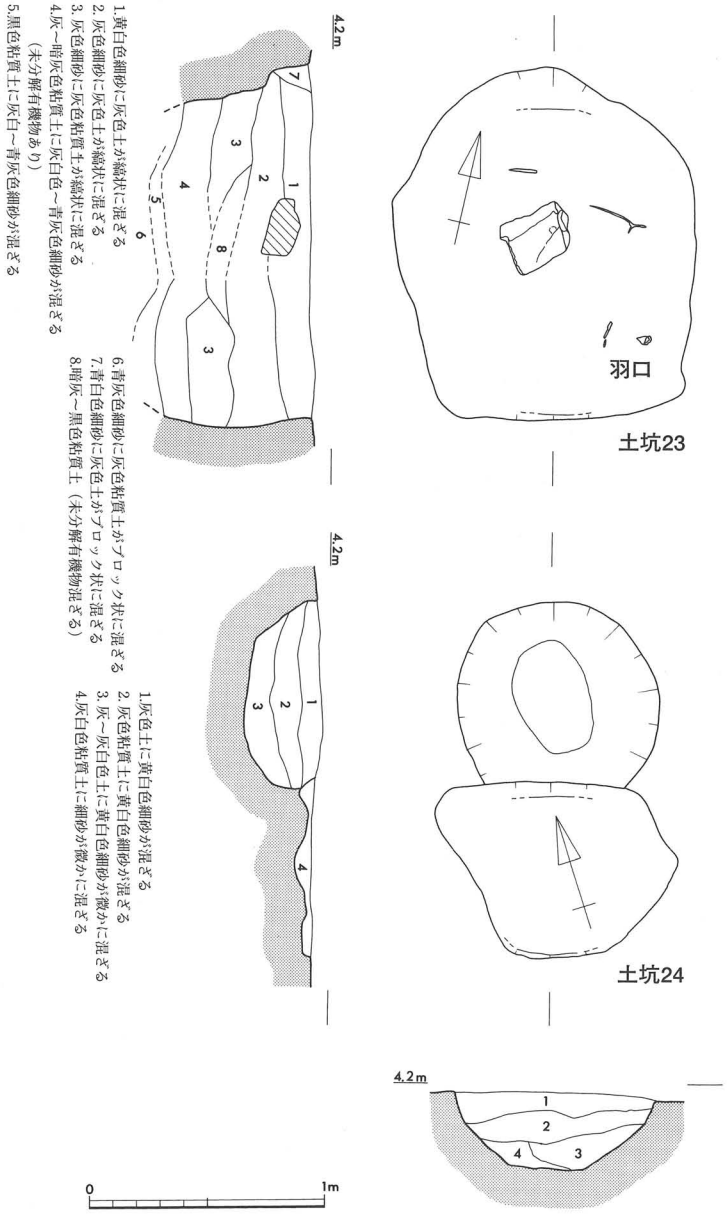


図146　B2区土坑23・24実測図（S=1/30）

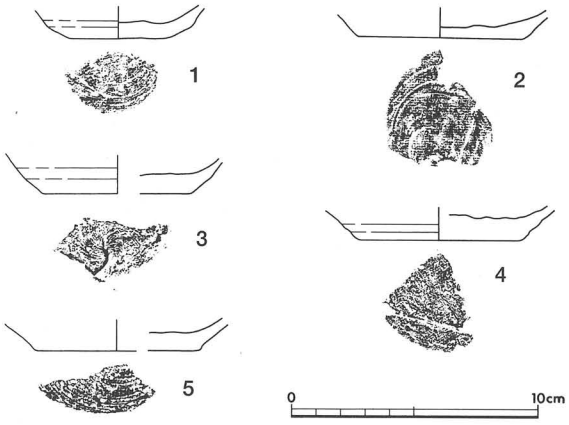


図147　B2区土坑23出土遺物実測図（S=1/3）

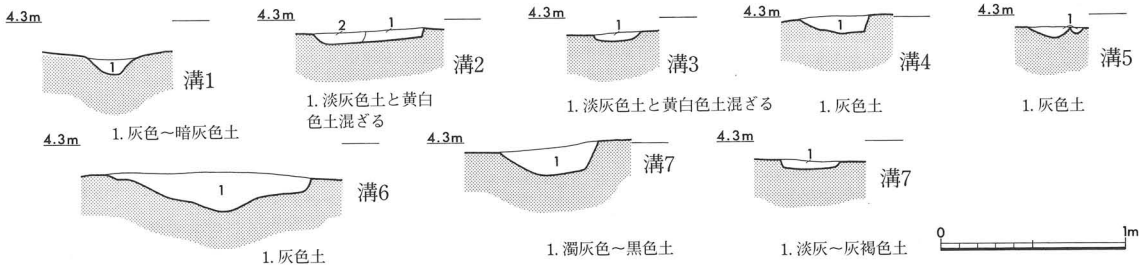


図148　B2区溝跡実測図（S＝1/40）

7．溝（断面は図148、位置は図99）　掘り方埋土中の遺物や土層観察により中世の遺構と判断したものは10条ある。このうち大溝によって切られている溝は溝８、９、10の三条である。また溝２、３については建物６の雨落ち溝等の可能性も考えられる。

溝１　大溝の西4.0～2.5mの辺りを南北方向に縦断して延びた後Ｌ字に曲がる。大溝とは平行していない。土坑２と埋土は同質で、埋土中からは土師器が出土している。幅30cm、深さ10cmである。

溝２　トレンチの東に位置してするＬ字形に曲がった溝である。南側の東西に延びる部分は溝６に切られている。幅59cm、深さ６cm。あるいは建物６に伴うものかもしれない。

溝３　溝２の西側に平行して延びるもので途中二か所で途切れている。溝と溝の間隔は1.5m前後。柱穴で切られていない最も南側の溝で、長さ2.2m、幅25cm、深さ５cm。

溝４　調査区南東隅に位置し東西方向の延びる。東端は近世以降の耕作により壊されている。断面は浅いＵ字形を呈する。幅37cm、深さ９cm。

溝５　溝４の西延長線上に延びるもので一連の遺構として捉えて良いものと思われる。断面は浅いＵ字形を呈する。幅30～70cm、深さ６cm。

溝６　調査区中央やや南寄りを東西方向に延びるものである。東端は溝５により切られ、土坑１４とも切り合い関係にある。断面は浅いＵ字から上開きのコ字形を呈する。幅41cm、深さ５～10cm。

溝７　西大溝の西3.0～5.0mの所を大溝と平行に南北方向に延びている。断面は浅いＵ字形を呈する。幅36cm、深さ10cm。

溝８　溝７の東肩近くから東西方向に延びた後、西大溝によって切られる。断面は浅いＵ字から上開きのコ字形を呈する。幅32cm、深さ５cm。

溝９　東西方向に延びる溝で西端は西大溝によって切られている。西側が広く幅1.4mで東に向けてすぼまっていく。断面は浅いＵ字形を呈する。溝からは羽口の破片が出土している。これについては後述する（図156）。

溝10　溝９の南１mの辺りを東西方向に延びるもので、西端は西大溝によって切られる。幅20cm前後、深さ７cm前後。

８．墓　墓は全部で５基確認した。内訳は内部施設のあるもの（墓１・２）と、ないもの（墓３～５）に分けられる。立地を見ると墓１・３・４が調査区中央北寄りの土坑６、７の周辺にまとまっている。墓１、３、４は主軸をほぼ揃えていることから考えて同時期か、墓の存在を認識できる程度の時間幅の中で造られたものと考えたい。以下、個別に遺構の概要を見ていきたい。なお、出土銭貨については永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』1994を参考に作成している。

墓１（図149）　南北1.1m、東西0.9mのややいびつな隅円方形の掘り形内に板材と竹を組み合わせた棺を置いている。主軸はＮ－17.5°－Ｗ。棺は底板を持たず、長辺側の板を短辺側の板で挟んでいる。この板が倒れないように、底面には三本の竹を横に並べ、更に四隅を結ぶようにＸ字状に竹を噛ませている。棺は南北90cm、東西60～62cm、高さは10cm。おそらくこの上に何か有機質のもの敷き詰め遺体を置いたのであろう。副葬品は古銭７枚と土師器坏１点である。土師器坏は棺の南西隅近く正位の向きで押しつぶされた状態で検出した。古銭は棺の中央からやや北側で緡銭の状態で出土した。出土位置は遺体の胸部の上に当たることから袋状のものに入れられ首からぶら下げていたのではないかと推察される。

土師器坏は底部と体部の境が明瞭なもので、体部は逆ハ字に外方に開く。器壁は厚い。内面は丁寧なナデ調整によってロクロ成形痕を消しており、滑らかなカーヴを描いて端部に至る。口径13.4cm、器高3.7cm、底径6.5cm。銭貨の内訳は別表の通りである。

墓２（図151）　平面がいびつな隅円方形の掘り形の中央に木棺が置かれている。掘り形は東西77cm、南北65cm、検出面からの深さ18cmである。主軸はＥ－25°－Ｎ。掘り形の底面は西側に傾斜している。木棺は底板と側板四枚で構成される。組み合せ方は底板の上に長辺側の板を載せ、短辺側の板を嵌め込んでいる。

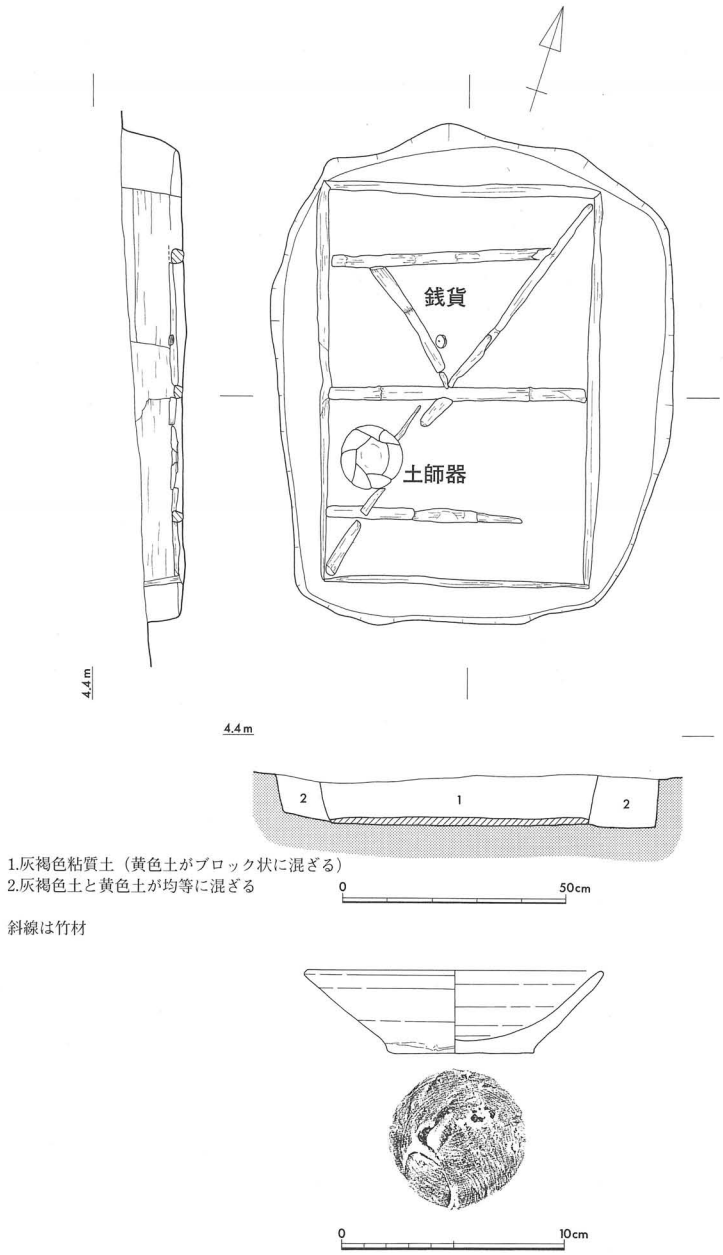


図149　B2区墓1・遺物実測図（遺構はS＝1/15、遺物はS＝1/3）

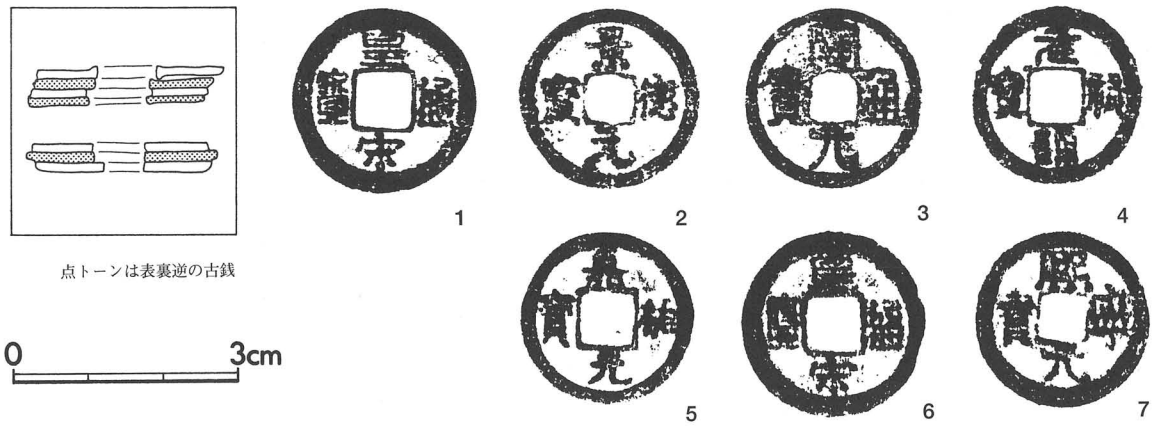


図150　B2区墓1出土銭貨拓影（実大）

B２区墓１出土銭貨観察・計測表

	名　称	初鋳年	銭径(A)／銭径(B)		内径(C)／内径(D)		銭　厚	量　目
1	皇宋通寶	1038	25.08mm	24.79	20.24mm	19.55	0.89～1.11mm	3.24 g
2	景徳元寶	1004	24.11	24.4	20.89	20.08	0.79～0.91	2.29
3	開元通寶	621	24.05	24.18	19.89	20.02	1.00～1.15	3.29
4	元祐通寶	1086	23.70	23.45	19.18	19.48	0.79～0.86	2.48
5	嘉祐元寶	1056	23.28	23.31	19.54	18.90	0.85～0.98	2.65
6	皇宋通寶	1038	24.88	24.60	19.84	20.25	0.79～1.08	3.33
7	熙寧元寶	1068	23.41	23.46	19.05	19.25	1.19～1.41	3.93

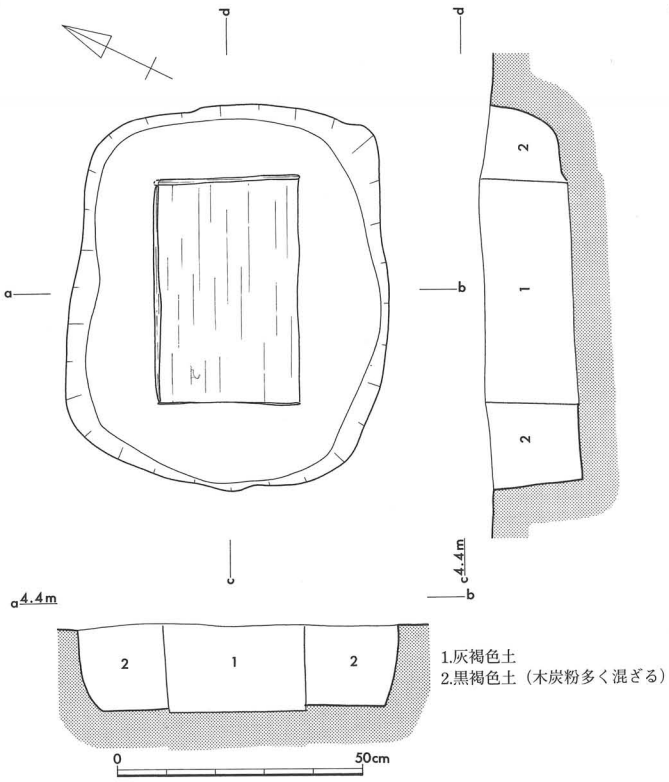


図151　B2区墓2実測図（S=1/15）

板材は厚さ３mmほどの非常に薄いものである。規模は東西46cm、南北29cm、高さ17～19cmである。副葬品は出土していない。

墓３（図152）　平面は小判形を呈しており、南北1.09m、東西0.76m、検出面からの深さは20cmである。主軸はN－10.5°－W。墓壙の底面は水平である。遺存していた人骨から成人（性別不明）の北頭位で横臥屈葬であったことがわかった。副葬品は土師器坏１点と古銭６枚がある。土師器は墓壙の北西隅から天地正位で東側に傾斜した状態で出土した。これはちょうど遺体の顔の左側あたりとなる。古銭は緡銭の状態で墓壙中央北寄りの地点から出土した。これは遺体の胸元の辺りであり懐に入れていたか、袋状のものに入れて首からぶら下げていたので

はないかと推測される。人骨の直下及び周辺には植物質のものが検出されたことから、葦のようなものを敷いて、その上に遺体を置いたものと考えられる。

土師器坏は非常に丁寧な作りのものである。底部は回転糸切り後に体部との境付近を指でナデて押さえている。このため体部の立ち上りが円みをもつ仕上がりになっている。色調は明るい肌色を呈する。体部は中ほどで稜線をもつ。口縁端部は薄く引き出されておりシャープな作りである。口径13.8cm、器高3.3cm。底径は5.0cmだが、ナデを施す前は6.4cm前後であったと推定される。

銭貨は６枚出土している。錆びにより判読できないものが半分ある。内訳は別表の通りである。

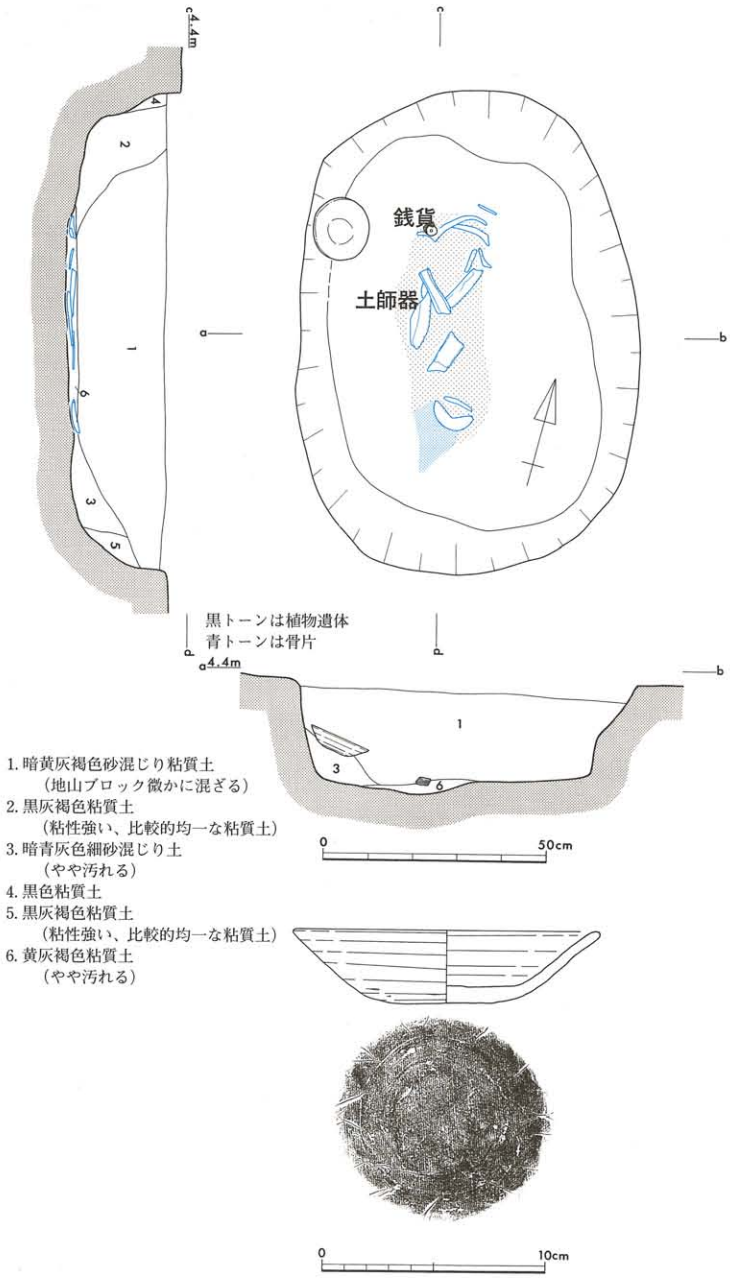


図152　B2区墓3・遺物実測図（遺構はS＝1/15、遺物はS＝1/3）

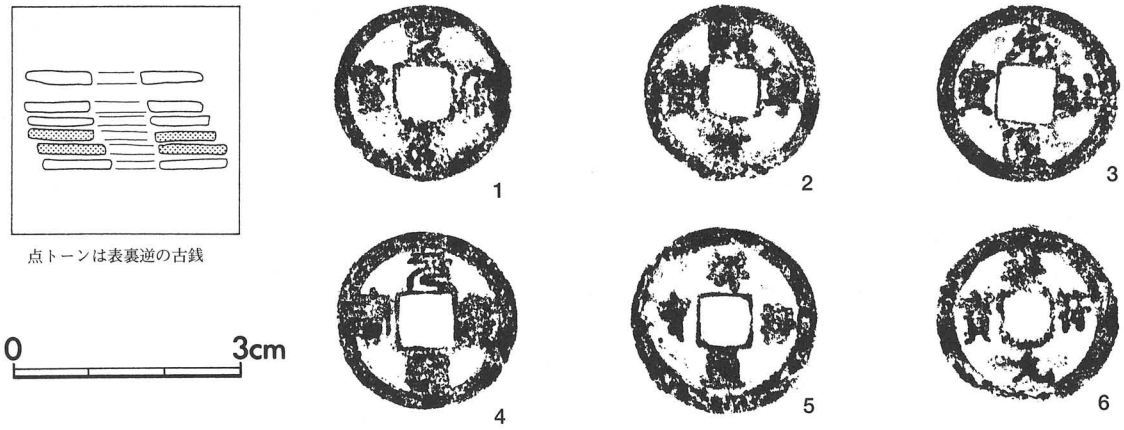


図153　B2区墓3出土銭貨拓影（実大）

B２区墓３出土銭貨観察及び計測表

	名　称	初鋳年	銭径(A)／銭径(B)		内径(C)／内径(D)		銭　厚	量　目
1	□□□寶		24.10mm	23.70	20.33mm	19.82	1.03～1.14mm	3.34 g
2	熙寧元寶	1068	24.20	23.61	20.30	19.71	0.90～1.62	3.29
3	元祐通寶	1086	23.91	24.15	19.40	19.71	0.75～1.10	2.47
4	元□□寶		24.05	24.49	20.69	20.45	1.05～1.19	3.85
5	□□通寶		24.65	24.77	20.50	20.69	1.00～1.18	3.06
6	祥符元寶	1009	23.80	24.09	19.61	19.33	1.15～1.39	3.67

墓４（図154）　土坑７の掘り形を切って掘り込まれている。平面形は小判形を呈し南側の幅が広い。南北87cm、東西54cm、検出面からの深さ12cmである。主軸はＮ－10°－Ｗ。墓壙の底面は水平である。副葬品は土師器坏１点。墓壙南側の中軸線よりやや西側で、天地を逆にした状態で出土した。墓壙底面からは植物遺体の拡がりが確認されており、墓１・３と同様に遺体の下に敷かれていたものと思われる。このほか墓壙中軸線と平行して竹が、土師器の北側で自然石が１点出土している。竹については墓１に見られるような棺を構成する材の一部とは考えにくい。

土師器坏は全体に磨滅が著しい。体部中ほどで稜線を持ち外方に折れて口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、外面には面をもつ。口径12.1cm、器高3.4cm、底径5.8cm。

墓5（図155・129）　土坑14の埋土に掘り込まれている。土坑14の検出面から掘り下げた段階で、人骨が検出されたため、掘り形の規模については明確でない。人骨は本遺跡のなかでは比較的残りが良い状態であった。人骨は体の中心線をN－32°－Wに置き、顔は西に向けた横臥屈葬の姿勢であった。

人骨は鑑定の結果、壮年の男性で身長約160cm程度の人物とわかった。

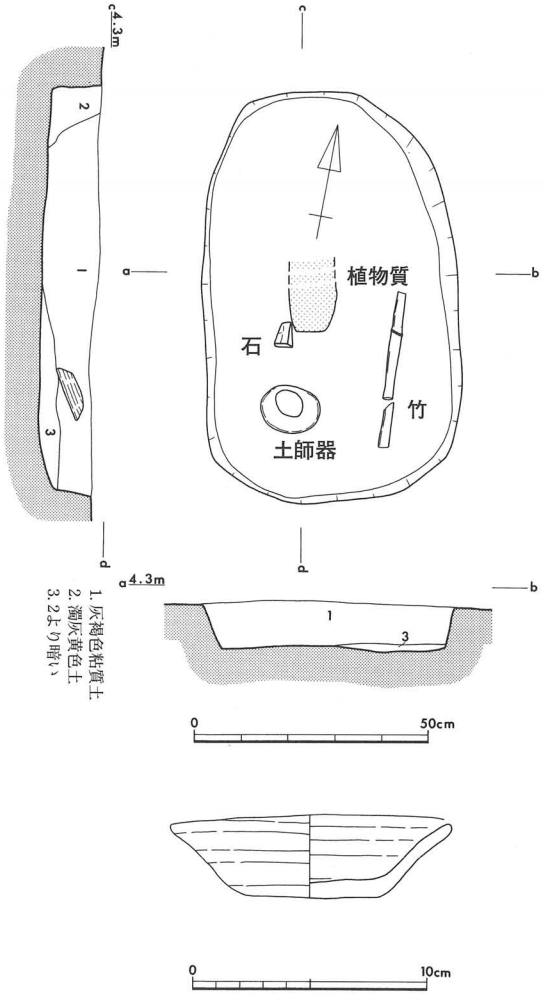


図154　B2区墓4・遺物実測図（遺構はS＝1/15、遺物はS＝1/3）

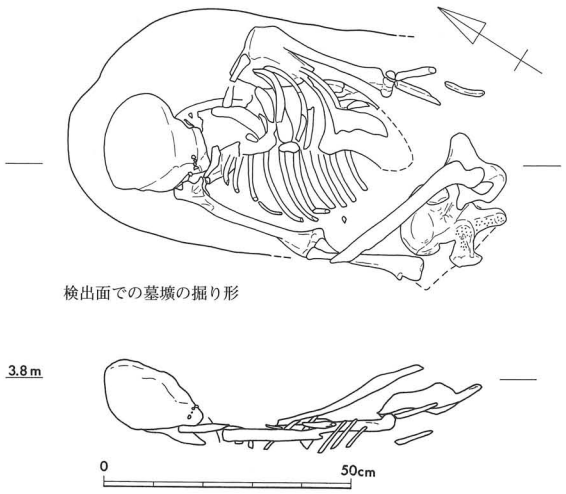


図155　B2区墓5実測図（S＝1/15）

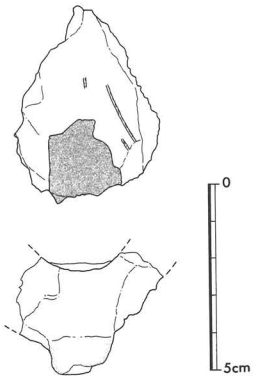


図156　B2区溝9出土遺物実測図（S=1/3）

9．製鉄関連の遺構と遺物（図156）　製鉄関連遺構は検出されていないが鉄滓、羽口が出土している。鉄滓は土坑内の埋土中では、土坑７から２点計60.07ｇ、土坑14から１点19.71ｇが出土している。また西大溝から２点70.57ｇ、ピット71から１点14.39ｇが出土している。羽口は溝９と土坑23から１点ずつ出土している。

これらは、分析はしていないが総て鍛冶滓と考えられる。羽口が出土していることも合わせると、館内に鍛冶場が存在していたものと推測される。

図156は溝９から出土した羽口の破片である。外径は不明だが孔径は3.2cm程度に復元できる。胎土にはスサが混ざる。外面は滓化し、孔の内面は濃青灰色を呈し融解物が付着している。

第２節　館跡以前の遺構と遺物（弥生・古墳時代の遺構・遺物）（図157・158）

館跡以前の遺構として認識できたのは井戸１基と溝９の１条のみである。前者は出土した土器から古墳時代中期と判断された。後者は遺物は出土していないが、埋土がＢ１区で検出された弥生時代の遺構のそれと同質であることから当該期の遺構と考えた。

溝11　調査区北東隅を北西から南東方向に延びている。検出した長さは17.5ｍ。溝の幅は63～87cm、深さは13～20cm。断面は上開きのコ字形。土坑８の辺りで幅が狭くなっており、あるいは途切れていたのかもしれない。埋土はグライ化の進行した粘質土である。

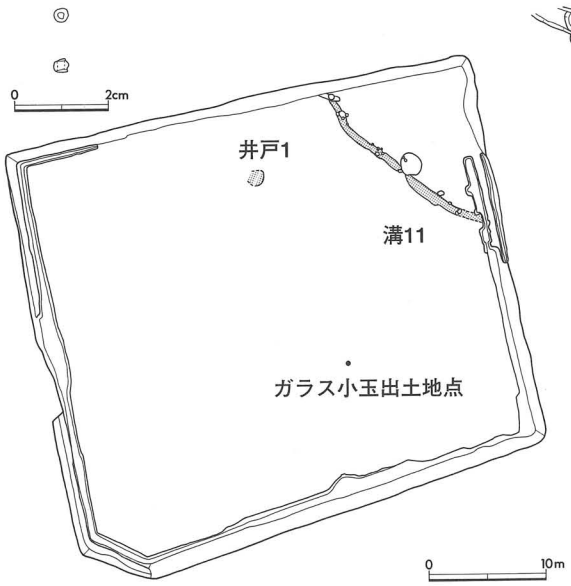


図157　B2区館跡造成以前の遺構配置図
（S=1/600・ガラス小玉はS=2/3）

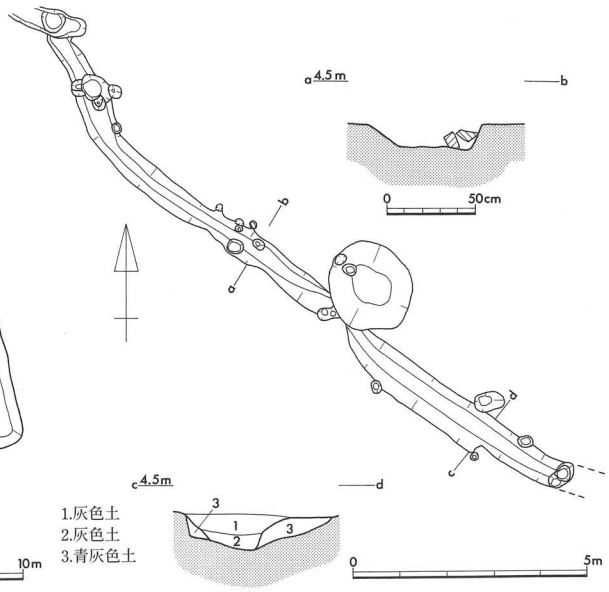


図158　B2区溝11実測図
（平面はS=1/150・断面はS=1/40）

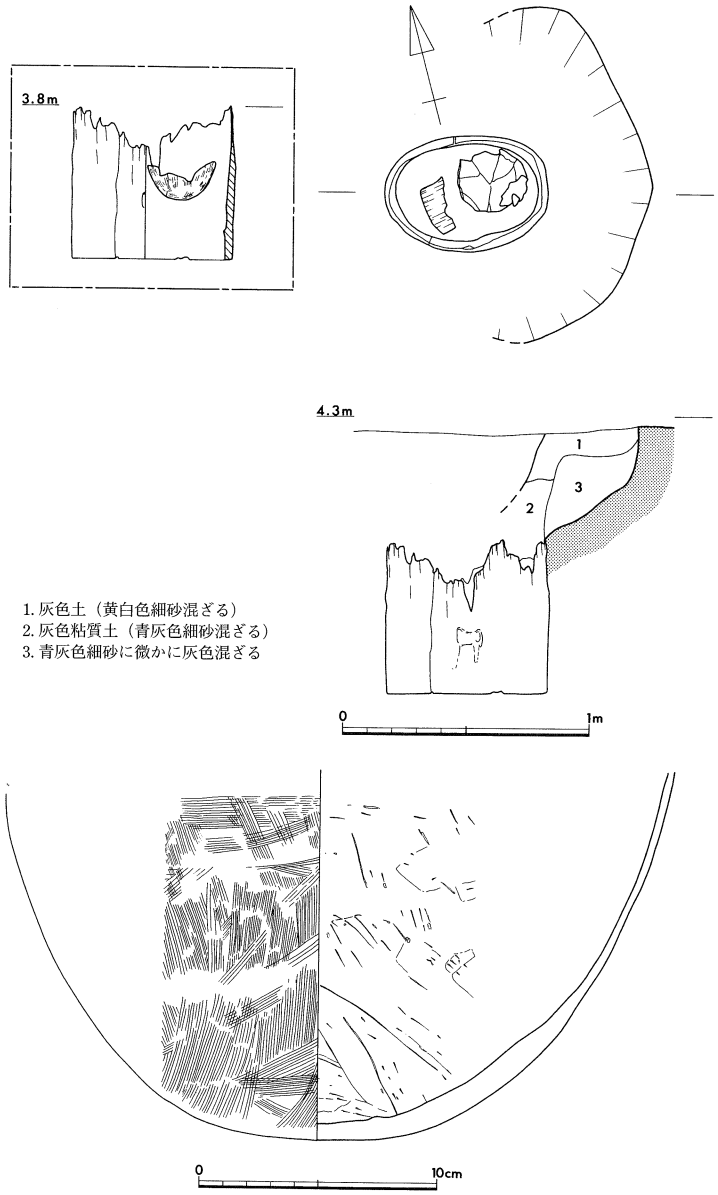


図159　B2区井戸1・遺物実測図（遺構はS＝1/30、遺物はS＝1/3）

井戸1（図159）　中世の土坑6により掘り形の西側1／2以上を失っている。また調査中の掘り形の崩落により井戸側も横倒しになったため埋土等の状況は不明である。掘り形は現状で南北1.36mの長さである。井戸側は丸太を分割してくり抜き組み合わせている。ただし組み合わせるための装置は見られない。井戸側は長径65.0cm、短径47.0cmの楕円形をしている。下面は平坦に仕上げている。下面から上部の最も良く残っている所までの高さは63cmである。下面のところで厚さ3.0cm。内面には下面から高さ12cmのところに段をもつ。また外面には長方形の抉り孔が見られる（図の正面図の中央あたり）。大きさは幅9.5cm、高さ6.0cm、奥行き2.5cm。機能は不明である。

井戸側の中からは井戸祭祀に伴うものと考えられる土師器甕が出土している。甕は胴部下半から底部までの部分で、正位の状態で井戸側の中に置かれていた。井戸側下面から甕の底部までの高さは復元すると24.0cmと思われる。井戸側の中の埋土は甕の底部の高さまでは細砂層、それより上位が粘質土層であった。このことから井戸側の下面から24.0cm上位までが涌水層に据えられていた部分と考えられる。

甕は胴部下半から底部まで残っている。底部は丸底を呈する。外面は粗いハケ調整、内面はヘラケズリ。古墳時代中期と思われる。

この他、遺構に伴うものではないが西大溝などから弥生土器、須恵器が微量出土している。当該期の遺構が他にも存在したことを示すものといえよう。

特異な遺物としてはガラス小玉がある（図157）。ガラス小玉は浅い柱穴の中から出土した。柱穴からは他に遺物は出土していない。色調は淡いブルー。とぐろ状になっており芯に巻きつけて製作したことが観察できる。径3.1～3.2mm、高さ2.1mm、重量は0.03ｇである。

第３節　小結

ここでは、特に館跡以後の遺構である墓について若干の検討を加えることとしたい。なお、館跡以前の遺構については既にＢ１区で触れているので繰り返さない。

蔵小路西遺跡Ｂ２区の墓について

性格　墓は館廃絶後に造営されたもので、いわゆる集団墓に相当するものとして位置付けられる。
構造・埋葬形態　検出された墓は木棺等の内部施設を有するもの２基、それ以外のもの３基に大別される。墓壙上部の施設はいずれも見られなかった。埋葬形態は掘り方の深さが10cm前後と浅いこと、墓３、５で遺されていた人骨から復元して、横臥ないしは仰臥屈葬であったものと思われる。人骨は遺っていないが最も小形の墓２はその規模から、成人ではなく小児の墓ではないかと推測される。同様の木棺をもつ事例として姫原西遺跡Ｃ区２号墓がある。[7] この墓では10代前半の小児が横位屈葬されているの確認されていることから、小児用の墓に小形の木棺が採用されているのかもしれない。頭位は墓４以外は北頭位のようである。
副葬品　墓１、３、４で副葬品が出土している。墓１、３が土師器坏と銭貨のセット、墓４が土師器のみである。土師器は墓１は底面で出土したことから遺体の傍らに一緒に埋葬したものと思われるが、墓３・４は天地逆で底面より高い位置で出土している。遺体の上に置いたものかもしれない。銭貨は錆着した状態で重なって出土していることから、何らかの方法で束ねて死者に持たせたのであろう。銭貨の構成を見ると判読できるものは総て渡来銭ないし渡来銭の模鋳銭である。六道銭の枚数は６枚と７枚である。中世墓の六道銭の枚数にはバラつきが見られることが指摘されている。[8]
本例は、当該期に「六枚」という数が全く意識されていなかったわけではない、ということを示す一例になろう。
時期　まず類似した構造をもつ姫原西遺跡の墓と本遺跡のそれを比較したい。二遺跡で共通しているのは、底板が無く釘を用いないで竹・木により構築した棺と底板に側板、小口板を組み合わせた棺の二種類の墓が存在していることである。相違点は副葬品に顕著に表れる。それは以下の３点である。姫原西遺跡が①土師器を複数点もつ②土師器・銭以外の副葬品がある（櫛、数珠）③銭貨が輪銭である。こうした副葬品の多彩な在り方が同時期のヴァリエ-ションか時期差なのか問題となろう。そこで出土した土師器の所産年代を比較したい。３点ともロクロ成形痕跡をとどめない丁寧な作りである。プロポーションは墓１が逆ハ字、墓３、４は体部中ほどで屈曲して外方へ開く、というように違いがある。しかし法量が口径12.1から13.8cmと大形化している点は一致している。これに対して姫原西遺跡の資料は坏、皿とも底径に対する口径の比率が高くなっている。本資料よりも後出的要素をもつものと考えられる。以上のことから本遺跡の墓が姫原西遺跡よりも旧い段階のものとして位置付けられる。

次に年代的位置付けだが、まず上限は館跡の廃絶時期である15世紀後半に置くことができる。これは墓１の資料が松江市下黒田遺跡[9]の資料と似ていることからも、矛盾しない時期といえよう。次に下限は姫原西遺跡よりも相対的に旧い時期に設定できる。姫原西遺跡の年代は副葬品である輪銭の年代観から16世紀後半に置くことができよう。このことから本遺跡の墓は15世紀後半から16世

紀前半頃に造営されたものと考えたい。

今後の課題　本遺跡中での新旧関係は既に記述したように、長期間にわたるものではなく他の墓の所在がわかる程度の時間幅と考えた。とすれば、①木棺墓と土壙墓という二つの埋葬方法の違い②六道銭・土師器の有無と被葬者の性別、年齢、階層差、といった課題が提起されてくる。また、本遺跡では認められなかったが上部施設である石塔との関係も検討が必要であろう。前章で触れたようにＢ１区では館内の根石に五輪塔水輪部が転用されている他、土坑内に投棄された地輪部も出土している。こうした石塔が墓標として建てられていたのか、供養塔であったのか、今後の検討が必要となろう。さらには副葬品の六道銭の問題も当地域における貨幣流通の在り方とも相俟って興味深いテーマといえる。

島根県内の研究動向としては、南前孝明氏[10]や西尾克己氏による集成作業がなされた他、注目すべき調査報告[11][12]も相次いでいる。さらに中世土器の研究[13]も近年着実に進められているところである。石塔に関しては下部構造を見据えた論稿は見られないものの、石塔の編年的研究は試みられており、幾つかの試案も提示されているところである。[14] 当地域における中、近世墓研究も新たな段階に到達したといえよう。

註

（１）間壁忠彦『考古学ライブラリー60　備前焼』ニューサイエンス社　1991

（２）森田勉･横田賢次郎「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

（３）上田秀夫「14～16世紀出土の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』２　1982

（４）この竹製品については、美濃晋平氏、笠原潔氏に実測図を見て頂いた。美濃氏からは、①古代尺八の可能性②横笛の可能性③その他の可能性について、ご教示頂いている。稿を改めて報告したい。

（５）森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』２　1982

（６）藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財調査センター研究紀要』第３輯　1995

（７）島根県教育委員会『姫原西遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告１』1999

（８）鳥取県布施鶴指奥墳墓群（15世紀後半～16世紀前半）では六道銭は６枚を基本としていたことが指摘されている。県内では西尾克己氏の集成等を見る限りでは枚数にはバラつきが見られるようである。
鳥取県教育委員会『東桂見遺跡・布施鶴指奥墳墓群』1992
西尾克己「島根県の中世墓出土銭貨」『出土銭貨』第２号　出土銭貨研究会　1994

（９）松江市教育委員会『下黒田遺跡発掘調査報告書』1988

（10）南前孝明「山陰の中世墓」『季刊文化財』第84号

（11）松江市教育委員会　(財)松江市教育文化振興事業団『黒田畦遺跡』1995
16世紀代前後の６基の土壙墓が調査されている。このうちＳＸ－０２からは無文銭90枚以上を含む100枚前後の銭貨が出土しており注目される。

（12）安来市教育委員会　『清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』1998
県内初の中世～近世の大規模な墳墓群の調査報告である。

（13）松江考古学談話会『松江考古』第８号　1992ほか

（14）間野大丞「高津川上・中流域の宝篋印塔」『宍道町歴史叢書』第１号　1996

第４章　Ｃ区の調査

第１節　調査の前の状況と経過

Ｃ区は、中世の館跡が検出されたＢ区と市道を挟んで東側に隣接する区域で、中世の館跡に関連する付随施設または同時期の水田等の生産址の存在が予想されていた箇所であった。このため試掘調査を実施したところ、黒褐色の包含層状の土層の下から溝状の遺構及び複数の土坑を検出した為、本発掘調査を実施する運びとなった。

Ｃ区の調査対象面積は約2,800m²であるが、調査区の南側には県立の公共施設が存在しており、その移転の関係で調査は二カ年にわたって実施し、96年度は北半部（Ｎ区）の調査を実施し、97年度には県の公共施設跡の南半部（Ｓ区）の調査を行った。また排土処理の問題から一度に調査を行うことは困難であることから、それぞれを東西両地区に分けて、東側をＣ１区、西側をＣ２区と命名し、調査を実施した。したがって、Ｃ区は96年度に調査を実施したＣ１区の北側（Ｃ１－Ｎ区）、Ｃ２区の北側（Ｃ２－Ｎ区）、97年度に調査を実施したＣ１区の南側（Ｃ１－Ｓ区）、Ｃ２区の南側（Ｃ１－Ｓ区）の都合４箇所に分けて調査を行ったこととなる。

96年度の調査は９月17日に西側のＣ２－Ｎ区から調査に着手し、12月16日にＣ－Ｎ区全体の調査を全て終了した。97年度の調査は４月から調査に着手し、５月にＣ－Ｓ区の調査を全て終了した。

以下、96年度に調査を実施した、Ｃ－Ｎ区から順に検出した遺構・遺物について順次報告する。

第２節　Ｃ１－Ｎ区の調査

調査区の立地

Ｃ１－Ｎ区はＣ区で最もＢ区の中世館跡に隣接する調査区であり、多数の遺構の存在が予測され

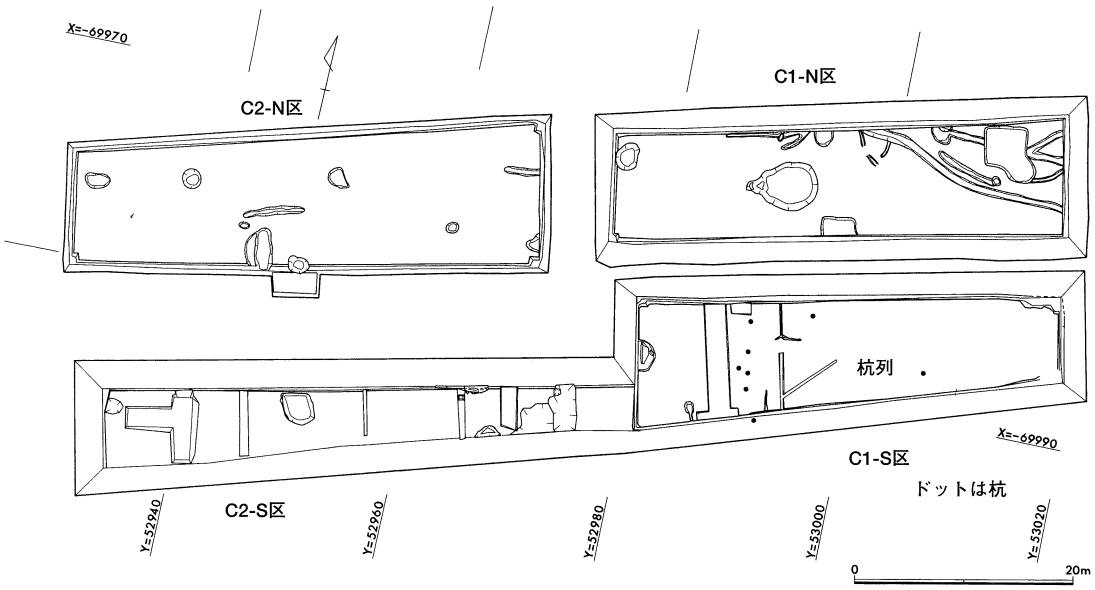


図160　C区全体図（S=1/600）

た箇所である。調査区の標高は現況の水田面で4.5m前後を測る。

遺構面は包含層である黒褐色粘質土の直下に存在しており、そのレベルは約3.9m～4.15mを測り、北東部から南西部にかけて、ごく緩やかに傾斜している。調査区の北東部には細砂質～シルト質状の地山である微高地がわずかに存在し、それ以外は低湿地状の粘質土（泥層）が遺構面を形成している状況であった。

遺構の配置（図161）

遺構は北西から南東へ延びる数条の溝（ＳＤ01～05）が北東部に集中しており、前述した微高地部分と低湿地部分を画している。その他の溝や土坑等の遺構も調査区北端部に集中するような状況で検出された。

調査区の大部分を占める地山が低湿地の部分は遺構は散漫であり、調査区中央に大型の土坑（ＳＫ05）が位置し、西端にＳＫ07が存在する他は目立った遺構は検出されていない。

基本層序（図162）

当調査区の基本層序は、表土（現在の水田耕作土）の下に、厚さ約10cm前後の黒褐色粘質土（図162の２層）が堆積していた。この土層は隣接するＢ区の中世遺構で出土している糸切底の土師質土器片を少量含んでいることから、中世館跡とほぼ同時期に形成された土層と考えられる。

２層は、後章で述べる自然科学的分析の結果や、同層中にその直下層である暗灰褐色シルト質粘土ブロックを部分的に巻き込んでいる状況が観察された点、この層を除去した際の精査面において半月状の鋤先痕を若干検出した点などからみて、中世の水田耕作土と判断される。調査時の際にも、この点を留意し水田畦畔の検出に努めたが、現在の耕作によって既に同層の上半部は削平されており、畦畔を検出するには至っていない。

２層の下には灰褐色～暗オリーブ色の細砂混じり泥層（2－4層等）及び暗灰褐色泥層（3－2層）が堆積しており、遺構面を形成している。3－2層中からは遺構調査後の断ち割り調査時に弥生土器（中期末）、古式土師器、須恵器片が若干出土しているが、層の明確な形成時期は不明である。3－2層下には灰色細砂土の基盤層（４層）が存在している。この土層は北東から南西にむけて傾斜しており、最も標高の高い北東部では前述のとおり遺構面を検出している。この土層も完掘後に断ち割

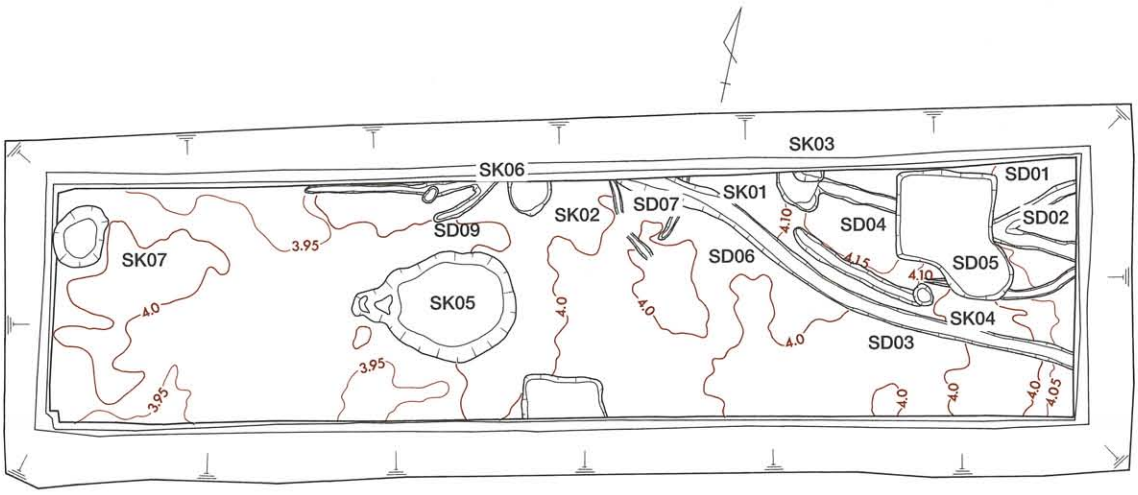


図161　C1-N区調査後測量図（S＝1/300、5cmコンター）

り調査を実施したが、明確な遺構・遺物は検出されなかった為、全面調査は実施していない。

検出した遺構・遺物

1．土坑（図163・164）

ＳＫ01（図163）

調査区北東部に位置し、北側は調査区周囲に巡らせた排水溝によって失われている。また北側はＳＫ03と切り合い関係にあり、ＳＫ03に先行する。また東側はＳＤ02の東端と接しており、ＳＤ02→ＳＫ01の関係にある。

規模・形態

土坑の形態は約半分しか残存していないため不明確だが、現状では平面形は不整楕円形状を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。土坑の規模は現存する部分で、径約2.2m、深さ約10cmを測る。

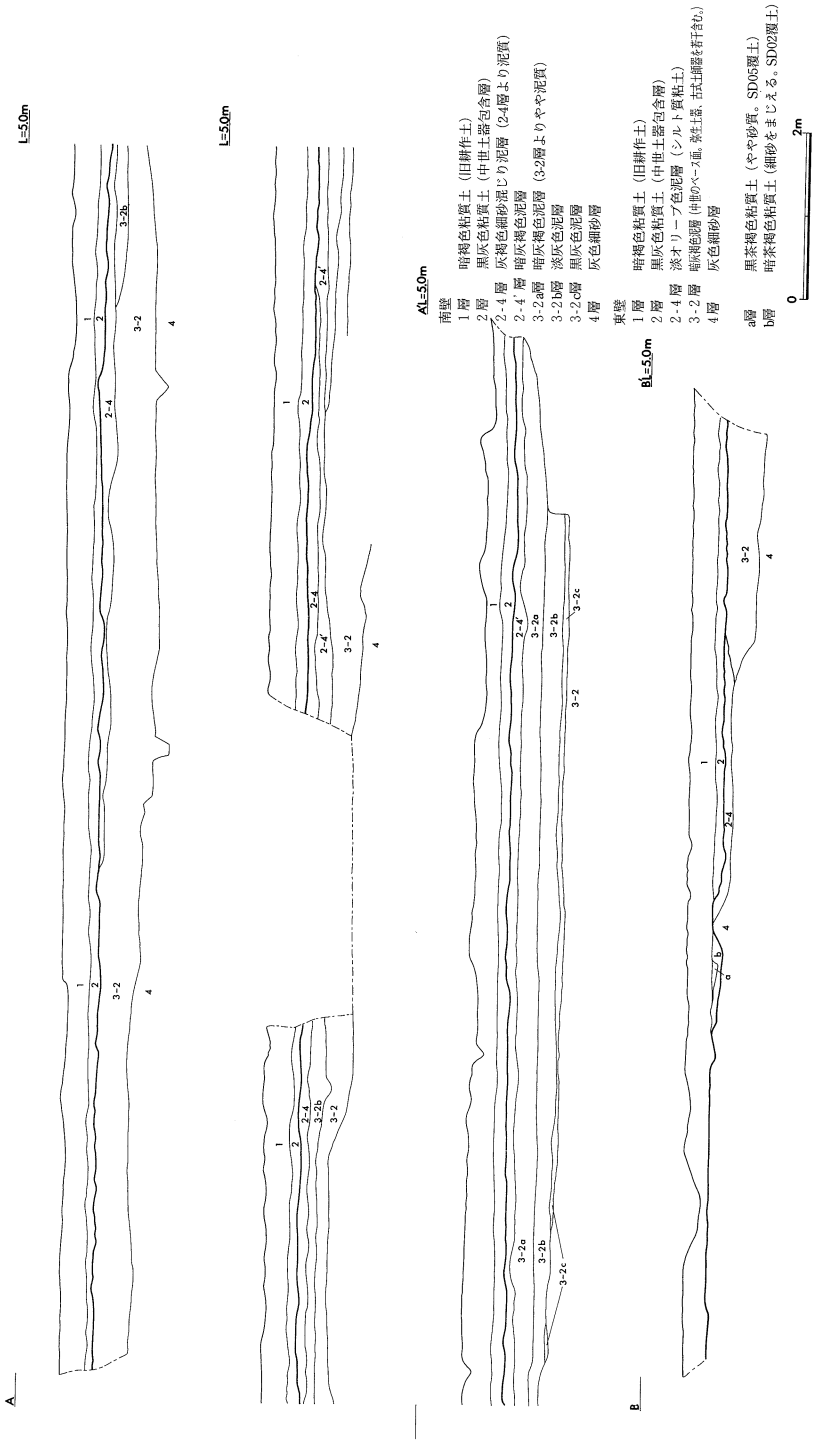


図162　C1-N区調査区南壁・東壁セクション（S=1/80）

覆土　土坑の覆土は黒褐色粘質土の単一層である。

遺物　当土坑からは遺物は一切出土していない。

年代・性格　当土坑からは遺物が一切出土していない為、年代・性格共に不明と言わざるを得ないが、層位的関係から弥生時代後期以降～中世以前の遺構と判断される。また、ＳＤ02との位置関係からＳＤ02と有機的関係をもつ性格の遺構であった可能性も考慮される。

ＳＫ02（図163）

調査区ほぼ中央の北端に位置する土坑で、前述の基盤層である４層に掘り込まれた土坑であるが、ＳＫ01と同様、北半部は調査区外へと延びている。

規模・形態　検出された部分が半分程度な為、全体の形状は不明だが、平面形は不整楕円形状を呈し、断面形は皿状を呈し、ＳＫ01に類似する。土坑の規模は残存部で長径1.6m以上、短径1.5m、深さ約15cmを測る。

覆土　土層は３層に分けられ、上層は黒褐色系の粘質土、下層には暗灰褐色系の粘質土が堆積している。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

年代・性格　出土遺物が無く、年代、性格については不明と言わざるを得ないが、層位的関係から中世以前の遺構と想定される。

ＳＫ03（図163）

前述のとおり、ＳＫ01に掘り込まれた土坑である。遺構の北半はＳＫ01と同様、調査区周囲に巡

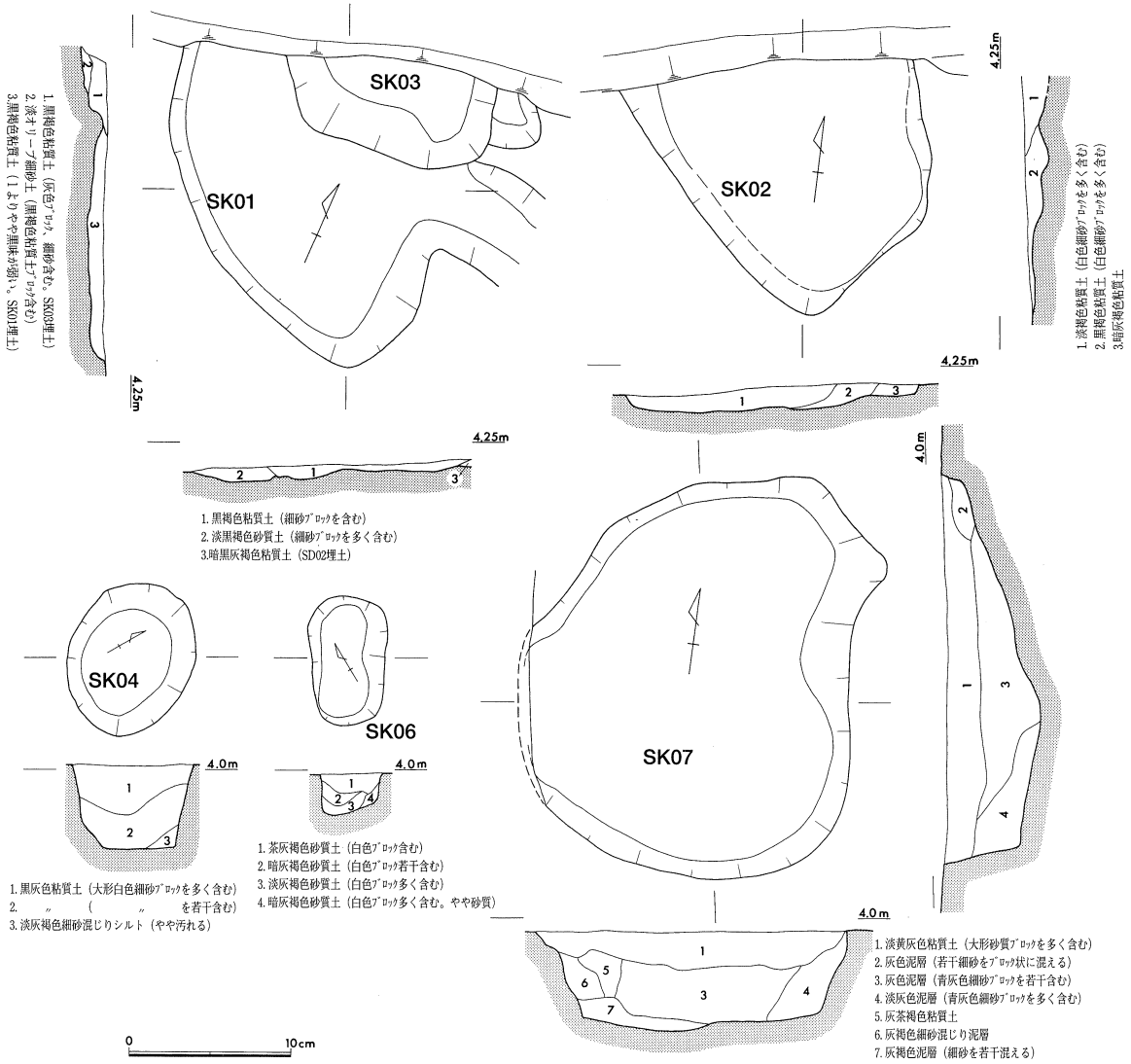


図163　C1-N区SK01～04，06.07実測図（S＝1/40）

らせた排水溝によって半分以上失われている。

規模・形態　半分以上が失われているため、正確な規模・形態は不明だが、残存する部分で長さ1.3m、深さ15cm前後を測る。

覆土　覆土は2層に分かれており、上層に黒褐色粘質土、下層に淡オリーブ色細砂土が堆積していた。

遺物　ＳＫ01・02と同様、遺物は出土していない。

年代・性格　遺物が出土していないため年代・性格は不明だが、切り合い関係からＳＫ01に後出する。

ＳＫ04（図163）

調査区の東側に位置する小型の土坑で、土坑西側はＳＤ04の東端と接している。

規模・形態　平面形は楕円形状を呈し、長径1.0m、短径0.8mを測る。土坑の壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、深さ0.5mを測る。

覆土　土坑内覆土の大半は白色細砂ブロックを多く含む黒褐色粘質土で占められていたが、細砂ブロックの含み具合で上下に分層できる。

遺物　図化していないが棒状の木製品が1点出土している。

年代・性格　遺物が出土していないが、層位的関係から中世以前の遺構と考えられる。またＳＤ04との関係から、遺構の性格としては、ＳＫ01と同様、溝と関連した溜桝状的な性格が一案として想定される。

ＳＫ05（図164）

調査区のほぼ中央部に位置する大型の土坑である。遺構検出面は暗灰褐色泥層（3－2層）であるが、出土遺物からみて、より上層から掘り込まれた遺構である可能性が高い。

規模・形態　平面形態は長楕円形に突出部が付随する形態を呈する。突出部を除いた規模は長径5.3m、短径4.4mを測る大型の土坑である。突出部は階段状を呈しており、平面形で1.6m×1.6mを測る。断面形はやや深い皿状を呈し、深さ1.05mを測る。

覆土　覆土は大きく黒色腐植土（14層）を境に上下2層に分かれており、上層には主として細砂ブロックを含む暗灰褐色系の粘質土が堆積しており、下層には淡黒褐色粘質土（15層）が堆積している。この点からみて、ＳＫ05は一度掘り込まれ放棄された後、14層下まで新たに掘削され使用された可能性が高い。

遺物　図化していないが、上層からは古式土師器細片、下層からは土師質土器が若干出土している。また下層からは曲物の底板と思われる木製品が出土した。なお、土坑底部からは人頭大の河原石が数点出土している。

年代・性格　遺構の年代は出土遺物からみて中世のものと判断されるが細かな年代については特定できない。性格については、階段状の施設が付随している点や土坑の規模・形態からみて、貯水施設的な性格のものである可能性が想定される。

ＳＫ06（図163）

調査区中央部の北壁付近で検出した小型の土坑でＳＤ08を切り込んで掘り込まれている。

規模・形態　平面形は長楕円形で、規模・形態ともＳＫ04に類似する。規模は0.8m×0.5mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底面はやや傾斜している。検出面から底面までの深さは0.25m

を測る。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

覆土　土坑内の覆土は白色ブロックを含む暗灰褐色系の砂質土が充填していた。

年代・性格　出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ07（図163）

調査区北西端で検出した、やや大型の土坑である。西側に隣接する調査区であるＣ２－Ｎ区で検

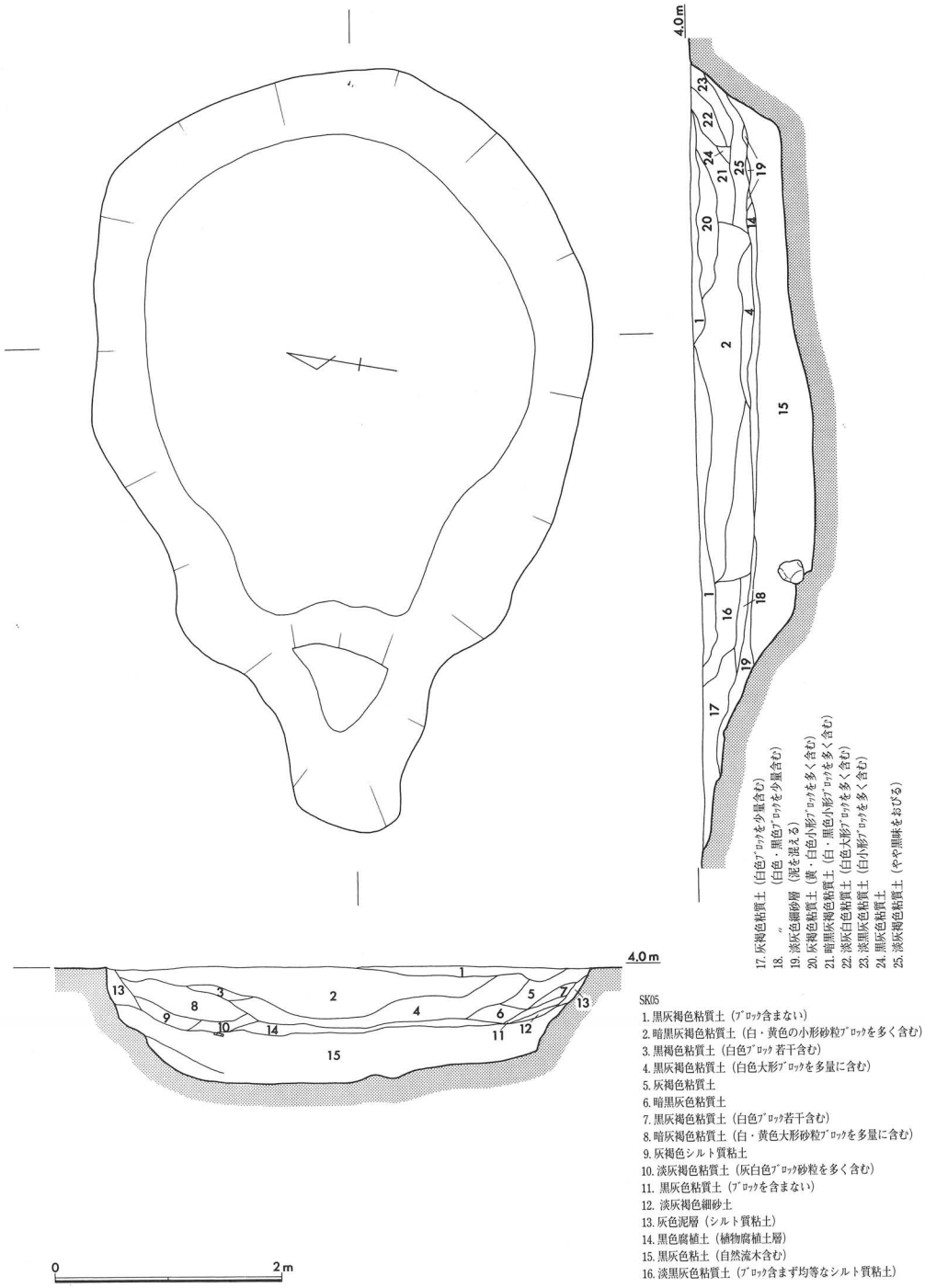


図164　C1-N区SK05実測図（S＝1/60）

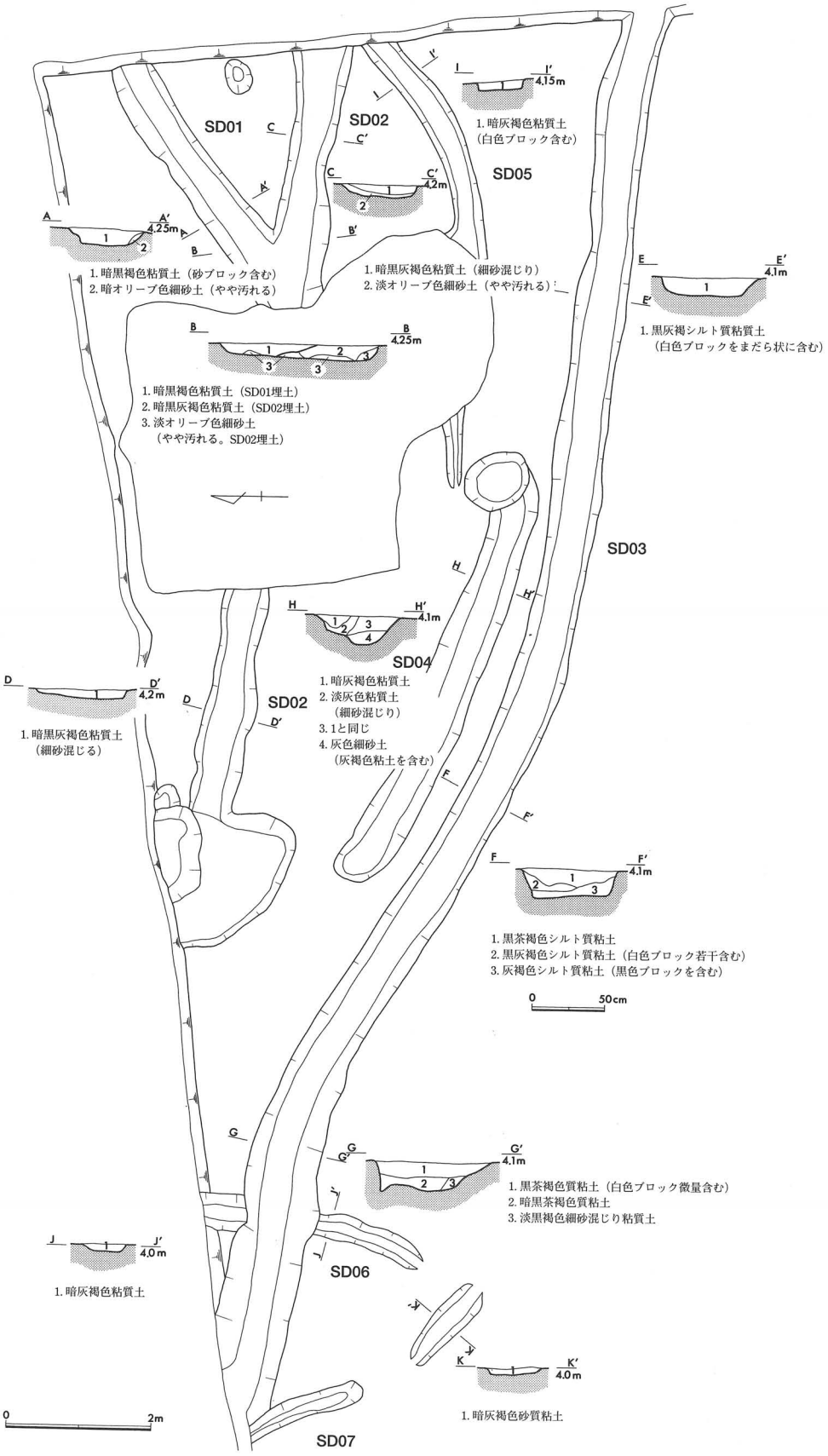


図165　C1-N区SD01～07実測図（平面S＝1/80、断面S＝1/40）

出した土坑群に類似するものである。

規模・形態　プランは不整円形を呈し、径約2.5mを測る。壁は比較的急角度に掘り込まれており、底面はほぼ水平を呈する。検出面から底面までの深さは0.6mを測る。

覆土　土坑内覆土は大きく２層にわかれ、上層には淡黄灰褐色粘質土、下層には灰褐色系の泥層が堆積していた。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

年代・性格　出土遺物が無く、不明と言わざるを得ないが、形態や規模からみてＣ２－Ｎ区で検出した土坑群と同様な性格のものと考えられる。

２．溝（図165・166）

ＳＤ01（図165）

調査区北東部で検出した溝で、東側は調査区外へ延び、西側は試掘調査時の撹乱によって失われている。

規模と形態　溝の規模は現存長で長さ4.0m、幅0.6mを測る。断面形は浅い逆台形で深さ10cm前後である。

覆土　溝の覆土は基本的に暗黒褐色粘質土の単一層である。

遺物　古式土師器、土師質土器の細片が若干出土している。

年代・性格　ＳＤ01はＳＤ02と切り合っており、ＳＤ02に後出する。出土遺物中に土師質土器片が含まれていることや、調査区北東部の他の溝群と方向を違えている点からみて、他の溝とは異なり中世の時期のものである可能性が高い。

ＳＤ02（図165）

調査区北東部で検出した溝で、ちょうど細砂質の微高地と低湿地状の泥層との境界を区画するかのように南東から北東の方向へ巡らされた溝である。

規模と形態　溝の東側は調査区外へ延び、西端はＳＫ01によって切られている。現状での長さは10.8m、幅0.3～0.4mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ約10cm程度である。

遺物　溝内から弥生終末期～古式土師器細片が若干出土している。

覆土　基本的に暗黒灰褐色粘質土の単一層である。

年代・性格　出土遺物はわずかであるが、遺物を参考とすれば弥生後期末～古墳時代前期前後の遺構である可能性が高い。溝の性格としては、立地状況からみて居住区域である微高地とその外の低地を区画するとともに、排水的役割を担う性格のものであったと想定される。

ＳＤ03（図165）

ＳＤ02と同様微高地と低地を区画するかのように巡らされた溝で、やや低地側に掘り込まれた溝である。よって西側では細砂層の基盤層に掘り込まれているが、東側では基盤層の上に堆積している泥層（3－2層）に掘り込まれている。

規模と形態　溝の両端とも調査区外へ延びているため全長は不明だが、調査区内で長さ20.4m、幅0.4m～0.5mを測る。溝の断面形は浅い逆台形で12cm～20cmを測る。溝の底面はほぼ平坦で、底面のレベルは北西から南西へむけてゆるやかに傾斜している。

覆土　溝内の覆土は西側では黒茶褐色系の粘質土、東側ではシルト質粘土が堆積していた。

遺物　溝内からは弥生時代終末～古墳時代前期初頭の土器が若干出土しているが、細片のため図化していない。

年代・性格　出土遺物からみて当溝の年代は弥生時代終末～古墳時代前期の可能性が高い。溝の性格についてもＳＤ02とほぼ同様のものであった可能性が高い。

ＳＤ04（図165）

ＳＤ02とＳＤ03との間で検出した短い溝で、東端はＳＫ04と接している。

規模と形態　現状での長さは約6.3ｍ、幅約60cmを測る。溝の深さは20cm前後である。

覆土　基本的に上層に暗灰褐色系の粘質土、下層に灰色細砂土が堆積していた。

遺物　遺物は出土していない。

年代・性格　出土遺物が無く、年代は不明だが、ＳＤ03とほぼ平行している点からみて、ほぼ同時期の遺構と考えられる。性格については、ＳＫ04と有機的に関連した性格の溝と想定される。

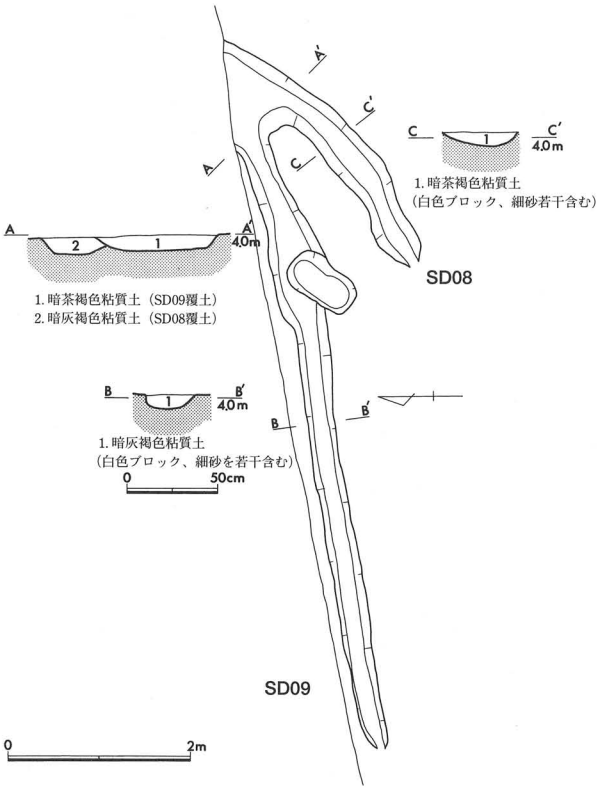


図166　C1-N区SD08・09実測図（平面S＝1/80、断面S＝1/40）

ＳＤ05（図165）

ＳＤ02とＳＤ04との間で検出した溝で、試掘トレンチによって一部を失われている。

規模と形態　溝の東側は調査区外へ延びているが、調査区内での規模は、長さ6.2ｍ、幅30cmを測る。

覆土　覆土は基本的に暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物　当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格　調査区東壁の土層観察からＳＤ02より後出するのは明らかであるが、出土遺物が無いため細かな年代については不明と言わざるを得ない。位置関係からみてＳＤ02～04とほぼ同時期に営まれたものと推測される。

ＳＤ06（図165）

調査区中央部の北端で検出した南北に走る小規模な溝で、ＳＤ03と切り合い関係にある。北側は調査区外へと続いている。

規模と形態　調査区内での規模は、長さ3.2ｍ、幅0.3ｍを測る。溝の断面形は浅い皿形を呈し、深さは７cm前後と極めて浅いことからみて、本来の掘り込み面はより上位にあったと考えられる。

覆土　溝内の覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物　当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格　出土遺物が無いため細かな年代については不明だが、掘り込み面がより上面に想定されることからみて、ＳＤ02～05より後出する遺構と想定される。

ＳＤ07（図165）

ＳＤ06の西側で検出した南北に走る小規模な溝で、ごく浅いため一部途切れている。北側は調査区外へと続いている。

規模と形態　調査区内での規模は一部途切れているが、長さ3.8m、幅0.4mを測る。溝の深さは５cm前後と極めて浅い。

覆土　溝内の覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物　当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格　出土遺物が無いため細かな年代については不明だが、掘り込み面がより上面に想定されることからみて、ＳＤ06と同様ＳＤ02～05より後出する遺構と想定される。

ＳＤ08（図166）

調査区西側北端で検出した溝で、南西から北東へ延び、北東側は調査区外へと続いている。またＳＤ09と切り合い関係にありＳＤ09に先行する。

規模と形態　調査区内での規模は、長さ3.2m、幅0.4mを測る。溝の断面形は浅い皿形を呈し、溝の深さは10cm前後を測る。

覆土　溝内の覆土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

遺物　遺物は土師器細片が若干出土しているのみである。

年代・性格　年代を窺える遺物が無いため、細かな年代・性格ともに不明である。

ＳＤ09（図166）

調査区西側北端で検出した溝で、ほぼ東西に延び東端はＳＤ08によって切られている。

規模と形態　現存する規模は、長さ7.0m、幅0.3～0.6m、深さ10cm前後を測る。

覆土　溝内の覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物　当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格　出土遺物が無いため細かな年代については不明であるが、溝の方向がＳＤ03と共通している点、微高地と低地を画する位置に溝が巡っている点などからみて、ＳＤ02～05と同時期である可能性が高い。場合によってはＳＤ03と同一の遺構である可能性もある。

第３節　Ｃ２－Ｎ区の調査

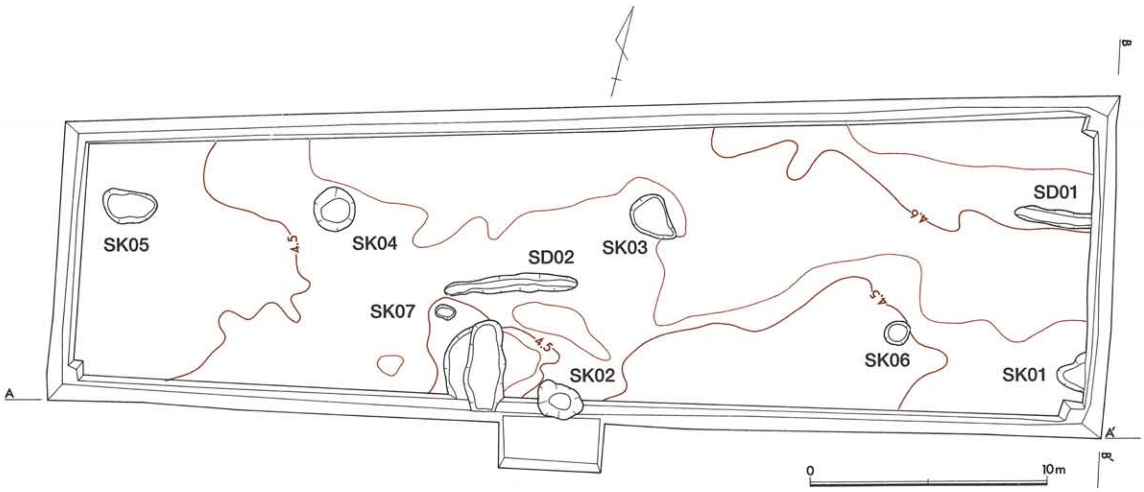


図167　C2-N区調査後測量図（S＝1/300、5cmコンター）

調査区の立地

Ｃ２－Ｎ区はＣ１－Ｎ区の西側に隣接する調査区である。調査区の現状での標高は5.0ｍ前後を測る。遺構面はＣ１－Ｎ区と同様、包含層である黒褐色粘質土の直下に存在しており、北東から南西にかけて、ごく緩やかに傾斜している。当調査区はＣ１－Ｎ区と異なり、遺構面には細砂質の微高地は存在せず、低湿地状灰褐色シルト層～泥層が遺構面を形成している。

遺構の配置（図167）

当調査区の遺構密度は極めて疎らで、Ｃ１－Ｎ区西端で検出したＳＫ07に類似する土坑が散漫に分布する他は小規模な溝が数条存在するのみである。

基本層序（図168）

当調査区の基本層序は、基本的にＣ１－Ｎ区とほぼ同じである。近年の造成土・耕作土の直下に厚さ約10cm前後の黒褐色粘質土（図168の２層）が堆積しており、やはり土師質土器片を若干含んでいることから中世の水田耕作土と判断される。

２層の下には北半部に暗灰褐色細砂土（３－１層）が薄く部分的に堆積し、古

図168　C2-N区調査区南壁・東壁セクション（S＝1/80）

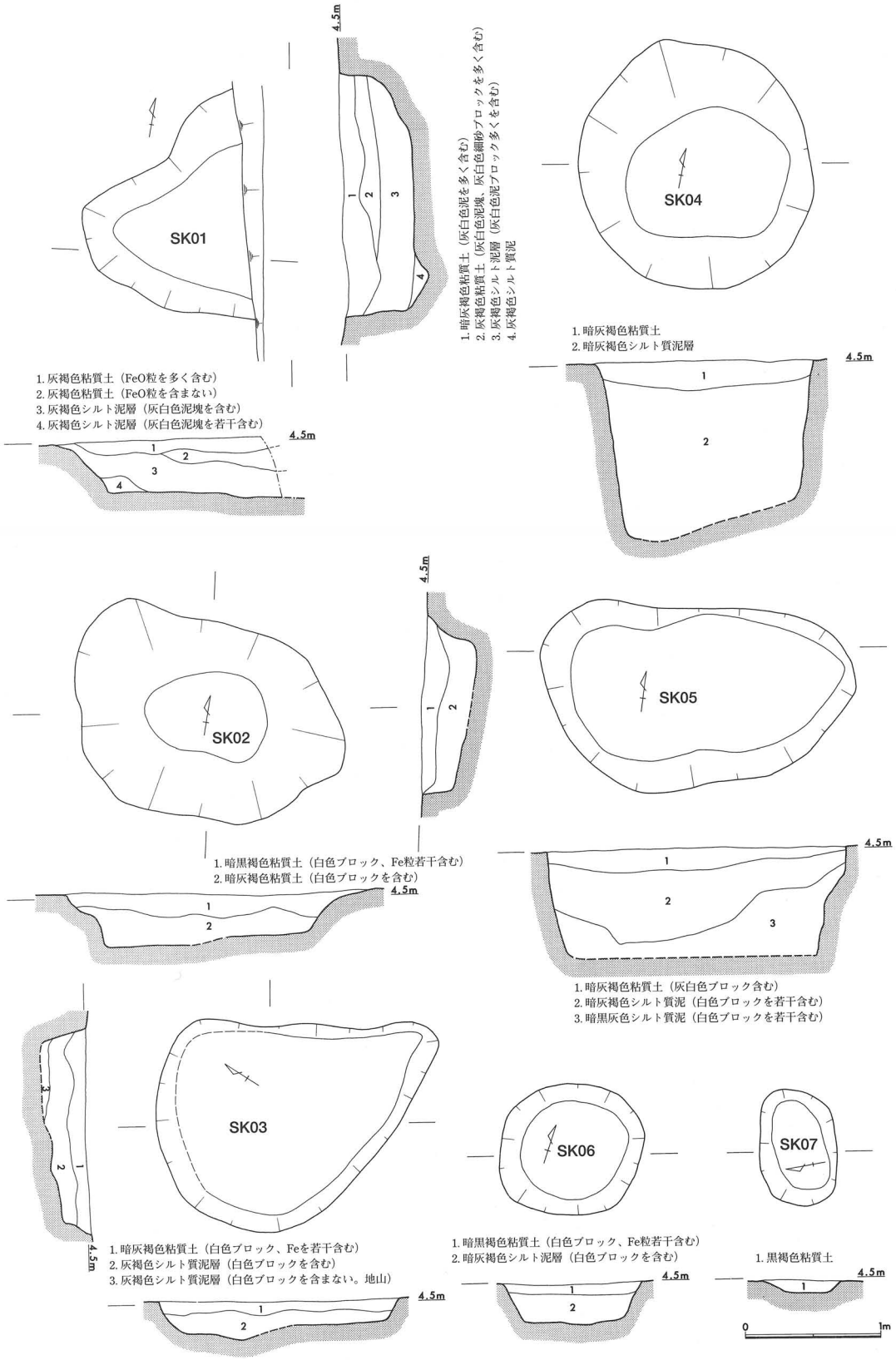


図169　C2-N区SK01～07実測図（S＝1/40）

墳時代後期の須恵器・土師器片をわずかに含んでいる。その直下の灰褐色シルト層（3－2層）上面に遺構が営まれている。この3－2層は厚さ約20cm前後で酸化鉄粒を多く含む。その下層にはＣ１－Ｎ区でみられた灰褐色シルト質泥層（3－3層）が厚く堆積している。当調査区ではＣ１－Ｎ区で検出した細砂質の基盤層は断ち割り調査（深さ約２ｍ）では確認できておらず、より下に埋没しているものと想定される。

検出した遺構・遺物

１．土坑（図169）

ＳＫ01（図169）

調査区東端で検出した中形の土坑で東半分は調査区外へ延びている。

規模・形態　平面形は半分しか検出していないため不明だが不整楕円形状を呈し、長径1.7ｍを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底面はやや平坦面を呈する。検出面から底面までの深さは0.5ｍを測る。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

覆土　上層に暗灰褐色粘質土、下層にブロック混じりの灰褐色シルト質泥層が堆積していた。

年代・性格　出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ02（図169）

調査区中央部南端で検出した中形の土坑である。

規模・形態　プランは長楕円形を呈し、規模は2.1ｍ×1.5ｍを測る。比較的浅い土坑で底面はやや広い平坦面を呈し、深さは0.4ｍを測る。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

覆土　上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土で、いずれも白色細砂ブロックをまじえている。

年代・性格　出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ03（図169）

調査区中央部で検出した比較的浅い土坑である。

規模・形態　プランは不整三角形状を呈し、規模は2.2ｍ×1.7ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ0.3ｍを測る。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

覆土　上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土で、いずれも白色細砂ブロックをまじえている。

年代・性格　出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ04（図169）

調査区西側で検出した中形の土坑である。

規模・形態　プランは不整円形を呈し、規模は1.75ｍ～1.85ｍを測る。壁面はほぼ垂直で深さ約1.3ｍを測る。

遺物　わずかに古墳時代後期のものと思われる土師器細片が出土している。

覆土　上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色シルト質泥層が堆積しており、いずれも白色細砂ブ

ロックを含んでいることから基盤層である3－3層と区別が可能であった。

年代・性格　出土遺物から古墳時代後期前後のものである可能性があるが、明言できない。

ＳＫ05（図169）

調査区西側で検出した中形の土坑である。

規模・形態　プランは長楕円形状を呈し、規模は2.3m×1.4mを測る。壁は比較的急角度に掘り込まれており、深さ0.8mを測る。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

覆土　ＳＫ04等と同じく、上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土で、いずれも白色細砂ブロックを含んでいる。

年代・性格　出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ06（図169）

調査区東側で検出した小規模な土坑である。

規模・形態　プランはほぼ円形を呈し、径1.0m～1.1mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、深さ0.3mを測る。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

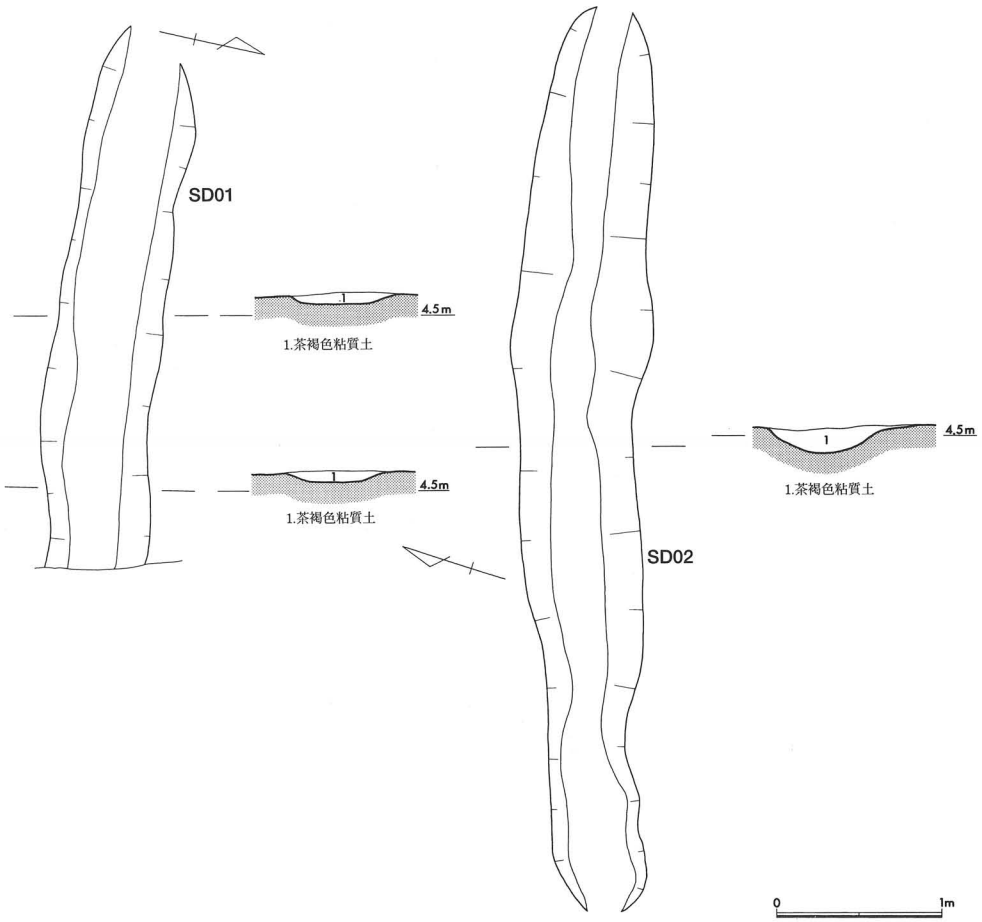


図170　C2－N区　SD01・02実測図（S＝1/40）

覆土　他の土坑と同様、上層に黒褐色系の粘質土、下層に灰褐色系のシルト質泥層である。

年代・性格　出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ07（図169）

調査区中央部のＳＤ02付近で検出した小規模な土坑である。

規模・形態　プランは長楕円形を呈し、径0･6m～0.9mを測る。断面形は浅い皿状で深さ10cm前後と極めて浅い。

遺物　当土坑からは遺物は出土していない。

覆土　黒褐色粘質土の単一土層である。

年代・性格　出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

２．溝（図170）

ＳＤ01（図170）

調査区東側で検出した溝で、東側は調査区外へ延びている。

規模と形態　調査区内での溝の規模は現存長で長さ3.4m、幅0.6mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ８cm前後とごく浅い。

遺物　遺構内からの出土遺物は無いが、付近から古墳時代後期の須恵器片が出土している。

覆土　溝の覆土は茶褐色粘質土の単一層である。

年代・性格　埋土の状況等からみて、土坑群より新しい時期の遺構と考えられるが、詳細な年代は不明である。

ＳＤ02（図170）

調査区中央部で検出したごく浅い溝である。

規模と形態　調査区内での溝の規模は現存長で長さ5.5m、幅0.5m～0.9mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは15cm前後である。

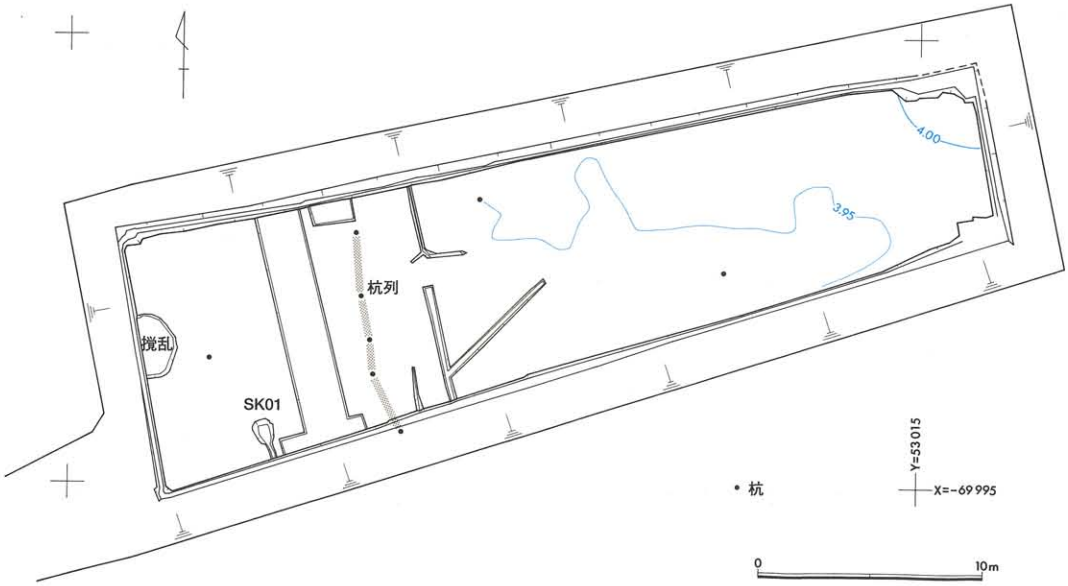


図171　C1－S区　全体図（S＝1/300,5cmコンター）

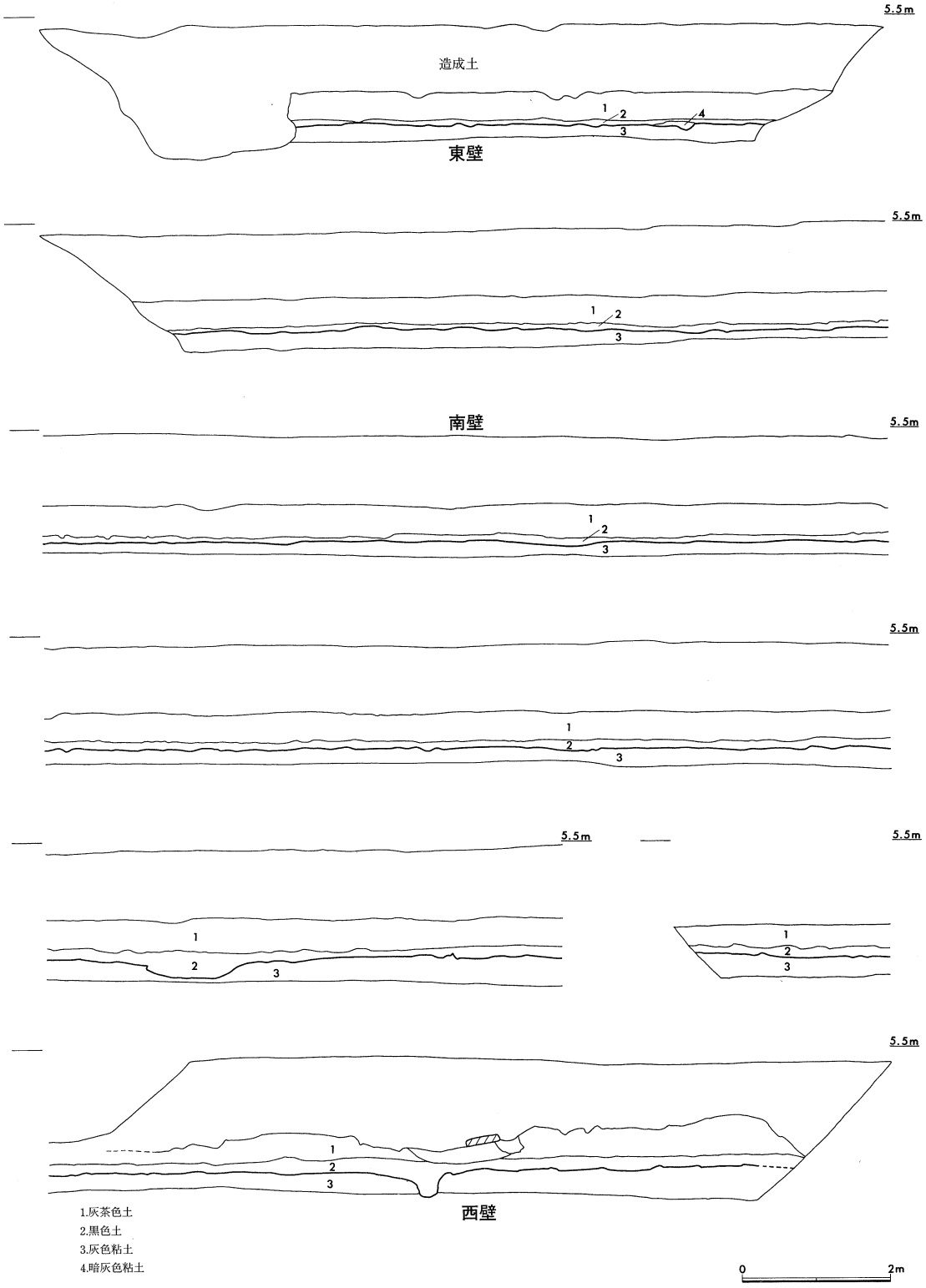


図172　C1－S区　調査区東壁・南壁・西壁土層堆積図（S＝1/80）

遺物　遺構内からの出土遺物は無い。

覆土　ＳＤ01と同様、茶褐色粘質土の単一層である。

年代・性格　埋土の状況等からみて、ＳＤ01と同様土坑群より新しい時期の遺構と考えられるが、詳細な年代は不明である。

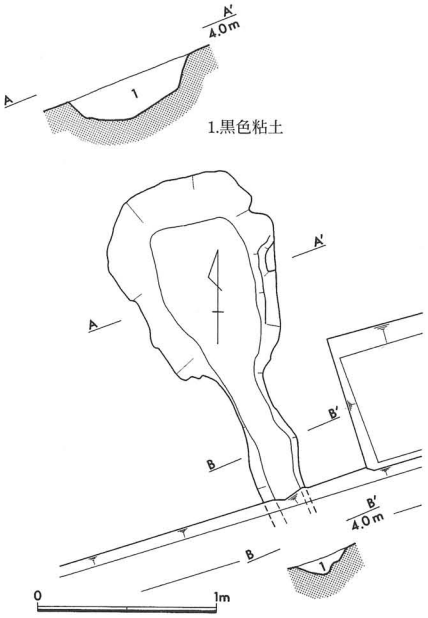


図173　C1－S区　SK01実測図（S＝1/40）

第４節　Ｃ１－Ｓ区の調査

調査区の立地（図160）

Ｃ１－Ｎの南側に位置する。調査前は県立の公共施設の敷地内であり厚い造成土が堆積していた。この造成はかなり大規模に行われたようであり、遺構面にまでその影響を及ぼしていた。造成土の下層は遺物包含層である黒色粘土層となり調査区一面に拡がっていた。この直下が遺構面であり、灰色粘土層をベースとしている。遺構面は標高4.0～3.9m前後で、調査区内ではわずかに北東から南西に向けて傾斜している。この灰色粘土層は調査用排水溝の掘削時にも遺物が出土しなかったため、Ｃ１－Ｓ区と同様に本調査は行っていない。

遺構の配置（図171）

遺構として明確に検出できたのは土坑ＳＫ01と杭列のみである。

基本層序（図172）

基本的に北側に位置するＣ１－Ｎ区と変わらない。厚い造成土の下に厚さ10cm前後の黒色粘質土（２層）が堆積し、基盤層である灰色粘土層（３層）に至る。黒色粘質土からは少量だが中世土師器が出土しており、Ｃ１－Ｎ区の調査成果からも中世の水田耕作土と考えられる。

検出した遺構

１．土坑

ＳＫ01（図173）

規模・形態　長楕円形の土坑に溝が連結している。土坑部は長径1.15m、短径0.85m、深さ22cm。溝部は調査区外にも延びているため全容は不明だが、検出長は0.75m、幅0.38m、深さは９cmである。土坑の壁は緩やかなカーヴを描いて底面に至る。溝部も同様で断面Ｕ字形をなしている。

覆土　土坑、溝とも覆土は黒色粘土の単一層である。

遺物　小片だが中世土師器が２点出土している。

年代・性格　中世と考えられる。性格は不明であるが、溝と土坑が連結してることから、あるいは、水溜めのような機能かもしれない。

２．杭列（図174）

調査区のやや西側を南北方向に横断するように並んでいる。杭は全部で７本あり、いずれも丸杭である。杭の太さは直径５cm前後。杭の打ち込まれた時期は不明であるが、杭の先端の標高を較べると、三つのグループに分かれる。一つは、杭の先端が標高3.9mで、かろうじて基盤層に達し

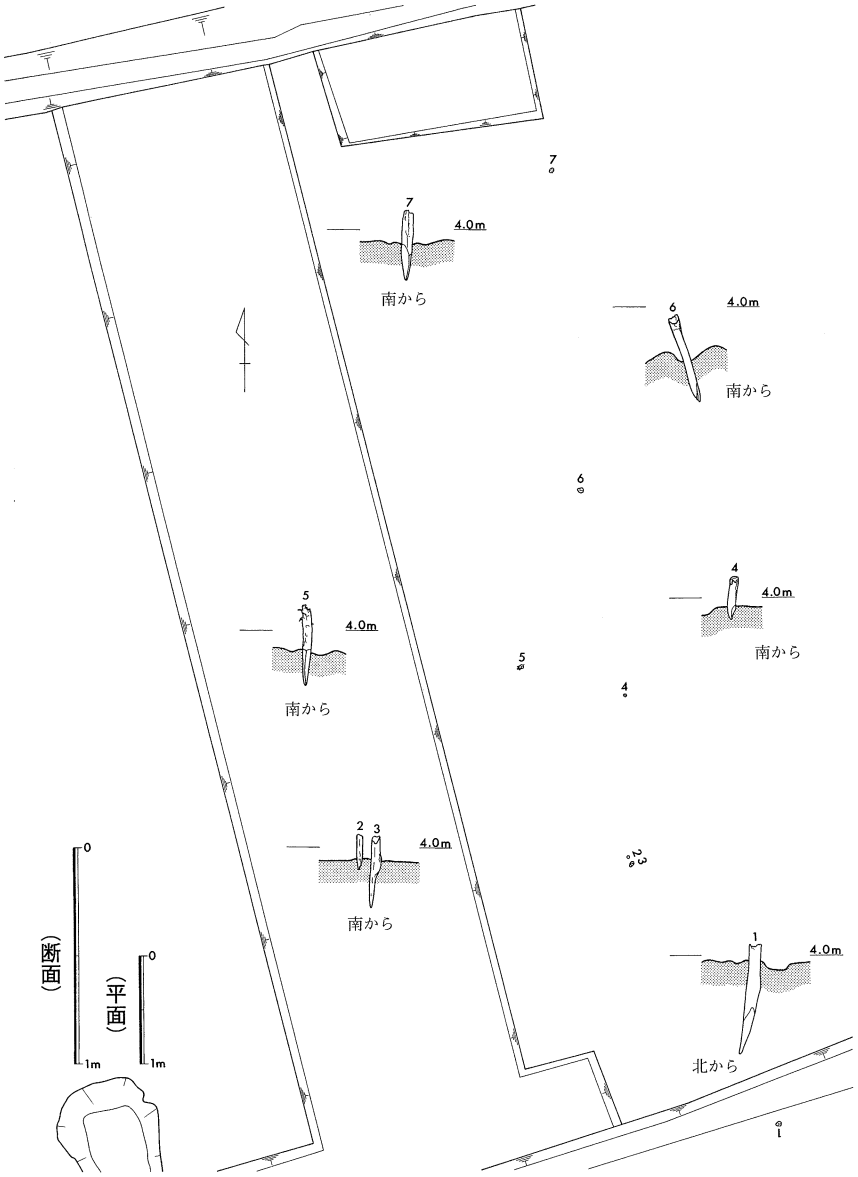


図174　C1－S区　杭列実測図（平面S＝1/60、断面S＝1/30）

ているもので、杭２、杭４が該当する。第２のグループは杭の先端が標高3.75mに達するもので、杭７、杭５、杭３が該当する。最後は最も深い標高3.05mにまで達するもので、杭６と杭１が該当する。こうした杭の先端の標高差は、打ち込まれた時期の違いを反映するのではないかと考えられる。この他にも杭を三本検出している。杭の樹種については鑑定していない。

第５節　Ｃ２－Ｓ区の調査

調査区の立地（図160）

Ｃ区のなかでは最も西側になり、Ｂ２区の館跡・西大溝からは約80m離れている。

遺構の配置（図175）

遺構は疎らであり土坑３基を確認したのみである。

基本層序（図176・177）

基本的に他の三つの調査区と変わらない。厚さ1.2mにも及ぶ造成土の下に、耕作土が堆積し、中世の水田耕作土と考えられる黒色粘土層が厚さ10cm程度見られる。その下層が遺構面である灰色粘土層になり、標高は3.9m前後でほぼ平坦である。この層はその形成時期は不明であるが、ＳＫ01の断ち割り調査において縄文晩期の土器が僅かに出土している。同層からはＣ１－Ｎ区でも弥生土器（中期末）、古式土師器、須恵器片が出土している。

検出した遺構（図178）

土坑３基を検出している。いずれも調査区外に遺構が拡がっており、全面調査できたものは無い。

ＳＫ01（図178）

規模・形態　調査区内で最も大形の土坑である。平面は楕円形を呈し、長径3.0m、短径2.6m、深さ0.9mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は皿状を呈する。

覆土　黒色から灰色を呈する粘性の強い砂質土が堆積している。

遺物　覆土中の上位から中世土師器が出土しているほか、６～10cm角大の自然石が出土している。また未分解の植物遺体も混ざっていたが木製品は出土していない。

年代・性格　中世ではないかと思われる。

ＳＫ02（図178）

規模・形態　大半が調査区外であり調査し得たのはごく僅かにすぎない。形態は不明だが、調査区内での規模は最大幅が2.7m、深さ0.66mである。壁面は、東側では掘り込み面から深さ50cmのところでステップを持つが、西側では緩やかなカーヴを描いて底面に至る。

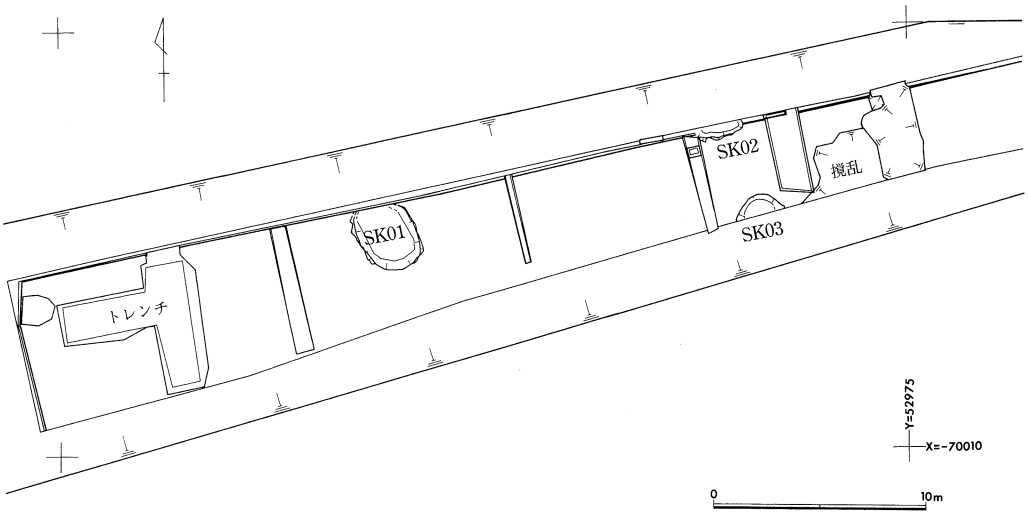


図175　C2－S区全体図（S＝1/300）

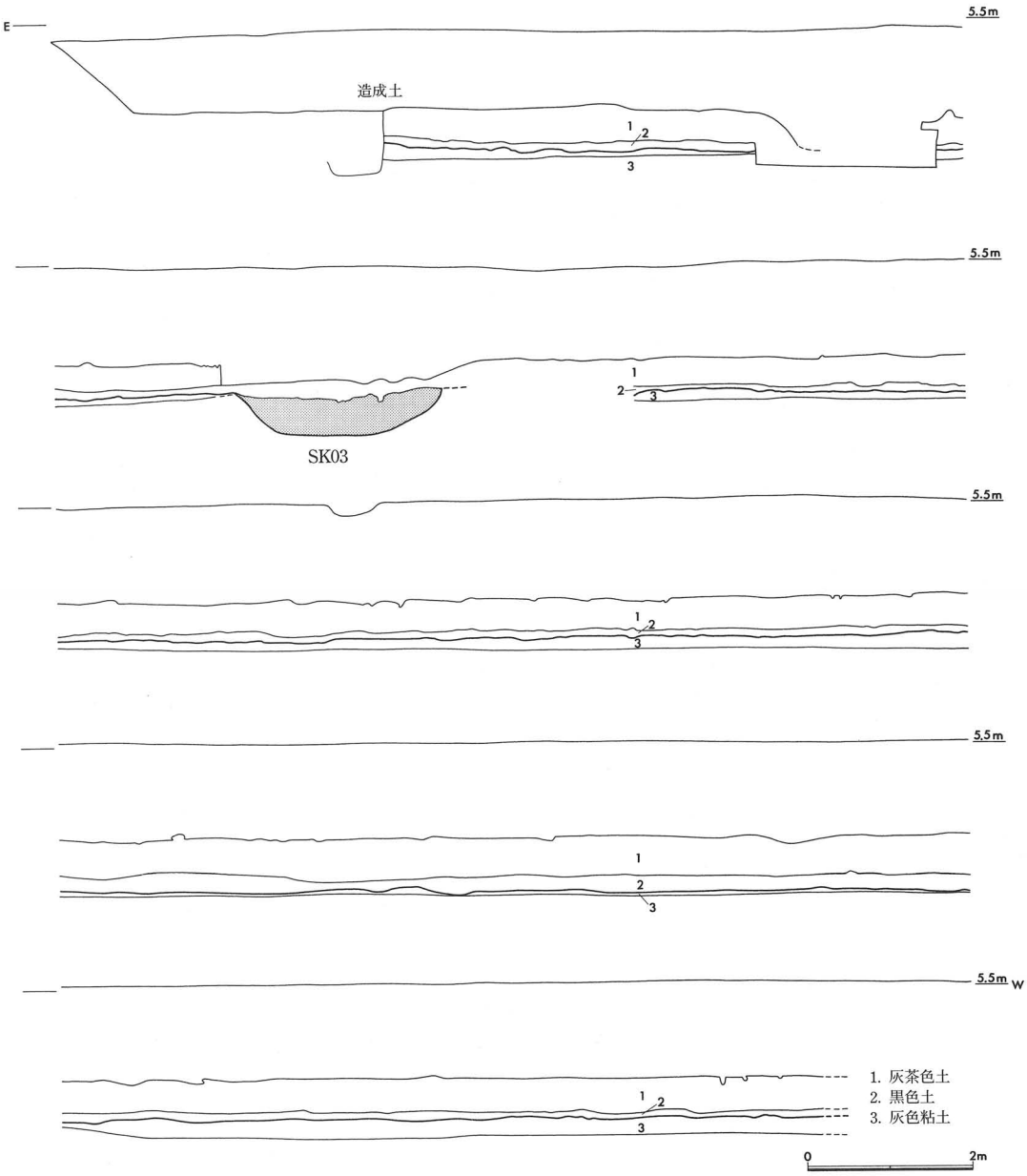


図176　C2－S区土層堆積図（1）～調査区南壁～（S＝1/80）

覆土　ＳＫ01と同様に黒色～灰色を呈する粘性の強い砂質土が堆積している。

遺物　調査区内では１点も出土していない。

年代・性格　出土遺物が無く年代、性格とも不明である。

ＳＫ03（図178）

規模・形態　遺構の大半は調査区外に拡がっている。調査区内での最大幅は2.1m、深さは0.6mである。壁面は緩やかなカーヴを描き底面に至る。底面はほぼ平坦である。

覆土　ＳＫ01、ＳＫ03と同様に黒色～灰色を呈する粘性の強い砂質土が堆積している。

遺物　調査区内では１点も出土していない。

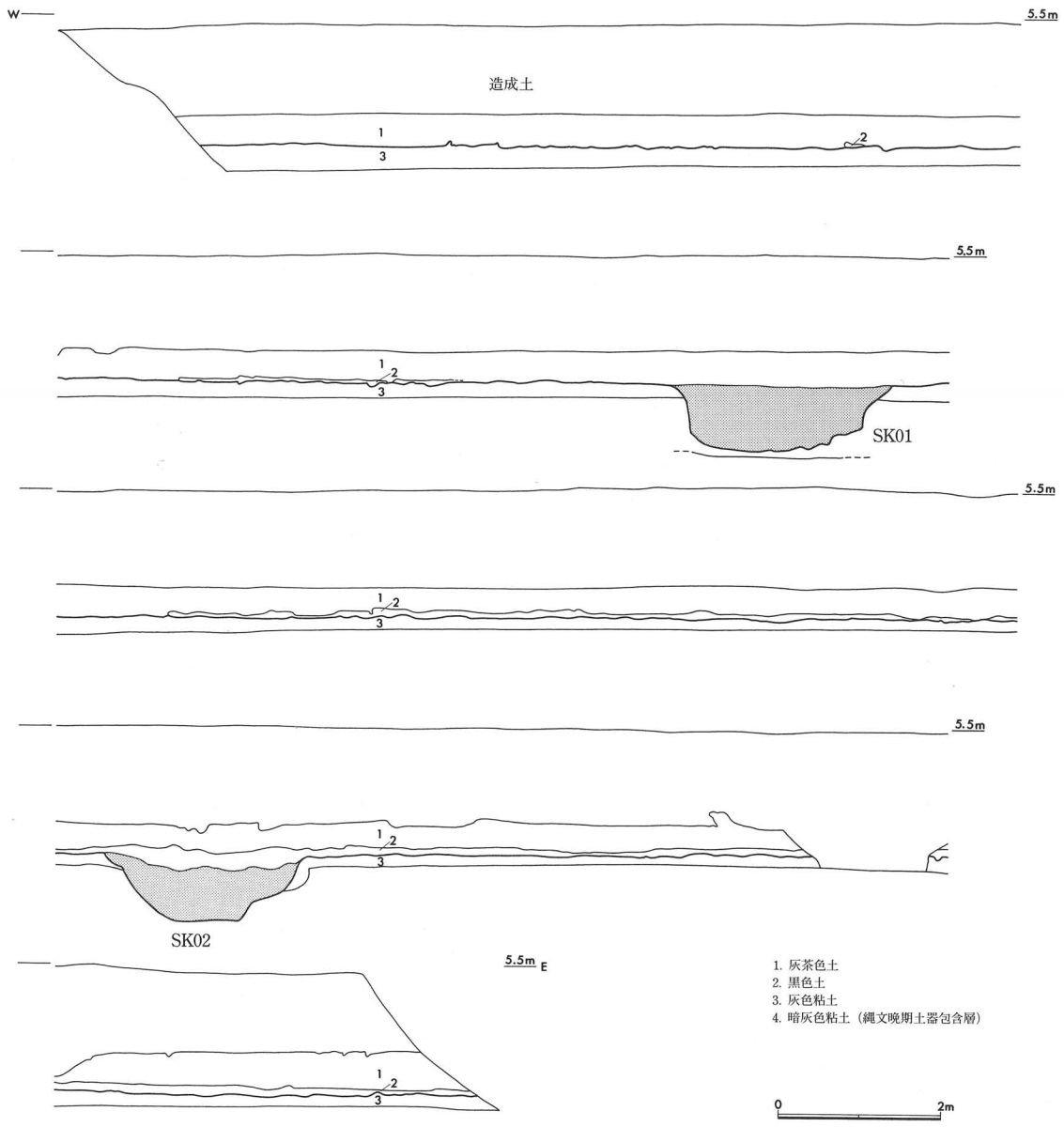


図177　C2－S区土層堆積図（2）～調査区北壁～（S＝1/80）

年代・性格　出土遺物が無く年代、性格とも不明である。

このほか、ＳＫ01の直下の暗灰色粘土層（第５層）から縄文晩期末（弥生早期）の突帯文土器が出土している（図179）。色調は黒褐色を呈し、粗い砂粒が混ざる。突帯は口縁端部から下がった位置に貼り付け、刻目を付けている。内外面とも貝殻条痕後ナデで仕上げている。

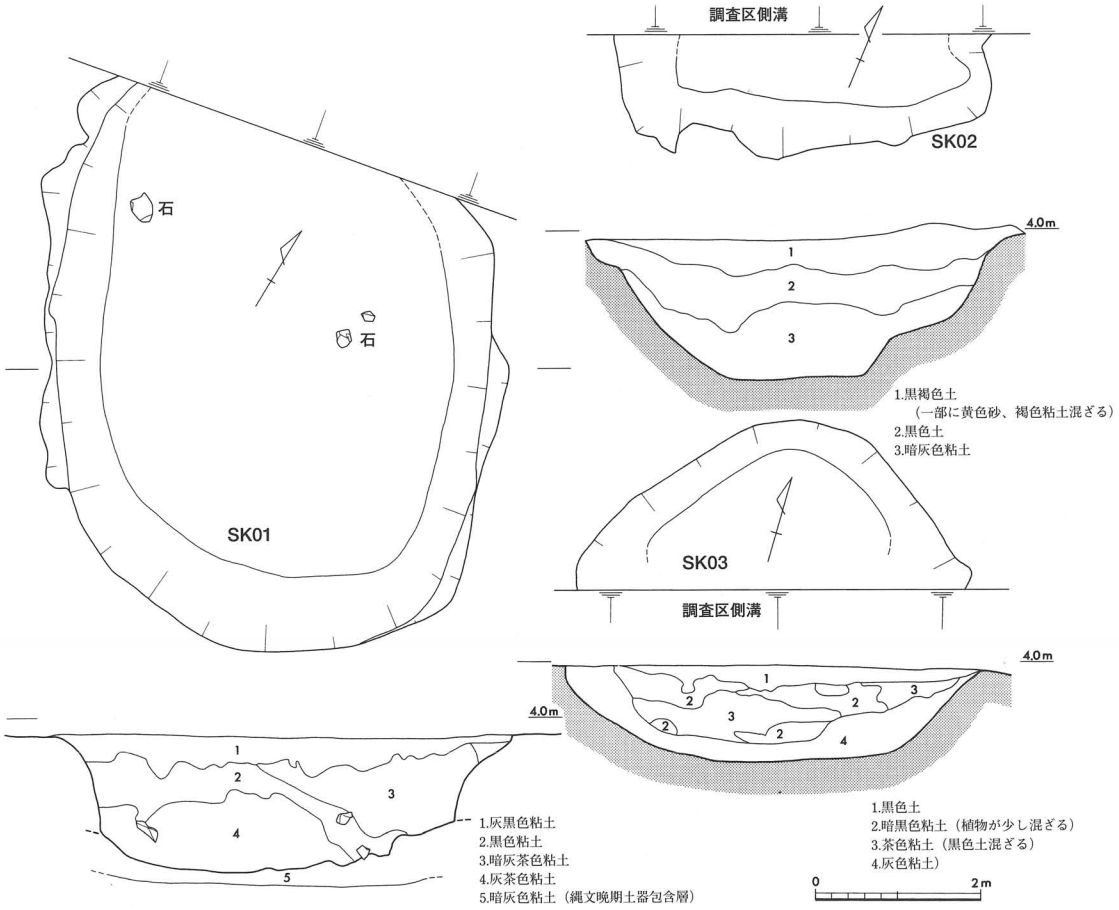


図178　C2-S区SK01～03実測図（S=1/40）

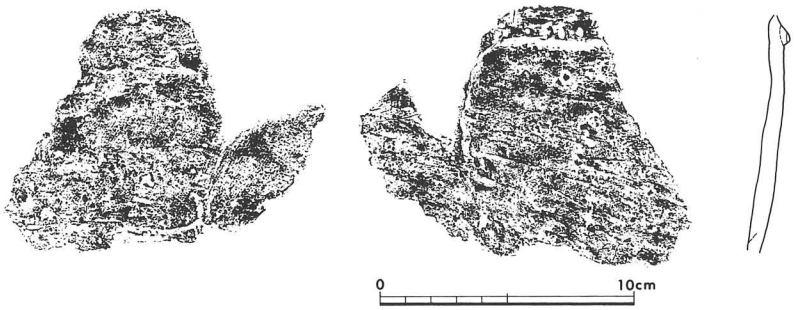


図179　C2-S区出土遺物実測図（S=1/3）

第６節　小結

当調査区は中世の館跡を検出したＢ２区の西側に隣接する調査区であり、それに関連する遺構の存在が予測されたが、既に述べてきたように、中世の明確な遺構はＣ１－Ｎ区のＳＫ05以外には確認することはできなかった。

Ｃ区においては、現在の耕作土直下の２層（黒褐色粘質土）が全面的に広がっているのが確認された。この土層は既に述べてきたように、土層観察の結果や花粉分析により水田耕作土と判断される。この層からは少量ではあるがＢ区で出土しているのと同様な土師質土器片が含まれていることから同時期のものと考えて問題ない。従ってＢ区の館の西側には水田耕作を中心とした生産域が広がっていたものと推測される。

この点については調査当初から予想されていたことであり、調査時点においても水田に関わる施設の検出に努めたが、後世の削平により畦畔及び地割りに関する情報を得ることはできなかった。今後、こうしたケースにおいても、疑似畦畔の検出や耕作土直下の鋤痕の分布状況による推定等によって畦畔及び地割り等の情報を得ていく努力を行う必要性を痛感する。

Ｃ区で検出した主な遺構はＣ１－Ｎ区北東部の溝群と、Ｃ１－Ｎ区西側及びＣ２区を中心として検出したやや大型の土坑群である。前者については本文中にも述べたとおり、生活区域である微高地と低地を区画する性格の溝であったと想定され、年代についても出土遺物は僅少ではあるが弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。この時期は他の調査区の状況からみて当地区の開発が本格的に開始された時期であり、これらの溝もそれに関わるものであったと判断される。

後者の大型土坑群については、ほぼ同じ規模で覆土の状況も白色ブロックを含む等類似していることから、比較的近接した時期の物と想定される。わずかにＣ１－Ｎ区のＳＫ05から曲物の底板や土師質土器が出土していることから中世の遺構であることが窺えるが、他の土坑も同様かどうかは判断できない。その性格についても、現状では不明と言わざるを得ず、今後の調査事例の増加を待って改めて検討してみたい。

出雲平野の中央部における大規模な調査例はまだ少なく、いずれにせよ今回の調査において当地域の土地利用開発史を窺い知る上での幾つかの手がかりと多くの問題点を提供したといえる。

第５章　Ｄ区の調査

第１節　調査の前の状況と経過

Ｄ区はＣ２区から約60ｍ西に位置し、西側には県道渡橋平野線を挟んでＥ区が位置している。出雲バイパス建設工事に伴う試掘調査により、当調査区からは木製品を多数含む旧河道が検出されたため、96年度に本発掘調査を実施する運びとなった。Ｄ区の調査対象面積は約1,080㎡である。

Ｄ区の調査は重機で表土を除去後の７月12日より調査を開始した。調査期間が夏季であったため、遺構面・壁面の乾燥が著しく、遺構面や壁面の精査は困難を極めた。また旧河道であるＳＲ01の調査では湧水が著しく、調査は難渋した。こうした悪条件下ではあったが、９月11日に全ての調査を終了した。

第２節　調査の結果

調査区の立地

Ｄ区の現況は水田であり、現状での標高は4.3ｍ～4.4ｍ前後を測る。遺構面は3.5ｍ～3.7ｍ前後であり、Ｃ区と同様に北東から南西へ緩やかに傾斜している。調査は無遺物層上面までの掘り下げ

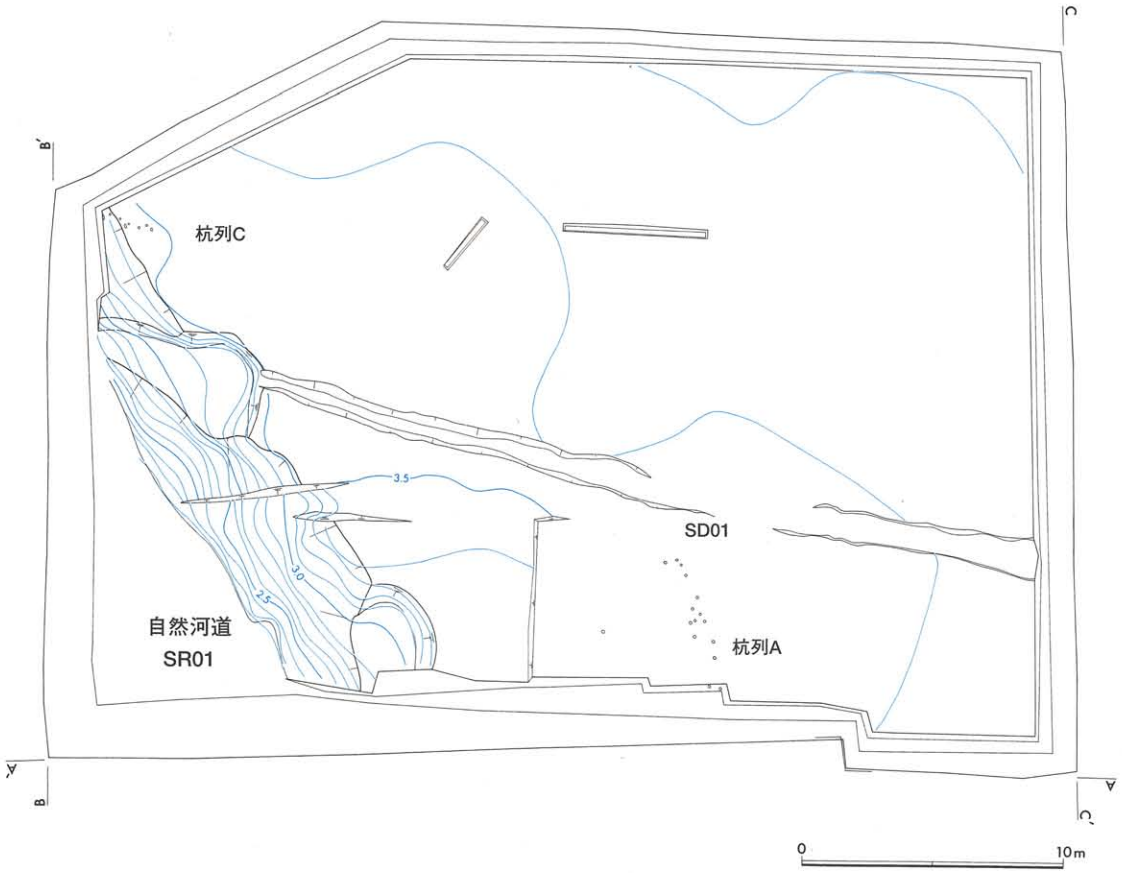


図180　D区調査後地形測量図（S=1/300、10cmコンター）

を原則とし、河道部分では基盤層である淡灰褐色細砂層（5－1層）まで、その他の平坦部分は淡灰褐色シルト層（5－2層）までの掘り下げを行った。しかし旧河道部分は湧水のため底面までの掘り下げは断念した。

遺構の配置（図180）

当調査区の遺構の配置状況は、まず調査区西側に旧河道であるＳＲ01が位置している。このＳＲ01は北西から南東へむけて調査区を縦断しており、河道の左岸は当調査区内では確認できていないが、西隣のＥ区に左岸を検出している。

この　またこの旧河道（ＳＲ01）が完全に埋没した後、調査区を東西に横切るようにＳＤ01が営まれている。このＳＤ01は近世の水田耕作土と推定される2－1層から掘り込まれているもので、かなり新しい段階の遺構と考えられる。その他、調査区南部に杭列Ａ、ＳＤ01に沿うように杭列Ｂ、調査区北西隅に杭列Ｃが営まれている。このうち、杭列Ａ・ＣはＳＲ01の低湿地部分を意識して営まれた遺構である可能性が高い。

基本層序（図181）

当調査区の基本層序は、旧河道部分（ＳＲ01）を除く平坦部については、比較的Ｃ区の堆積状況と類似している。東壁（図181Ｃ－’Ｃ）で説明すると、耕作土（2－1層）の下に暗茶褐色砂質粘土（2－2層）、灰茶褐色シルト層（2－4層）を挟んで黒褐色粘質土（3－1層）が厚さ約10cm前後堆積している。この土層はＣ区の２層（中世水田耕作土）に土質が類似するものであるが、土師質土器は出土しておらず古墳時代後期の須恵器が若干出土しているため、同一のものとは断言できない。花粉分析の結果でも3－1層はイネ科よりカヤツリグサ科の花粉が多く、水田耕作に関して否定的なデータが示されている。この3－1層の直下には淡灰褐色シルト層（5－2層・無遺物層）が堆積している。

検出した遺構・遺物

１．自然河道

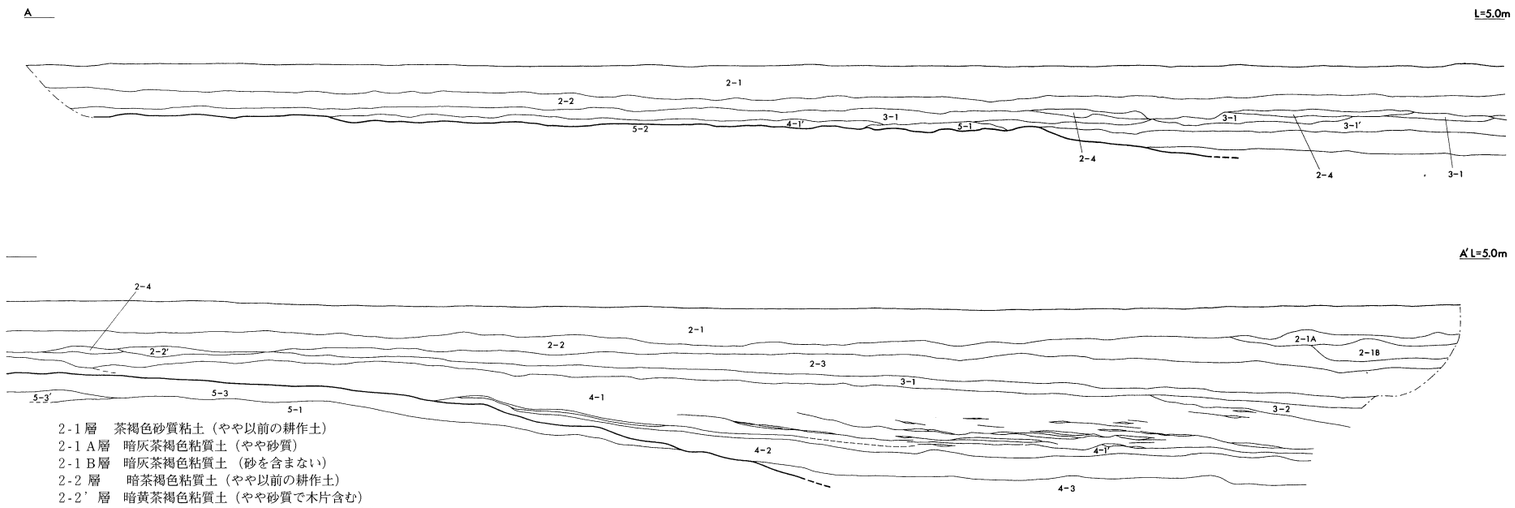
ＳＲ01（図181）

規模・形態　前述のとおり、調査区の西側で河道の東岸部分を南東から北西にかけて検出している。調査区内で検出した東岸部分の長さは約22mを測る。この河道西岸はＥ区において検出しており、これから推定される川幅は約24.5m前後と推測される。

川岸は比較的急傾斜を呈している。湧水が著しいために川底まで確認できていないが、検出面（3－2層上面）から掘り下げ面までの深さは1.2mを測る。河道の中心部ではおそらく1.5m以上の深さはあったものと推測される。川底のレベルが確認できなかったため断言できないが、周辺の地形環境や当時西側に位置していたと思われる神門入海の存在からみて、この河道は南東から北西へむけて緩やかに流れていたものと推測される。

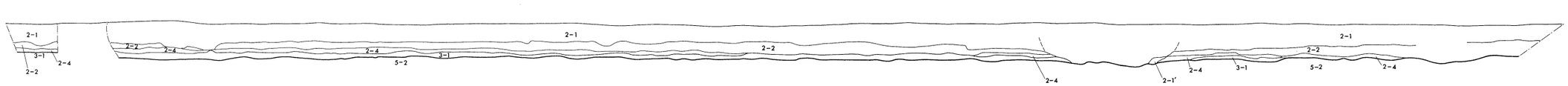
層序　ＳＲ01の層序は上から順に説明すると、先述した3－1層の下に黒茶褐色腐植土層（3－2層）が約15cm前後堆積している。この土層は未分解の植物質を多量に含む土層で、沼沢地がやや乾燥した段階に形成された層と考えられる。[1] なお後述するようにこの層からは草田編年６期[2]の甕（図183の３）が出土しており、弥生時代後期終末期にはこの河道の埋没はほぼ終了したものと考えられる。

この3－2層の下には灰茶褐色シルト質粘土～腐植土層が１m以上厚く堆積している（4－1層、4－2層）。この腐植土層はラミナの発達度により大きく上下２層に細分される。上層の4－1層は非常に

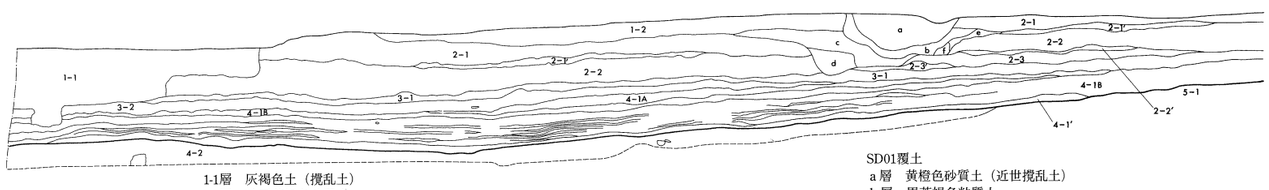


2-1層　茶褐色砂質粘土（やや以前の耕作土）
2-1Ａ層　暗灰茶褐色粘質土（やや砂質）
2-1Ｂ層　暗灰茶褐色粘質土（砂を含まない）
2-2 層　暗茶褐色粘質土（やや以前の耕作土）
2-2’層　暗黄茶褐色粘質土（やや砂質で木片含む）
2-3層　灰茶褐色粘質土（橙色ブロックを若干含む）
2-4 層　灰茶褐色シルト層
3-1 層　黒褐色粘質土
3-1’層　淡黒褐色粘質土（漸移層）
3-2 層　黒茶褐色腐食土層（植物質を多量に含む。草田７期、木製品包含層。）
4-1層　灰茶褐色粘質土シルト層（ＳＲ０１堆積土。下層にラミナ発達し木製品含む。）
4-1’層　暗灰茶褐色腐食土（ＳＲ０１堆積土。植物質未分解層）
4-2 層　灰茶褐色粘質土シルト層（ＳＲ０１堆積土。上層よりやや暗く、ラミナ発達しない。木製品を下層に含む。）
4-3 層　茶褐色腐食土層（ＳＲ０１堆積土。木質未分解の白色粒及び流木を多く含み、木製品を含まない。）
5-1 層　淡灰褐色細砂層（ＳＲ０１堆積土。）
5-2 層　淡灰褐色シルト層（無遺物層）
5-3 層　黒灰色泥土（粘性高く黒色粒を多く含む）
5-3’層　暗黒灰色泥土（上層より暗い）

図181　Ｄ区　調査区南壁・東壁・西壁セクション（S＝1/80）



東壁
2-1層　茶褐色砂質粘土（やや以前の耕作土。橙色ブロック小粒を多く含む。）
2-1'層　暗茶褐色砂質粘土（SD01に伴う覆土）
2-2層　暗茶褐色粘質土（やや以前の耕作土。橙色ブロック小粒を若干量含む。）
2-4層　灰茶褐色シルト層
3-1層　黒褐色粘質土
5-2層　淡灰褐色シルト層（無遺物層）



1-1層　灰褐色土（攪乱土）
1-2層　暗灰茶褐色砂質土
2-1層　茶褐色砂質粘土（やや以前の耕作土）
2-1'層　暗茶褐色砂質粘土（FeO粒を多く含む）
2-2層　暗茶褐色粘質土（やや以前の耕作土）
2-2'層　暗黄茶褐色粘質土（FeO粒を多く含む）
2-3層　暗茶褐色粘質土
3-1層　黒褐色粘質土
3-2層　黒茶褐色腐食土層（植物質を多量に含む。草田７期、木製品包含層）
4-1A層　灰茶褐色粘質土シルト層（SR01堆積土。下層にラミナ発達し木製品含む。）
4-1B層　黒茶褐色粘質土シルト層（SR01堆積土）
4-1'層　暗灰茶褐色腐食土（SR01堆積土。植物質未分解層）
4-2層　灰茶褐色粘質土シルト層（SR01堆積土。上層よりやや暗く、ラミナ発達しない。木製品を下層に含む。）
5-1層　淡灰褐色細砂層（SR01の基盤層）

SD01覆土
a 層　黄橙色砂質土（近世攪乱土）
b 層　黒茶褐色粘質土
c 層　茶褐色砂質粘土
d 層　黒茶褐色砂質粘土
e 層　赤褐色シルト層
f 層　茶褐色粘質土

0　4m

図181　D区調査区南壁・東壁・西壁セクション（S＝1/80）

ラミナが発達しているが、植物質未分解層である暗灰茶褐色腐植土（4－1’層）をはさんで下に位置する4－2層は、土質は4－1層とほぼ同じであるがラミナの発達がほとんど認められない。この4－1、4－2層からは多数の木製品が出土している。

4－2層の下には茶褐色腐植土層（4－3層）が堆積している。この層には未分解の白色粒及び流木が多量に含まれている。そして、川底では確認できていないが、この下に基盤層である淡灰褐色細砂層（5－1層）が存在している。なお、ＳＲ01の川岸部分でこの基盤層の直上より弥生後期初頭の甕（図183の１・２）が出土している。

図182　D区自然河道遺物出土状況実測図（S＝1/80）

以上の堆積状況を勘案すると、ＳＲ01は弥生後期初頭には形成され、当初は大型の流木等の存在などからみてかなりの流れがあったものの、4－2層段階にはほぼ沼沢化し、4－1層段階にはラミナの発達の度合いからみて、わずかに流れがある程度に低湿地化が進行し、弥生時代終末期にはほぼ埋没し河道としての機能を終えたものと想定される。

遺物の出土状況（図182）　ＳＲ01中からは前述のとおり4－1層、4－2層中より木製品が多数出土しているが、これらの大半は建築部材関係の板材や杭材等である。遺物の平面分布には特に目立った特徴は無いが、川岸付近に比較的集中しており、これらは河道方向の軸と平行して分布するものが多い。層位的にはラミナの発達した上層の4－1層からの出土がやや多い。

土器類はＳＲ01中からはわずかに２個体分出土したのみであり、既に述べたとおり基盤層直上から弥生後期初頭の甕が、河道の埋没がほぼ終了した3－2層中より弥生終末の甕が出土している。

なお、河道北東部付近で小規模な、しがらみ状遺構の痕跡を検出した。（図182トーン部分）河道と平行して比較的細い杭材を打ち込み、それに板材を渡す構造のものである。大半は既に流出しているために全体の構造は不明だが、もとは護岸状の施設であったと考えられる。同様な施設は規模の差はあるが、同じ出雲バイパス関連調査の蔵小路西遺跡Ａ区や姫原西遺跡Ｂ区で多数検出されており、いずれも弥生時代後期段階のものである。

ＳＲ01出土遺物（図183・184）

Ａ．弥生土器（図183）

図183の１、２は河道基盤層のほぼ同一地点から出土した甕で、同一個体と考えられるものである。口径は推定15.3cmを測り、口縁部は内傾しつつ上下に若干拡張し、断面三角形状を呈する。拡張部の外面には２～３条の凹線文を施している。肩部にはクシ状工具によるものと思われる「ノ」字状連続刺突文を２段にわたって密に施している。内面は上方向のヘラ削りが頸部屈曲部まで及んでいる。器壁はやや厚く色調は淡黄褐色を呈する。以上の特徴からみて弥生後期でも古い段階、門生編年Ｉ期[3]に属するものと思われる。

３は既に述べたとおり河道埋没時に投機された甕の上半部で、口径14.9cmを測る。口縁部は複合口縁状を呈し、口縁部段部は水平方向にやや比較的シャープに突出する。口縁部はやや厚手でやや外方へ直線的に立ち上がり、口縁部端部は外方向へやや突出する。肩部は比較的丸味を帯びる。調整は外面がタテハケのち、肩部にヨコハケを巡らせている。内面は右方向のヘラケズリを施している。以上の特徴から、草田編年６期、塩津山編年６期[4]に属するものと考えて大過無い。

Ｂ．木製品（図183・184）

図183の４はいわゆるナスビ形着柄鋤で、4－2層中から出土した。上原真人分類の曲柄又鍬Ｄに分類されているものであり[5]、刃部の大半を欠損している。軸部は傘形を呈し基部の長さは18.5cm、最大幅12.3cmを測る。厚さは軸部先端部付近で1.1cm、最大幅付近で1.5cmを測る。加工痕、着装痕は現状では確認できないが、平面図で図示している面の裏面が平滑であることから柄が添えられるのはこの面と想定される。樹種は鑑定していないため不明だが、肉眼観察ではカシ類と思われる。

図183の５は刳物の槽で、4－1層から出土したものである。平面形は方形を呈し、長さ40.7cm、幅15.8cm、最大高8.2cmを測る。底部は比較的厚く2.6cmあり、槽内部の深さは6.5cmを測る。加工はやや粗く、外面には比較的明瞭に加工痕が観察できる。樹種は鑑定を行っていないが、スギ材の柾目材を使用したものと思われる。

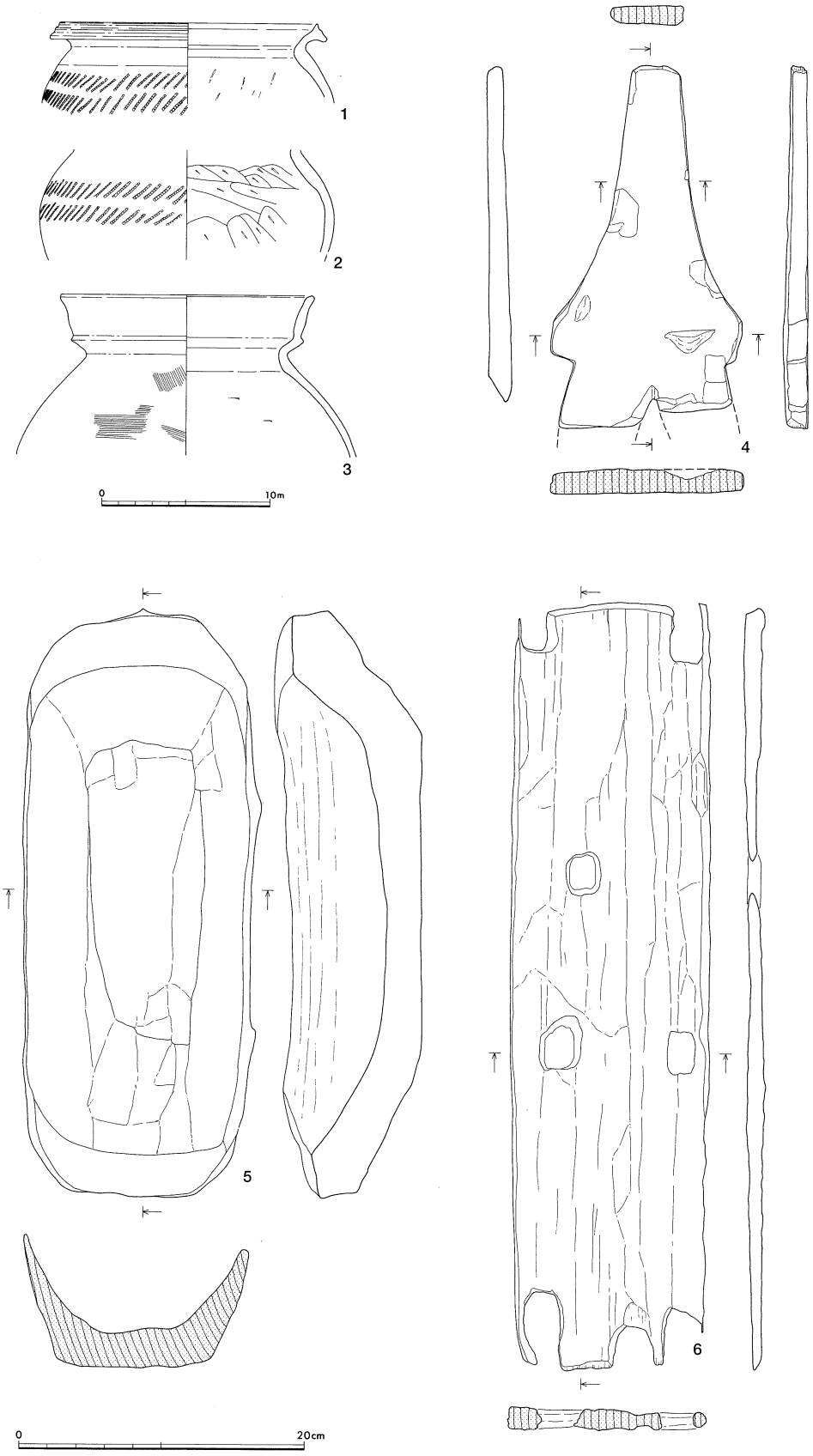


図183　D区出土遺物実測図 (1) (1～3はS＝1/3・4～6はS＝1/4)

第183の６は田下駄または大足状の木製品である。長さ53.1cm、幅13.9cmの板材のほぼ中央部に２×３cmの方形の孔を３ヶ所穿っている。図上上端には両端に、下端には両端と中央の３ヶ所に方形の刳り込みが認められる。厚さは1.5cm前後を測る。加工痕は風化が著しい為不明。

図184の１は用途不明の板材であるが、何らかの未成品と考えられるもので、長さ30cm、最大幅15.5cm、厚さ1.8cmを測る。下半部の一部を欠損しているが、長方形の板材の長辺側にＶ字状の刳り込みを入れている。板材の上下端にはより長い板材から裁ち切り折り取った痕跡が認められる。表面には加工痕が顕著に認められる。

図184の２、３は部材である。２は4－1層中より出土した板材で、長さ51.3cm、最大幅10cm、厚さ1.8cmを測り、下半部を欠損している。板材小口部の片側にＬ字状の刳り込みが認められる。

３は用途不明の部材片の柾目状の板材で、長さ46.5cm、最大幅11.7cm、厚さ2.3cmを測る。板材上端には７×４cmのＬ字状の刳込みが認められ、また長片片側にも幅2.5cmの方形刳込みがある。板材の表面には両面に焦げ跡が顕著に認められる。

４は逆三角形状の木製品で、長さ38.1cm、幅20.7cmを測り現状で２つに分割されている。厚さは１cm前後と比較的薄い。上端右側に８mm四方の方形の貫通孔が穿たれさている。左側は欠損しているため不明だが、本来は存在していた可能

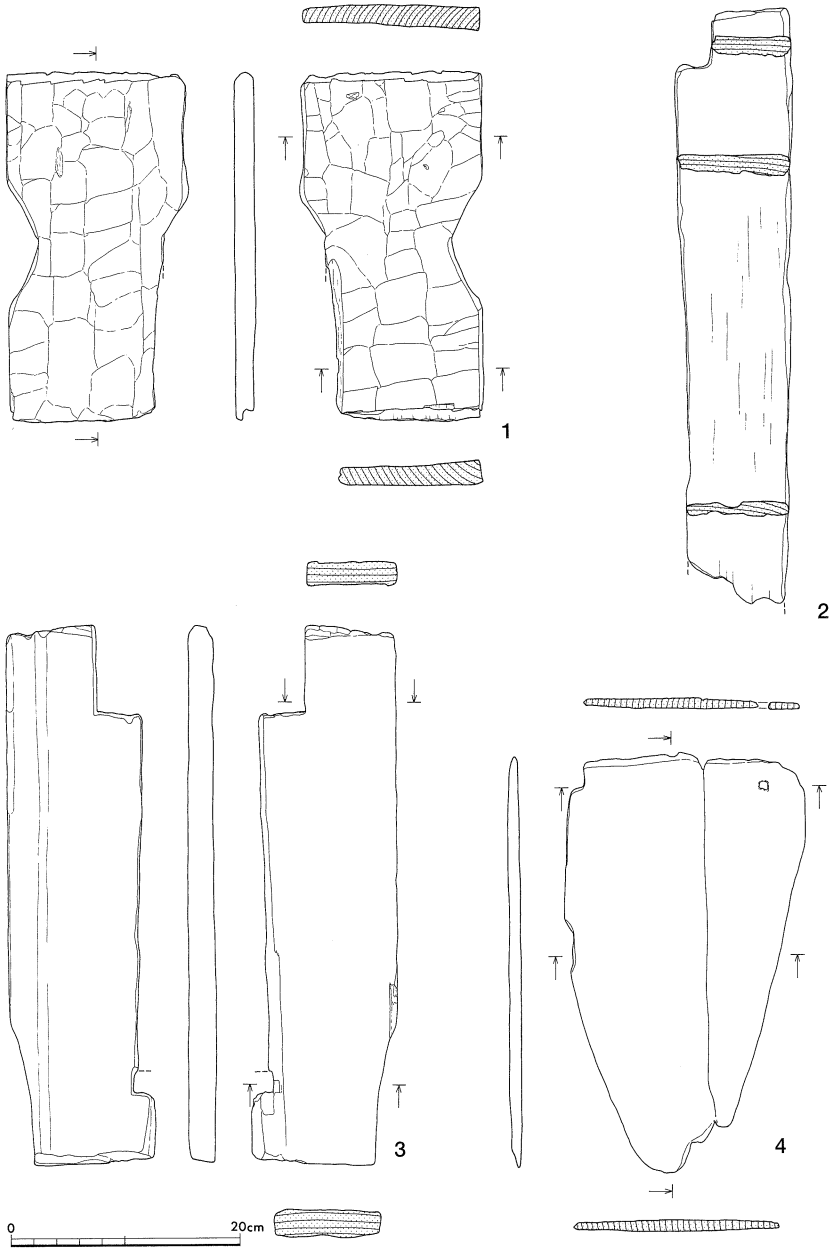


図184　D区出土遺物実測図（2）（S＝1/6）

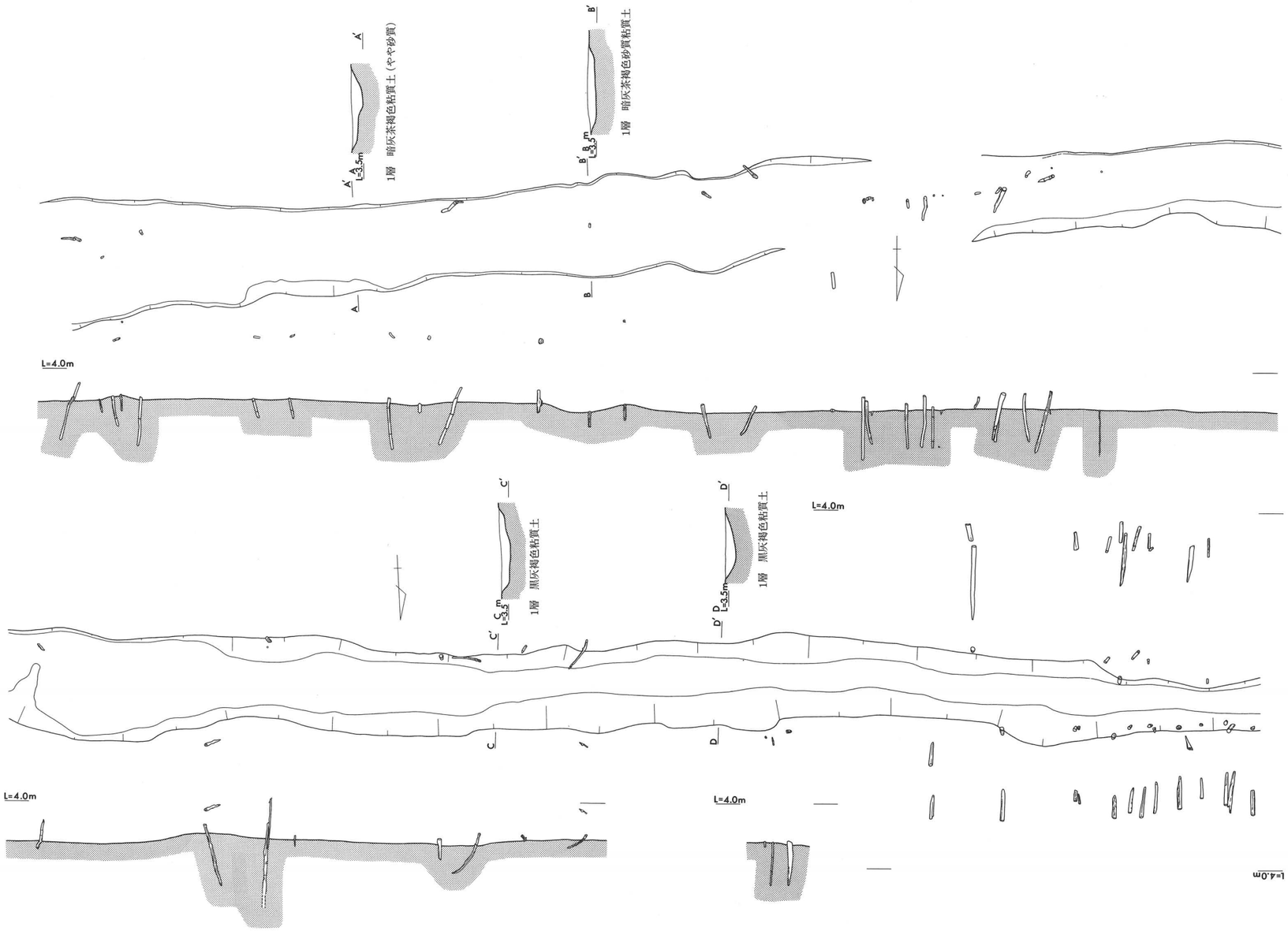


図185　D区SD01実測図（S＝1/60）

性が高い。何らかの製品と考えられるが用途は不明である。

2．溝

ＳＤ01（図185）

規模と形態　Ｄ区を東西に横断する溝で、調査区のほぼ中央部に位置しており、後述する杭列Ｂとほぼ重複している。調査区内での規模は、長さ31m前後、幅0.6～1.4m、深さ0.1～0.15mを測る。

出土遺物　溝の覆土中からは、図化していないが近世～近大の陶磁器が若干出土している。

覆土　溝の覆土は砂混じりの暗灰褐色～黒灰褐色の粘質土が堆積していた。後述するようにこの溝が埋没した後にほぼ重複するように杭列Ｂが営まれていることから、この砂混じりの覆土は意図的に埋められた可能性も考えられる。

年代と性格　このＳＤ01はＳＲ01が堆積した西壁セクションで観察すると（図181Ｂ－Ｂ’）、やや以前の水田耕作土と想定される2－1層上面から掘り込まれており、かなり新しい段階の遺構であると考えられ、出土遺物もこの所見と矛盾しない。性格は不明と言わざるを得ないが、この段階で付近に水田が広がっていたことが理化学的分析から想定されることから、水田耕作と何らかの関連のある施設であったか、もしくは区画としての意味を持つものであった可能性が想定される。

3．杭列

杭列Ａ（図186）

規模と構造　調査区中央部南側に位置する杭列であり、5－2層まで掘り下げた時点で検出したものである。南東から北西にかけて延びており、長さ5.3mに及んでいる。

杭列は整然と並ぶような状況ではなく、幅70cm前後で不規則に打ち込まれている。杭間の距離は、0.2～1.1mと不規則な感覚で配置している。

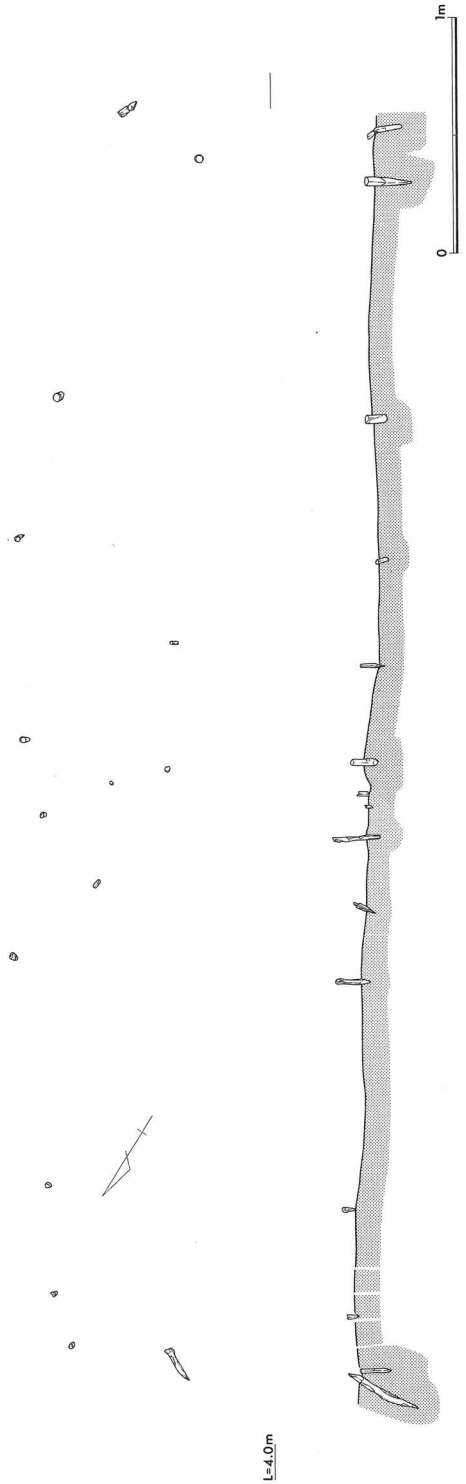


図186　D区杭列A実測図（S=1/30）

使用されている杭材は径10cm弱の比較的細い丸太材を使用しておりしっかりした構造のものではない。杭の打ち込まれたレベルも浅いものから比較的深く打ち込まれたものもあり、一定していない。

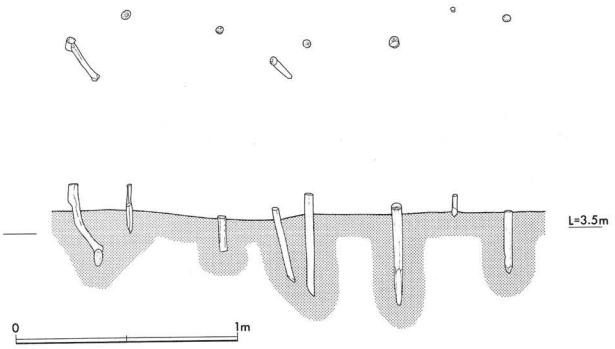


図187　D区杭列C実測図（S=1/30）

年代と性格　杭の打ち込まれている面が不明なため、築造された年代については不明といわざるを得ない。遺構の性格としては、杭列の方向がＳＲ01の方向に一致している点から、護岸状の施設、または低地と微高地を区画する性格のものであった可能性がある。

杭列Ｂ（図185）

規模と構造　ＳＤ01とほぼ重複して営まれた杭列である。約1mの幅にほぼ２列にわたって打ち込まれているが、整然としたものではない。杭列も比較的密な部分と粗な部分がある。杭の深さは浅いものもあるが50cm以上の深さに打ち込まれているものも多い。杭材は竹材が多く使用されている。

年代と性格　ＳＤ01の埋没後に営まれたことは明らかなため、ＳＤ01に後出する遺構であることは疑いない。ＳＤ01と同じ位置に配置していることから、ＳＤ01廃絶後にその役割を代替する区画としての役割をはたしていた可能性が想定される。

杭列Ｃ（図187）

規模と構造　調査区の北西隅で検出した杭列であり、杭列Ａと同様3－1層を除去し5－2層上面で検出した杭列である。杭列の長さは残存する部分で長さ2.0mを測る。杭は20～40cm間隔で打ち込まれているが整然としたものではない。使用された杭材は杭列Ａと同様なもので、比較的細い丸太材を使用している。打ち込まれた深さ数cmの浅いものから40cm以上に及ぶものまでばらつきがあるが、比較的深く打ち込まれているものが多い。

年代と性格　杭が打ち込まれた面が不明なため、遺構の年代については不明といわざるをえない。ただ位置関係からみて、ＳＲ01の川岸部分に打ち込まれていることから、ＳＲ01がまだその機能を終焉するまでの段階に営まれていた可能性が高い。性格についても杭列Ａと同様、護岸的性格または低湿地と微高地を区画する性格のものであった可能性が考えられる。

第３節　小結

Ｄ区では検出した遺構は、自然河道１、杭列３、溝１のみであり、少なくとも中心的な居住域からはやや離れた地域であったといえる。また、当調査区においてもＣ区で認められた中世の水田耕作土とみられる土層に類似する土層（3－1層）が認められたが、理化学的分析の結果では水稲耕作に否定的なデータが得られている。少なくとも当調査区付近は中世段階では居住域・生産域としては有効に利用されていなかったことがうかがえる。

当調査区で注目されるのは自然河道ＳＲ01の存在である。本文中でも述べてきたように、この河道は弥生後期初頭までには形成され、まもなく沼沢化し、弥生後期終末には完全に埋没している。よって、この河道中の出土遺物は弥生後期のものと考えられ、それぞれの木製品の特徴もこの時期のものとして矛盾無いものである。

出雲平野における弥生時代の木製品は、出雲市教育委員会の調査した天神遺跡[6]の資料のほかには目立ったものはこれまでにはなく、今回の出雲バイパス関連の調査で姫原西遺跡出土資料を中心に、非常に豊富な資料を得ることができた。当調査区出土の槽等も今まで当地域では類例の乏しいものであり、注目される遺物である。

Ｄ区で検出したものと同様な自然河道は、当出雲バイパスの調査では、姫原西遺跡Ｂ区、蔵小路西遺跡Ａ区、Ｅ区、Ｆ区で検出している。これらの自然河道は、いずれも弥生後期初頭段階までには形成され、弥生後期終末にはほぼ同時に埋没している点で共通しており、極めて興味深い。当地区を中心とする出雲平野中央部のデルタ地域の本格的開発が弥生後期に始まり、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて旧河道が埋没した時点で一気に活発化していったことを断片的に示すものであろう。弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構は蔵小路西遺跡では中世遺構に削平されあまり残っていないものの、Ｂ区やＣ区で断片的に検出されており、この段階にこの区域の微高地が生活域として利用され始めたことが窺える。当調査区の北に位置する小山遺跡第１地点の表採遺物[7]も、後期終末～古墳時代初頭の遺物が大半を占めていることから、同様な傾向が窺える。Ｄ区のＳＲ01の出土遺物もそう遠くから流れてきたものとは考え難く、付近に同時期の居住域が存在するものと想定され、今後この付近の同時期の居住域・生産域の存在に注意していく必要があるだろう。

いずれにせよ、当調査区におけるＳＲ01の検出は、これまで殆どデータの無かった出雲平野中央部における、その地形発達史及び土地利用開発の様相を検討していく上で重要な知見を得ることができたとともに、新たな幾つかの問題点を提供したと言える。

註

（１）（株）パリノサーヴェイ　辻本裕也氏のご教示による。

（２）赤澤秀則編　『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会　1992年

（３）丹羽野　裕・池淵俊一編　『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会　1998年

（４）丹羽野　裕編　『塩津丘陵遺跡群』島根県教育委員会　1998年

（５）上原真人編　『木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所　1993年

（６）岸　道三他編　『天神遺跡第７次発掘調査報告書』出雲市教育委員会　1997年

（７）出雲考古学研究会　『出雲平野の集落遺跡Ⅱ－矢野遺跡とその周辺－』古代出雲を考える５　1986年

第６章　Ｅ区の調査

第１節　Ｅ１区

概要　Ｄ区の西、市道渡橋平野線の西にあたる。調査前は水田が埋め立てられ駐車場として整地されていた。調査の結果、Ｄ区の続きにあたる自然河道の西岸を検出した。また河道埋没後の遺構、遺物もわずかに検出している。

１．自然河道（図190・図191）

Ｅ１区ではＤ区から続く自然河道（以下、河道）の一方の岸を検出した。検出長は24m。河岸は調査区内で最も高いところで標高約3.7mを測り、ほぼ平坦に拡がる。河岸の肩部は標高約3.4mであり、なだらかに河道内に傾斜している。河道は灰色系の細砂層を基盤層としている。河道内の堆積土は基本的に泥層からなり、泥層中には腐食した植物が多量に混ざっている。このことから流れの無いよどんだ状態で凹地化し、序々に埋没していったものと考えられる。河道の底面は検出していないが、標高1.8mまで泥層が堆積しているのを確認した。河道底面は更に深くなることが考えられる。河道の流向については土層堆積状況や木製品、流木の伸長方向をもとに検討したが本調査区の知見だけでは判断出来なかった。

２．自然河道にともなう遺構（図189）

河道内の堆積土中に打ち込まれた杭を６本検出している。河岸から離れた位置にあり、それぞれの杭に規則的な並びは見受けられない。この杭群もある時期の河道内の流れに対応しているものと考えられる。河道内からは他にも杭が出土しているが、もともと打ち込まれていたものが流出したのかは不明である。

３．自然河道出土遺物（図188）

河道内からは弥生土器約20点と木製品（杭）が出土している。弥生土器はいずれも小片であり、

Ｅ１区　調査風景

図化できたのは図188の１～３のみである。いずれも甕で松本編年のＩ－２～Ｉ－３様式に相当するものと思われる。色調はいずれも濃茶色で４mm以下の石英等の砂粒が混ざっている。１は内外面ともハケ調整で頸部には指頭圧痕。２は内外面ともハケ後ナデ。２と３には外面にヘラ描直線文を施している。なお図化していない弥生土器のなかには後期に含まれるものも見られる。

４．河道埋没後の遺構・遺物（図190・図191東壁）

調査区東端で河道と河岸を覆う砂層に打ち込まれている杭群を検出している。杭は先端を一方向あるいは二方向から加工しただけの簡単なものである。杭は総て近年の撹乱によって頭部が失われているため、どの段階で杭が打ち込まれたのかは不明である。しかし、杭の先端が総て同じ深さに打ち込まれていること、三点が近接していることから、同時期に打たれたものと考える。打ち込まれた時期だが図191の東壁土層図で見ると第53層（灰白色細砂）に打ち込まれているのがわかる。この層からは図190の４の中世土師器の坏が出土している。このことから中世以降に打ち込まれたものと思われる。

河道が削り込んでいる基盤層上面からは遺構は検出していない。遺物は中世土師器の小片のほか調査区西端で基盤層直上から漆器椀が１点出土している（図188の４）。現存する高さ1.9cm、底径8.6cm。横木取り。全体に磨滅が著しいが内面に黒色漆が残る。

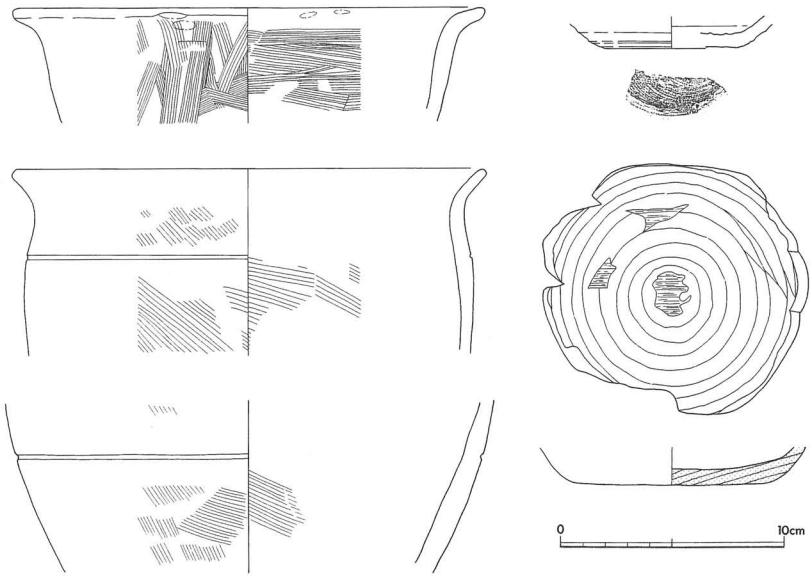


図188　E1区出土遺物実測図（S＝1/3）

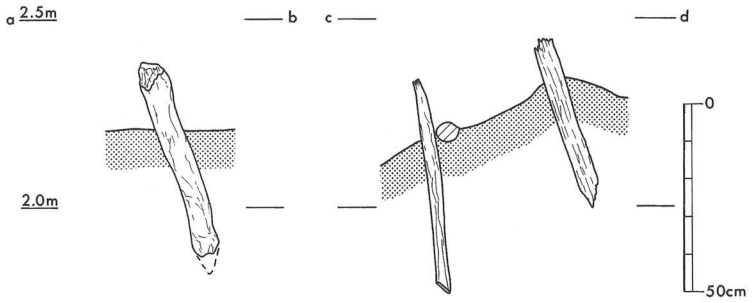


図189　E1区杭列実測図（S＝1/20）

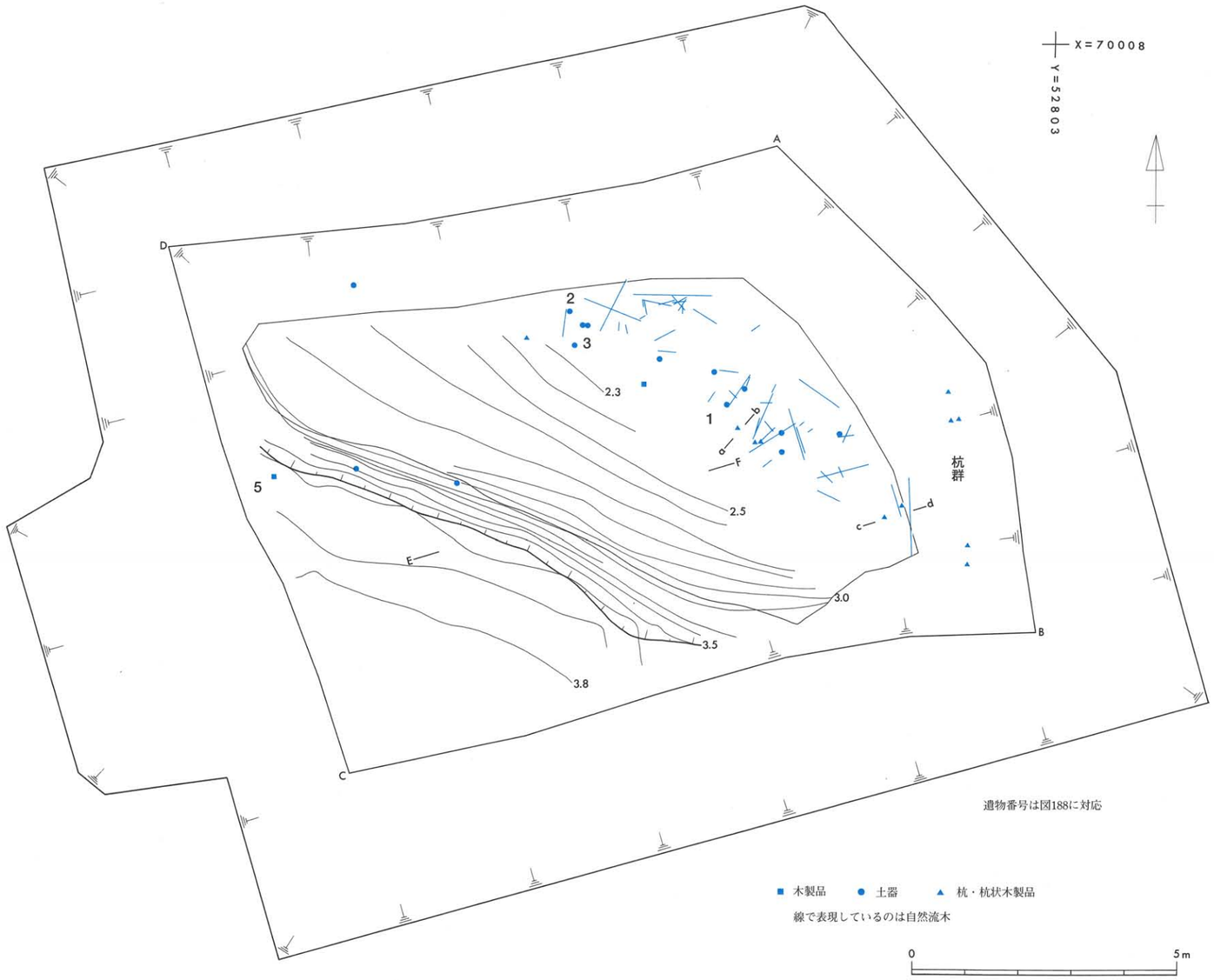
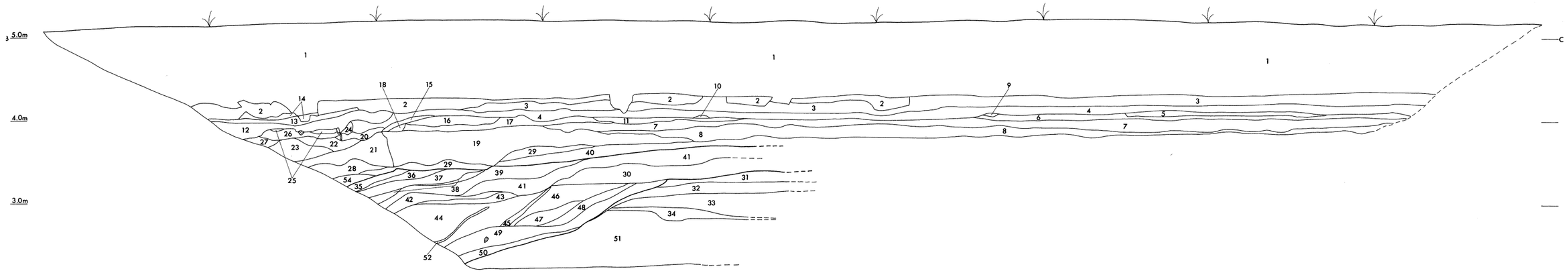
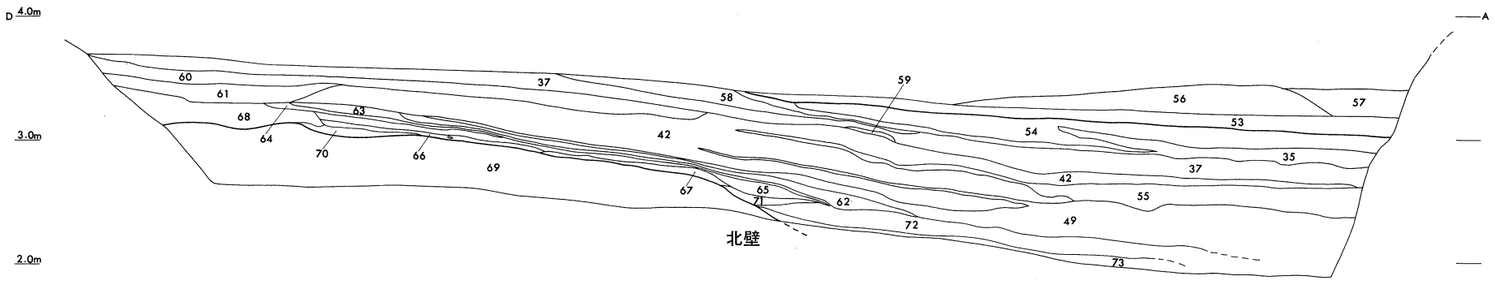


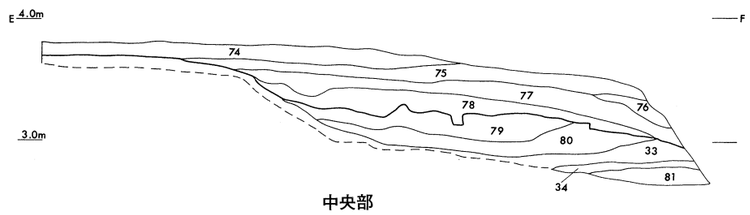
図190　E1区自然河道　実測図（S=1/100.　10cmコンター）



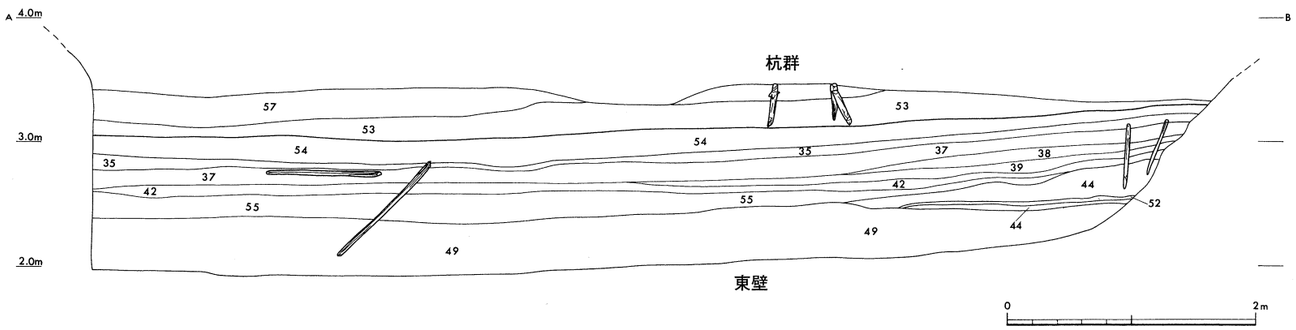
南壁



北壁



中央部



東壁

1. 盛り土（砕石）
2. 灰色粘質砂
3. 灰黄褐色砂
4. 灰黄褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土
7. 暗褐色粘土
8. 黒褐色粘土
9. 黒褐色粘質土
10.暗灰黄色砂
11.黒褐色粘質土
12.灰色砂（攪乱）
13.黒色粘土
14.黄色砂
15.灰黄褐色砂
16.灰黄褐色砂
17.暗褐色土
18.黒褐色砂質土
19.黒褐色粘質土
20.黄褐色砂（にぶい色）
21.黒褐色砂質土
22.灰色砂質土
23.灰色砂
24.褐灰色シルト
25.黒色粘土（攪乱）
26.灰色砂（攪乱）
27.灰白色砂
28.灰白色砂（中世）
29.灰白色砂（中世）
30.黒褐色粘質砂
31.褐灰色細砂（河道基盤層）
32.褐灰色細砂（河道基盤層）
33.灰色砂
34.黒褐色砂
35.黒色粘土
36.褐色粘質砂
37.褐灰色粘土
38.黒褐色粘土
39.40より粘性強い
40.褐灰色粘質砂
41.にぶい黄褐色砂と灰色粘質砂のラミナ
42.褐灰色粘土
43.41より灰色粘質砂の割合高い
44.黒褐色粘質土
45.暗褐色粘質腐食土
46.黒褐色粘土
47.45と同じ
48.黄灰色粘土
49.暗褐色粘質腐食土
50.灰色砂
51.灰色細砂
52.暗褐色粘質腐食土
53.灰白色細砂
54.黒褐色粘土
55.黒褐色粘質砂
56.黒褐色粘質砂
57.砕石（攪乱）
58.褐灰色土
59.暗褐色土
60.褐灰色土
61.褐灰色粘質土
62.褐灰色粘土
63.黒色腐食土
64.褐灰色粘質土
65.褐灰色粘土
66.暗褐色粘土
67.暗褐色腐食土
68.黒褐色粘土
69.灰色細砂
70.灰色粘土
71.褐灰色粘質砂
72.黒褐色粘質砂
73.灰色砂
74.黄灰色砂
75.暗褐色粘質砂
76.黒褐色粘土
77.暗褐色粘質砂
78.黒褐色粘土
79.褐灰色砂
80.褐灰色砂
81.灰白色砂

図191　E1区土層堆積図（S＝1/40）

第２節　Ｅ２区

概要　調査区は調査前には水田が営まれており標高は4.5mであった。トレンチ調査の結果や調査の先行していたＦ１区の状況から、遺構密度は薄く、中世以降には水田耕作が営まれていた、いわゆる「クラＣ」的調査区であろうと予想していた。しかし、調査の結果、Ｃ区の中世耕作土（黒褐色粘質土）に対応するものは認められなかった。Ｄ区の調査成果も勘案すると、Ｄ・Ｅ１区の自然河道埋没後もこの一帯が水田耕作に適さない環境であったものと考えられる。

１．基本層序　耕作土直下が遺物包含層である暗灰色粘土層である。この層からは遺物は総量でコンテナ２箱出土した。内訳はそのほとんどが中近世～近・現代以降の陶磁器であり、若干弥生後期の土器や須恵器が認められた。いずれも細片のため詳細な時期は不明である。その直下が基盤層であるが、基盤層は調査区西側ではＦ１区でも確認された細砂層であるが、東にいくにしたがい湿地状のシルト層へ漸移している。この基盤層についても調査区を南北に縦断するトレンチを設定して掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

２．遺構・遺物　遺構面は標高3.95mで、ほぼ平坦だが、わずかに北東に傾斜する。Ｃ区と同様に中世水田の痕跡の検出につとめたが確認できなかった。遺構として確認されたのは溝跡一条のみである。溝跡は調査区の西端を北北西から南南西に縦断するように検出した。幅2.5m～4.0m、深さ25～35cm。断面は皿状を呈する。溝跡の堆積土は上層の暗灰色根粘質土層と下層の灰白色砂層に分けられる。上層には中世土師器の小片が多く含まれている。底面のレヴェルから北から南に流れていた可能性が強い。遺構の時期は不明である。

この他、調査区の南東隅では液状化現象の痕跡が確認できた。これは後述するＦ１区でも確認されており縄文晩期末（弥生早期）以降の時代の地震にともなうものである。

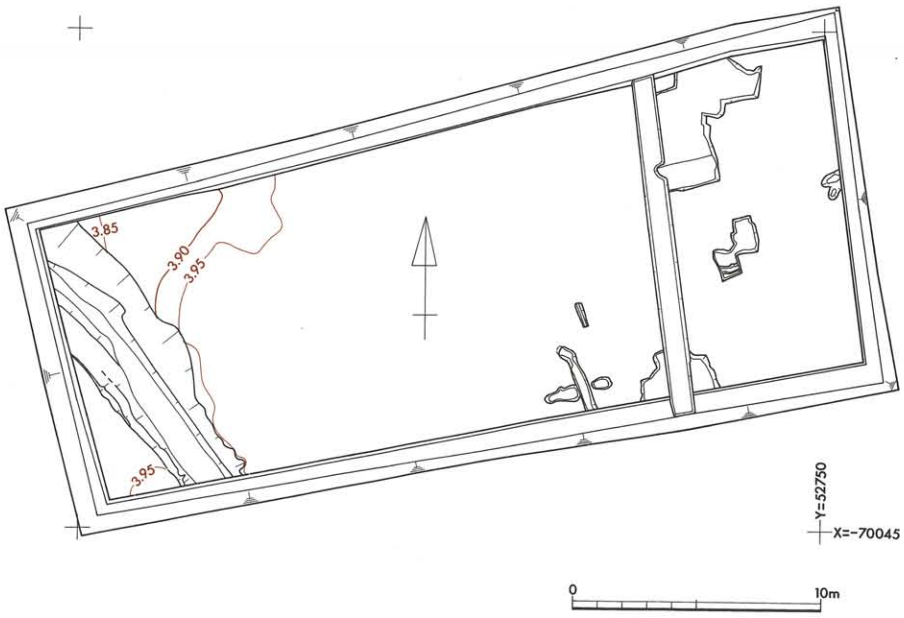


図192　E2区全体図（S＝1/300、5cmコンター）

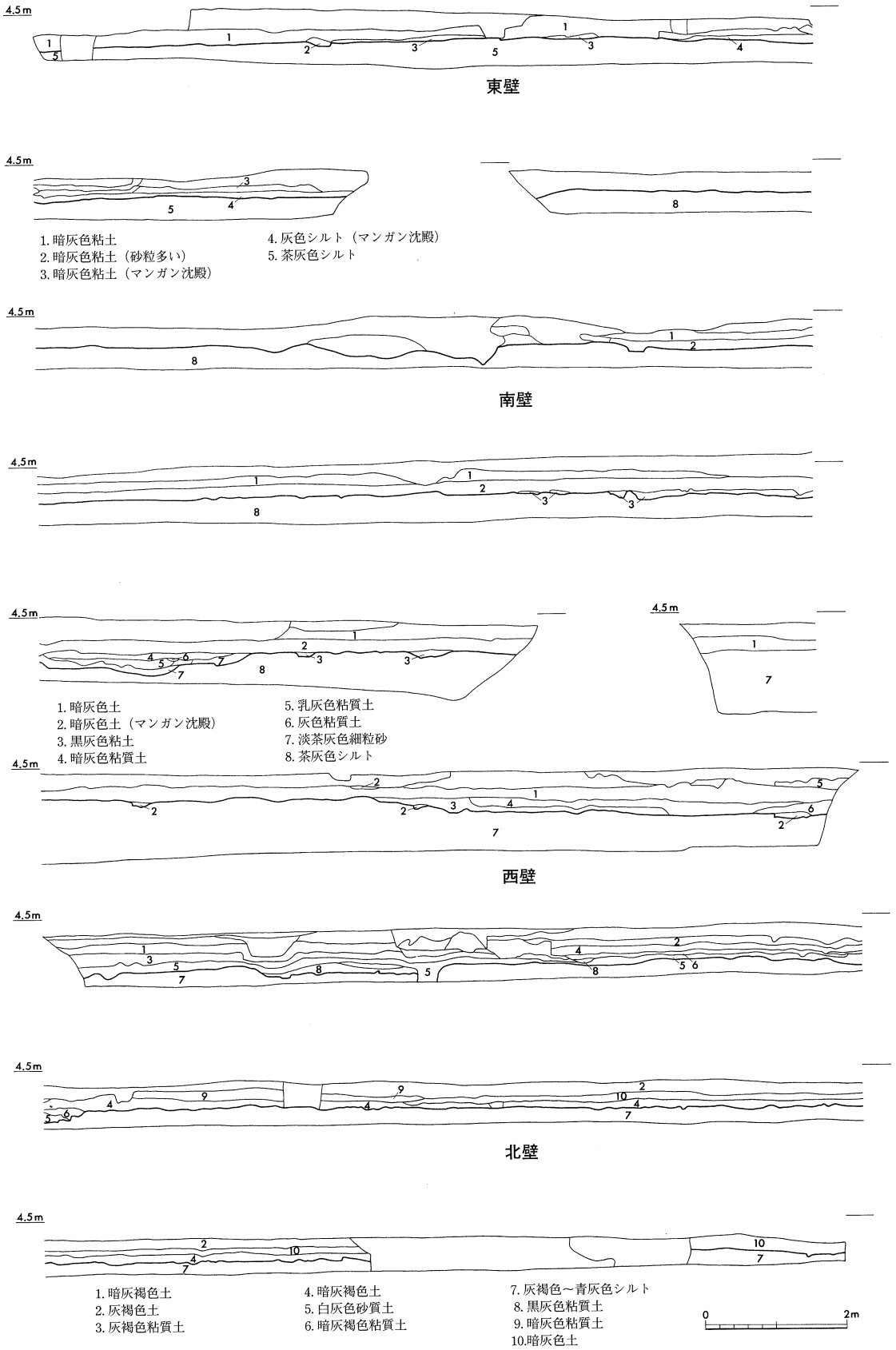


図193　E2区土層堆積図（S＝1/80）

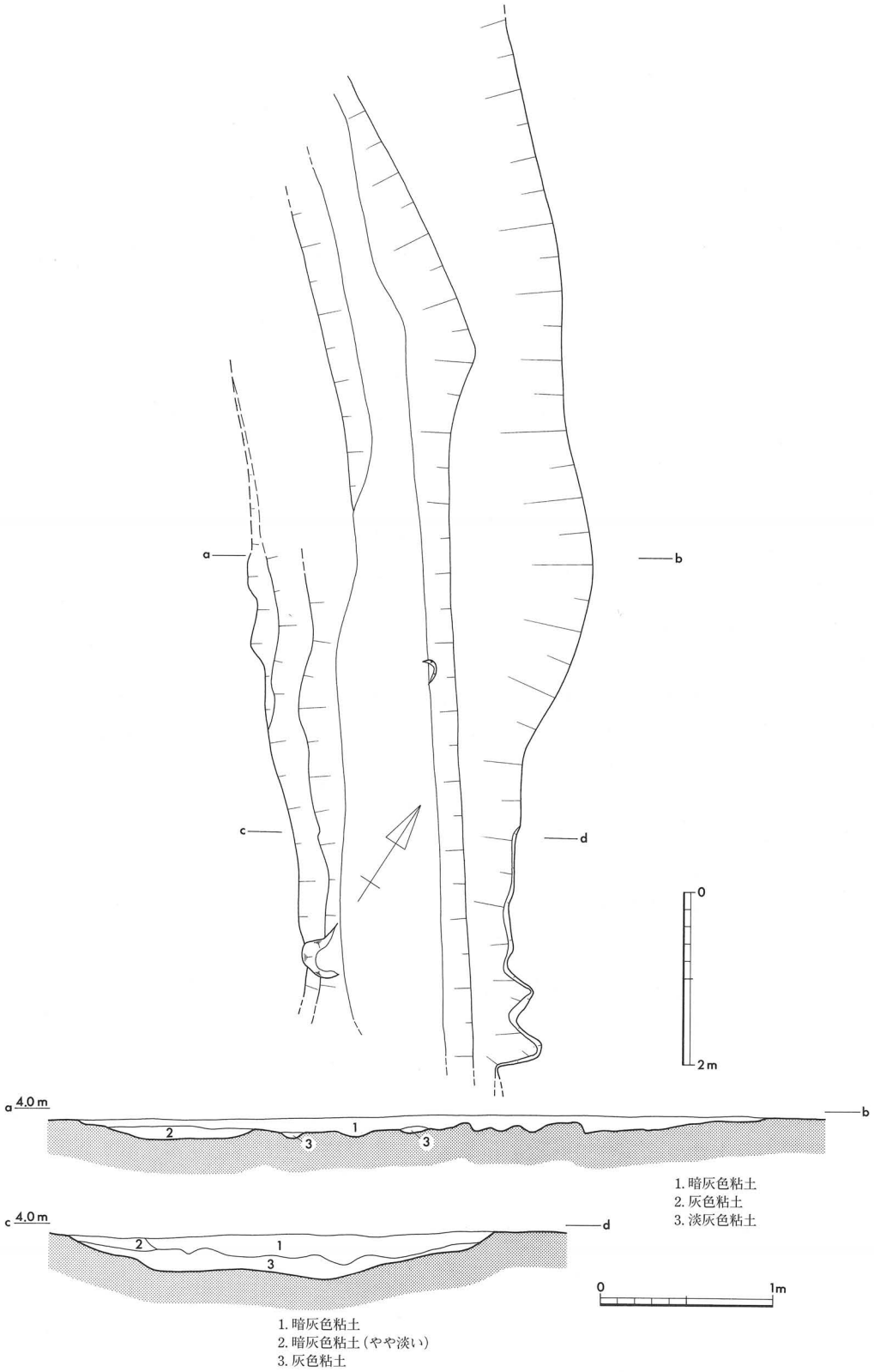


図194　E2区溝跡実測図（平面はS＝1/80、断面はS＝1/40）

第３節　小結

自然河道について（Ｅ１区）

本調査区の自然河道は東隣のＤ区で検出された自然河道と位置関係、標高からみて同一の河道と考えられる。以下、Ｄ区の調査成果（Ｐ198～199）とあわせて読んで頂きたい。

１．河道の規模

ひとことで言えば小規模な河道である。最終的に削り込んだ東西の肩口の幅は24m。深さは底面まで調査していないが、Ｄ区で1.2m、Ｅ１区で1.8m。少なくとも中心部では1.8m以上の深さと推測される。

２．河道の流向

土層観察や出土した自然流木の伸長方向から検討したが明確には判断できなかった。しかし、現在の地形や当時西側に存在したであろう神門水海の存在を考慮すれば南東から北西への流れの向きが想定できる。

３．河道の時期

Ｄ区の調査成果から弥生時代後期初頭に形成され弥生時代末から古墳時代初頭に埋没したものと考えられる。この時期に姫原西遺跡、蔵小路西遺跡Ａ、Ｆ２区の河道とも埋没しているようである。

４．河道周辺の環境

河道内からは弥生時代中期初頭から弥生時代末の土器や弥生後期の木製品が出土している。泥層から出土していることや、遺物の遺存状況も合わせて考えると、こうした遺物はそう遠くないところから流れ込んだものと思われる。このことは、ごく近いところに居住域、生産域が存在することを示すといえ、その有力候補地の一つに四絡遺跡群の小山遺跡第１地点[1]（図224)が挙げられる。

自然河道のその後

調査区内の自然河道は次第に干上がり凹地化していったようであるが、河道自体は流路をかえたのであろう。その後の変遷を考える上で看過できないのが昭和30年代の土地改良によって現在調査区北側に付替られている古井手川の存在である。後述するＦ１区でも土地改良前の古井手川が中世の河道にまで遡ることがわかっている。本調査区内にも洪水により運ばれたと思われる中世土師器の混ざった粗砂層が認められることからも、河道はごく近いところにその流れを変え、川幅を固定、管理されていったのではないかと推測される。

では河道埋没後の本調査区の状況であるが、Ｄ区、Ｅ２区のところでも述べたように居住域、生産域としては適さなかったようである。Ｅ２区でも中世耕作土に相当する土層を確認できていない。しかし、Ｅ１区の基盤層上面からは漆器皿も出土していることや、中世土師器の混ざった洪水砂が調査区を覆っていることから見て、中世の居住域、生産域もごく近いところに存在しているようである。

註（１）出雲考古学研究会「出雲平野の集落Ⅱ」『古代の出雲を考える』５　1986
田中義昭「出雲市小山遺跡第１地点の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究－山陰地方の銅・鉄を中心にして－』1992

第７章　Ｆ区の調査

第１節　Ｆ１区

概要　調査区の東２／３が淡灰褐色細砂をベースとした微高地であり、疎らではあるが遺構を検出している。西１／３は中世から昭和30年代まで続く自然河道である。この河道は現在調査区の北側に付替られている旧の古井手（ふるいで）川である。以下の文章中では埋立て直前の河道を旧古井手川という名称で切り取って表記する。自然河道の粗砂～レキを主体とした河川堆積層からは、木製品、土器が出土している。河道にともなう遺構は大溝、杭列が見られる。このほか微高地の基盤層からは縄文晩期（弥生早期）の遺構と遺物を検出した。

１．旧古井手川（図199）　聞き取りによれば昭和30年代まで機能しており、土地改良事業によって浜砂で埋め立てたられたようである。川幅は1.5m前後。北東から南西に向けて流れていたようである。川の中からはガラス瓶、瓦から卒塔婆までありとあらゆる生活ごみが出土した。川にともなう遺構としては東岸の３か所で杭列を検出した。いずれも打ち込んだ杭に横倒しにした板を組み合わせたもので、護岸を目的としたものと考えられる。川が流れていた頃、東岸は水田が営まれていたようであり、調査区にも水田の区画に伴う加工段が見られた。

２．自然河道（図195～198）

自然河道が削り込んだ東岸から西岸までの幅は９～14m。河道は最終的に川幅が固定されるまでは何度もその流路を変えていったものと思われる。河道の変遷を平面的に追いかけることはできな

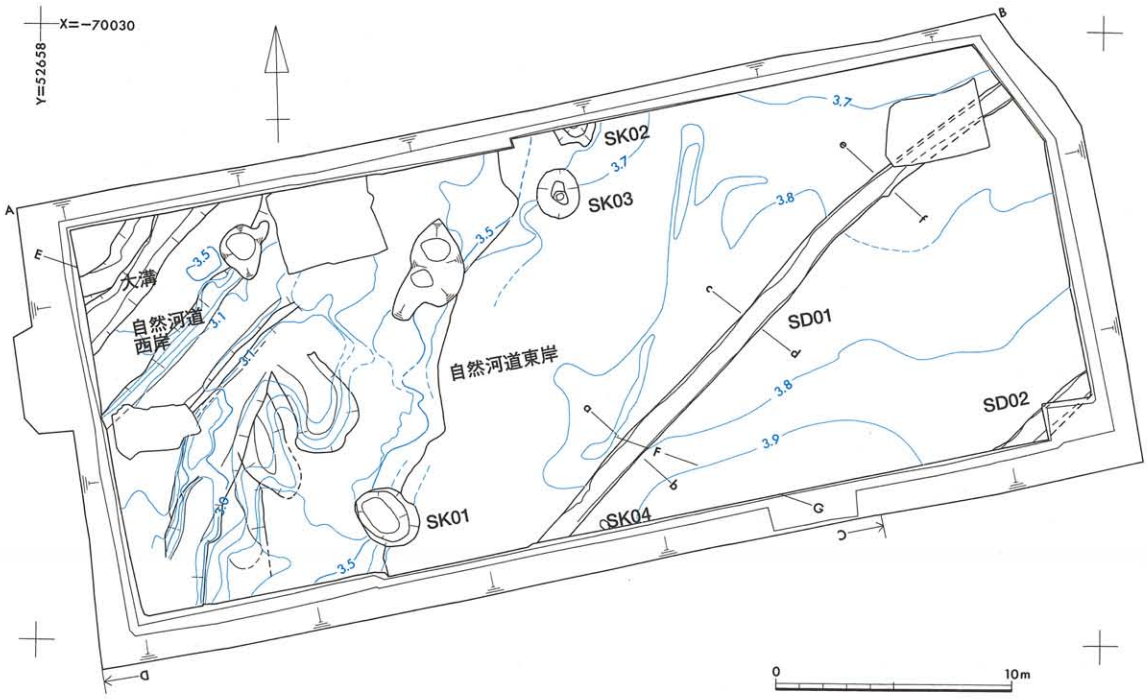


図195　F1区全体図（S=1/300、10cmコンター）

かった。このため堆積層を掘り上げた後、土層断面ＣＤ・ＥＦラインを軸に検討し、河道底面の削り込みの切り合い関係を加味して次のように変遷を考えた。河道は図195の自然河道東岸としているラインから序々に西側にシフトしていった。その最も古い河道は河道Ａである。この河道Ａは東南方向にも延びる三つの削り込みを切って北東から南西方向に流れている。その後、河道は河道Ｂ、河道Ｃへと流路を変えていく。そして最終的には河道Ｄの段階で川幅が固定されたものと思われる。河道の堆積層を見てみると、自然河道東岸から河道Ａの削り込み面までは砂混じりの粘質土層が主体であるのに対し、その他は粗砂～レキ層を主体としている。

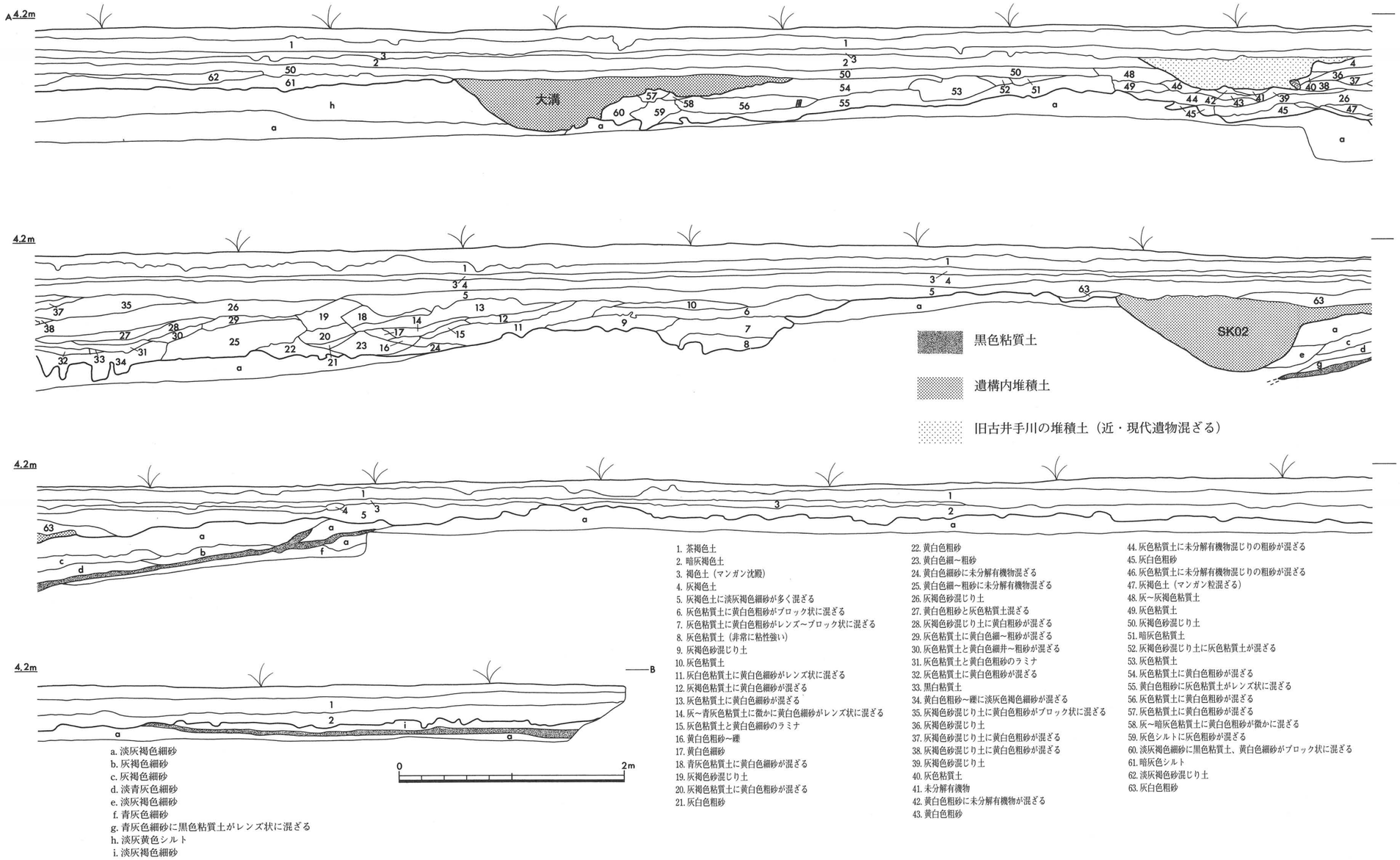
３．自然河道に伴う遺構（図200・201）

大溝、杭列は河道Ｄに平行になるように造られている。こうした位置関係を積極的に評価すれば、大溝の掘削は河道の固定という土木工事の一環として行われたものともいえよう。以下、遺構ごとに見ていく。

大溝　調査区内での検出長は8.5ｍ。ＥＦラインのところで幅は上面で1.97ｍ、底面で40cm、深さ45cm。溝の肩は西岸が検出面から深さ15cmのところで幅50cm前後の段を造り底面に至る。埋土は粗砂～細砂混じりの粘質土を主体とする。

杭列遺構　河道に伴う杭を平面的に列をなすもののみ抽出し杭列ＡからＤとした。ただし同じ列の杭でも杭の先端の標高にバラつきがあることから、総てが同時期に機能したものかどうかは不明である。杭はいずれも丸杭で先端を切り落としただけのものである。杭列Ａは大溝の底面に東肩と平行になるように打ち込まれている。他の列の杭と較べて細長いものが多く見られる。杭の先端の標高は、最も深いもので2.0ｍにまで到達していた。杭列Ｂは大溝東肩から少し離れた、大溝と河道の間の高まり上に打ち込まれており、大溝とほぼ平行になる。杭列Ｃは河道の西肩口に平行に打ち込まれている。杭列Ｄは河道の東肩口に打ち込まれている。

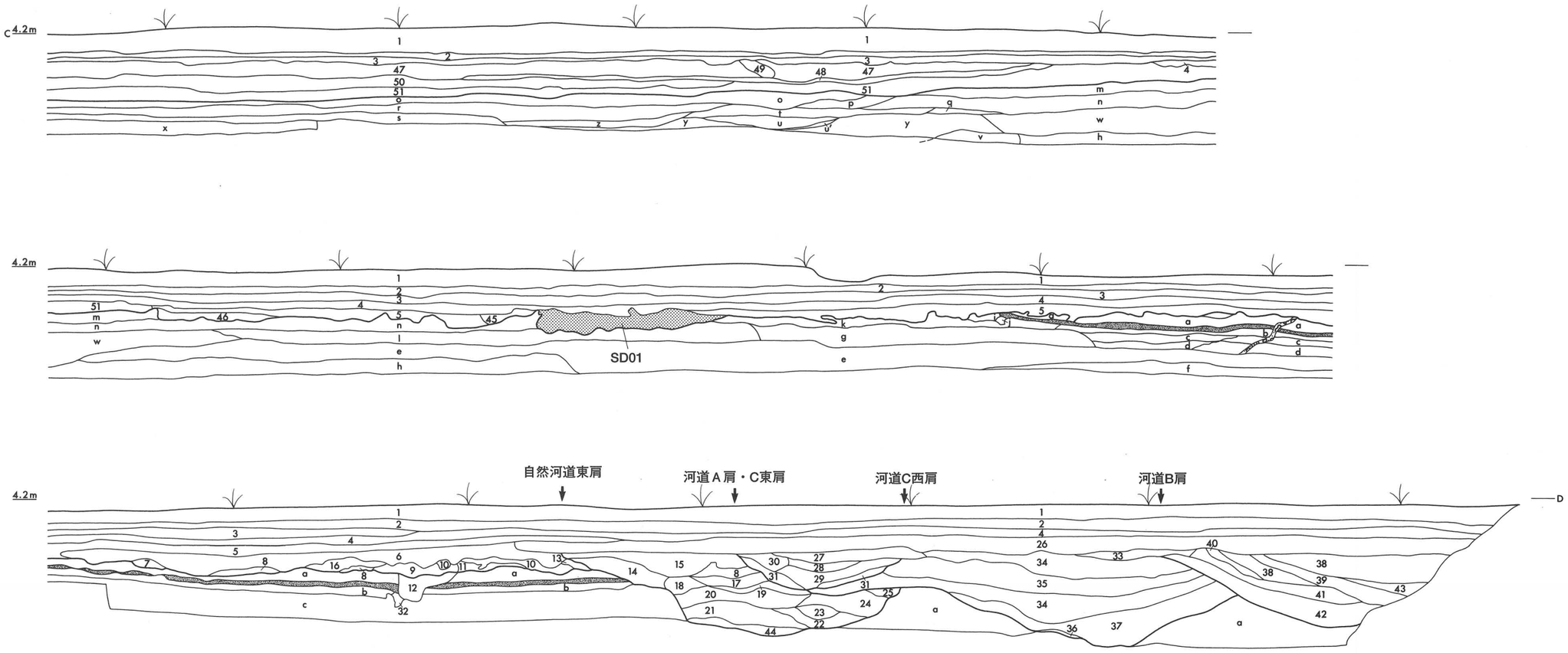
Ｆ１区　調査風景



a. 淡灰褐色細砂
b. 灰褐色細砂
c. 灰褐色細砂
d. 淡青灰色細砂
e. 淡灰褐色細砂
f. 青灰色細砂
g. 青灰色細砂に黒色粘質土がレンズ状に混ざる
h. 淡灰黄色シルト
i. 淡灰褐色細砂

1. 茶褐色土
2. 暗灰褐色土
3. 褐色土（マンガン沈殿）
4. 灰褐色土
5. 灰褐色土に淡灰褐色細砂が多く混ざる
6. 灰色粘質土に黄白色粗砂がブロック状に混ざる
7. 灰色粘質土に黄白色粗砂がレンズ～ブロック状に混ざる
8. 灰色粘質土（非常に粘性強い）
9. 灰褐色砂混じり土
10. 灰色粘質土
11. 灰白色粘質土に黄白色細砂がレンズ状に混ざる
12. 灰褐色粘質土に黄白色細砂が混ざる
13. 灰色粘質土に黄白色細砂が混ざる
14. 灰～青灰色粘質土に微かに黄白色細砂がレンズ状に混ざる
15. 灰色粘質土と黄白色細砂のラミナ
16. 黄白色粗砂～礫
17. 黄白色細砂
18. 青灰色粘質土に黄白色細砂が混ざる
19. 灰褐色砂混じり土
20. 灰褐色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
21. 灰白色粗砂
22. 黄白色粗砂
23. 黄白色細～粗砂
24. 黄白色細砂に未分解有機物混ざる
25. 黄白色細～粗砂に未分解有機物混ざる
26. 灰褐色砂混じり土
27. 黄白色粗砂と灰色粘質土混ざる
28. 灰褐色砂混じり土に黄白粗砂が混ざる
29. 灰色粘質土に黄白色細～粗砂が混ざる
30. 灰色粘質土と黄白色細井～粗砂が混ざる
31. 灰色粘質土と黄白色粗砂のラミナ
32. 灰色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
33. 黒白粘質土
34. 黄白色粗砂～礫に淡灰色褐色細砂が混ざる
35. 灰褐色砂混じり土に黄白色粗砂がブロック状に混ざる
36. 灰褐色砂混じり土
37. 灰褐色砂混じり土に黄白色粗砂が混ざる
38. 灰褐色砂混じり土に黄白色粗砂が混ざる
39. 灰褐色砂混じり土
40. 灰色粘質土
41. 未分解有機物
42. 黄白色粗砂に未分解有機物が混ざる
43. 黄白色粗砂
44. 灰色粘質土に未分解有機物混じりの粗砂が混ざる
45. 灰白色粗砂
46. 灰色粘質土に未分解有機物混じりの粗砂が混ざる
47. 灰褐色土（マンガン粒混ざる）
48. 灰～灰褐色粘質土
49. 灰色粘質土
50. 灰褐色砂混じり土
51. 暗灰色粘質土
52. 灰褐色砂混じり土に灰色粘質土が混ざる
53. 灰色粘質土
54. 灰色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
55. 黄白色粗砂に灰色粘質土がレンズ状に混ざる
56. 灰色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
57. 灰色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
58. 灰～暗灰色粘質土に黄白色粗砂が微かに混ざる
59. 灰色シルトに灰色粗砂が混ざる
60. 淡灰褐色細砂に黒色粘質土、黄白色細砂がブロック状に混ざる
61. 暗灰色シルト
62. 淡灰褐色砂混じり土
63. 灰白色粗砂

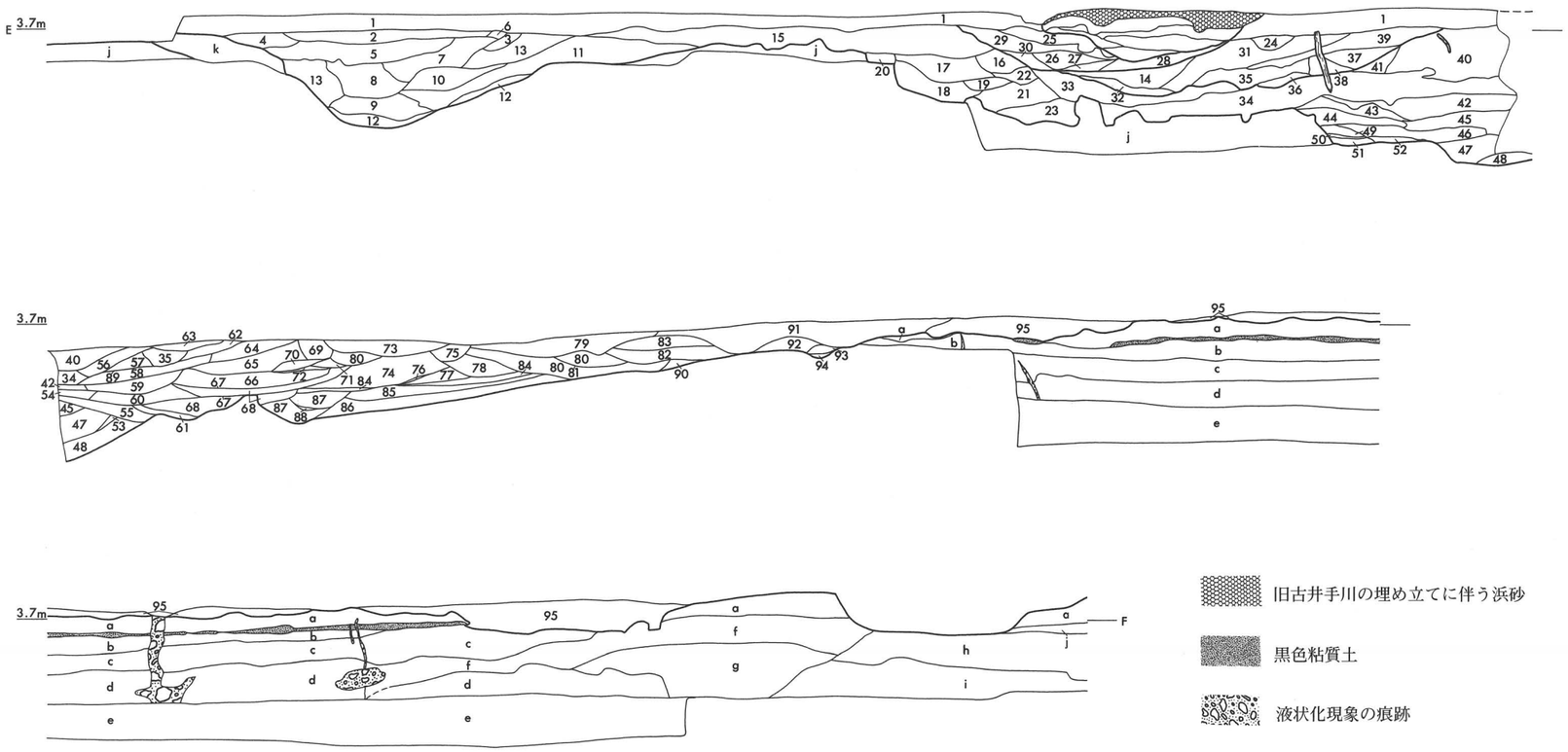
図196　F1区土層堆積図（1）　～調査区北壁ABライン～（S＝1/40）



1. 茶褐色土
2. 褐色土（マンガン粒多く含む）
3. 灰褐色土（マンガン含む）
4. 灰褐色土
5. 4より粘性強い
6. 灰色粘質土
7. 6に淡灰褐色細砂混ざる
8. 灰白色粗砂
9. 灰色粘質土と灰白色粗砂のラミナ
10. 灰白色細砂と灰色粘質土のラミナ
11. 淡灰褐色細砂に灰白色粗砂が混ざる
12. 淡灰褐色細砂に灰色粘質土が混ざる
13. 灰色粘質土に灰白色粗砂が混ざる
14. 灰白色粗砂に灰色粘質土が混ざる
15. 灰色砂混じり粘質土
16. 淡灰褐色砂質土
17. 灰白色粗砂と灰色粘質土のラミナ
18. 淡灰褐色粘質土に灰白色粗砂が混ざる
19. 灰色粘質土
20. 灰色粘質土と黄白色粗～細砂のラミナ
21. 黄白色粗砂
22. 黄白色細砂と灰色粘質土のラミナ
23. 灰白色粗砂
24. 灰色粘質土に灰白色粗砂が混ざる
25. 灰白色粗砂
26. 灰褐色土
27. 灰褐色土に灰白色粗砂が混ざる
28. 灰白色粗砂に灰色粘質土がブロック状に混ざる
29. 灰色粘質土と黄白色粗～細砂のラミナ
30. 灰色粘質土に微かに黄白色粗砂が混ざる
31. 黄白色粗砂
32. 淡灰褐色細砂に微かに灰色粘質土が混ざる
33. 灰色粘質土に灰白色粗砂が混ざる
34. 灰白色粗～細砂に灰色粘質土が微かに混ざる
35. 灰白色粗砂に粘質土がブロック状に混ざる
36. 粗砂と未分解有機物混ざる
37. 灰白色粗砂に灰色粘質土がブロック状に混ざる
38. 黄白色粗砂
39. 灰白色粗砂～細砂と茶褐色粘質土のラミナ
40. 青灰色粗砂
41. 灰白色粗砂
42. 灰白色粗砂に礫混ざる
43. 灰白色粗～細砂と茶褐色粘質土のラミナ
44. 青灰色粘質土に灰白色粗砂が混ざる
45. 灰褐色粘質土
46. 灰褐色土に地山ブロックが混ざる
47. 灰黄色土
48. 暗灰～黒色粘質土
49. 茶褐色土が灰黄土に混ざる
50. 淡灰～灰黄色土（粘性あり）
51. 淡灰褐色～灰黄色土

a. 淡灰褐色細砂
b. aに黒色粘質土がラミナ状に混ざる
c. 淡灰褐色細砂～シルト
d. 淡灰褐色細砂～シルト
e. 淡灰褐色細砂～シルト
f. 青灰～黄色細砂
g. 灰黄色細砂
h. 濁灰黄色細砂
i. 淡灰褐色細砂に灰褐色土が混ざる
j. 淡灰褐色砂に灰褐色土が混ざる
k. 淡灰褐色～灰黄色土
l. 灰黄色細砂
m. 淡灰褐色細砂
n. mより淡い
o. 淡灰褐色シルト
p. 淡灰褐色細砂
q. 淡灰褐色細砂
r. 淡灰褐色細砂
s. 淡灰褐色細砂
t. 淡灰褐色シルト
u. 灰褐色～青灰色細砂（木炭粒混ざる。縄文晩期土器含む）
u′. uより木炭粒多い
v. hがグライ化
w. 淡灰褐色細砂
x. 淡灰褐色細砂
y. 青灰色細砂
z. 淡灰褐色細砂（木炭片混ざる）

図197　F1区土層堆積図（2）　～調査区南壁CDライン～（S＝1/40）



1. 灰褐色土
2. 1に黄白色細砂混ざる
3. 灰褐色土に灰白色粗砂が混ざる
4. 灰褐色土に微かに灰白色粗砂が混ざる
5. 灰褐色土と黄白色粗砂が混ざる
6. 灰褐色土に灰白色粗～細砂が混ざる
7. 灰色土に黄色粗砂が混ざる（粘性あり）
8. 灰色土に黄色粗砂が混ざる
9. 灰白色粗砂
10. 灰～茶褐色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
11. 茶褐色粘質土と黄色粗砂のラミナ
12. 淡灰褐色細砂に灰白色粗砂が混ざる
13. 灰色土に黄白色粗～細砂が混ざる
14. 灰色粘質土に粗砂が混ざる
15. 灰褐色土に黄白色粗砂が混ざる
16. 灰色粘質土と黄白色細砂のラミナ
17. 灰色土に黄白色細砂が混ざる
（微かに未分解有機物あり）
18. 灰色土と黄白色細砂が混ざる
19. 灰色粘質土（微かに黄白色細砂が混ざる）
20. 灰褐色土
21. 灰色土に黄白色細～粗砂が混ざる
22. 灰色粘質土
23. 灰～青灰色粘質土に黄白色細～粗砂が混ざる
24. 灰褐色土
25. 黄白色細砂～灰白色粗砂
26. 灰白色粗砂
27. 未分解有機物
28. 灰色粘質土の粗砂が混ざる
29. 灰色粘質土
30. 灰色粘質土に灰白色粗砂が混ざる
31. 灰色土に灰白色粗砂が混ざる
32. 灰色粘質土と灰白色細砂のラミナ
33. 暗灰色粘質土と灰白色粗砂が混ざる
34. 灰白色粗砂
35. 黄白色細砂と灰色粘質土のラミナ
36. 黄白色細～粗砂
37. 灰色土に粗砂が混ざる
38. 黄白色細～粗砂
39. 灰褐色土
40. 黄白色細砂と灰色粘質土のラミナ
41. 灰褐色土に粗砂が混ざる
42. 暗灰色粘質土に粗砂が混ざる
43. 灰色粗砂に礫が混ざる
44. 灰色粘質土に粗砂が混ざる
45. 灰色粗砂と灰色粘質土のラミナ
46. 灰色粘質土に粗砂が混ざる
47. 灰～青灰色粘質土に粗砂が混ざる
48. 灰白色粗砂
49. 青灰色粘質土
50. 灰白色粗砂
51. 青灰色粘質土
52. 青灰色粘質土
53. 茶色粘質土
54. 灰色粘質土と粗砂が混ざる
55. 黄白色細～粗砂
56. 黄白色細砂と淡灰色粘質土のラミナ
57. 灰白色粗砂
58. 灰白色粗砂
59. 黄白色粗砂に灰色粘質土が混ざる
60. 灰白色礫
61. 黄白色粗砂
62. 灰色粘質土に微かに黄白色細砂が混ざる
63. 灰色粘質土と黄白色細砂のラミナ
64. 灰色粘質土に微かに黄白色細砂が混ざる
65. 灰色粘質土と黄白色粗砂が混ざる
66. 灰白色粗砂
67. 黒色粘質土
68. 黄白色粗砂
69. 灰色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
70. 黄白色粗砂
71. 灰色粘質土
72. 黄白色粗砂
73. 灰褐色砂混じり土
74. 黄白色粗砂と灰色粘質土がブロック状に混ざる
75. 淡灰褐色砂混じり土
76. 黒色粘質土
77. 黄白色粗砂
78. 灰白色粗砂
79. 灰褐色砂混じり土
80. 灰白色粗砂
81. 灰色粘質土
82. 灰白色粗砂
83. 茶褐色粗砂
84. 灰白色細砂
85. 茶色粘質土
86. 黄白色粗砂
87. 灰白色粗砂
88. 茶色粘質土
89. 黒色粘質土
90. 灰色粘質土に黄白色粗砂が混ざる
91. 灰褐色土に黄白色粗砂が混ざる
92. 黄白色粗砂に灰色粘質土がブロック状に混ざる
93. 灰色白細砂
94. 暗灰色粘質土
95. 淡灰褐色細砂に灰色砂混じり土がブロック状に混ざる

a. 淡灰褐色細砂
b. 淡灰褐色シルトと黄色砂のラミナ
c. 灰黄色シルト
d. 青灰色細砂
e. 青灰色細砂
f. 灰黄色細砂（かたくしまる）
g. 灰黄色～淡灰褐色細砂
h. 淡灰褐色細砂
i. 淡灰褐色細砂
j. 淡灰黄色細砂（縄文晩期土器包含層）

0 2m

図198　F1区土層堆積図（3）　～河道横断EFライン～（S=1/40）

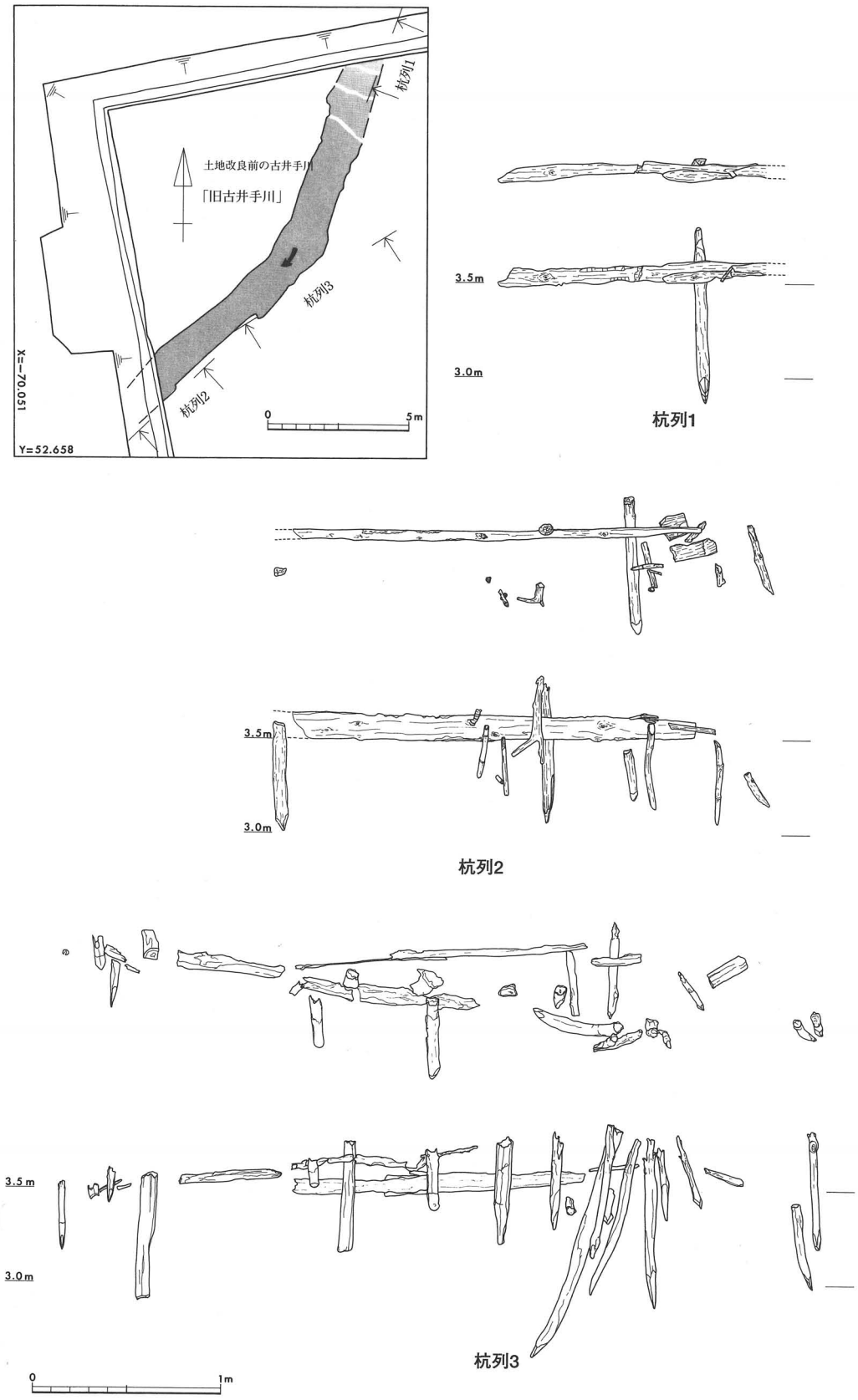


図199　F1区　旧古井手川に伴う杭列実測図（川跡はS＝1/200、杭はS＝1/30）

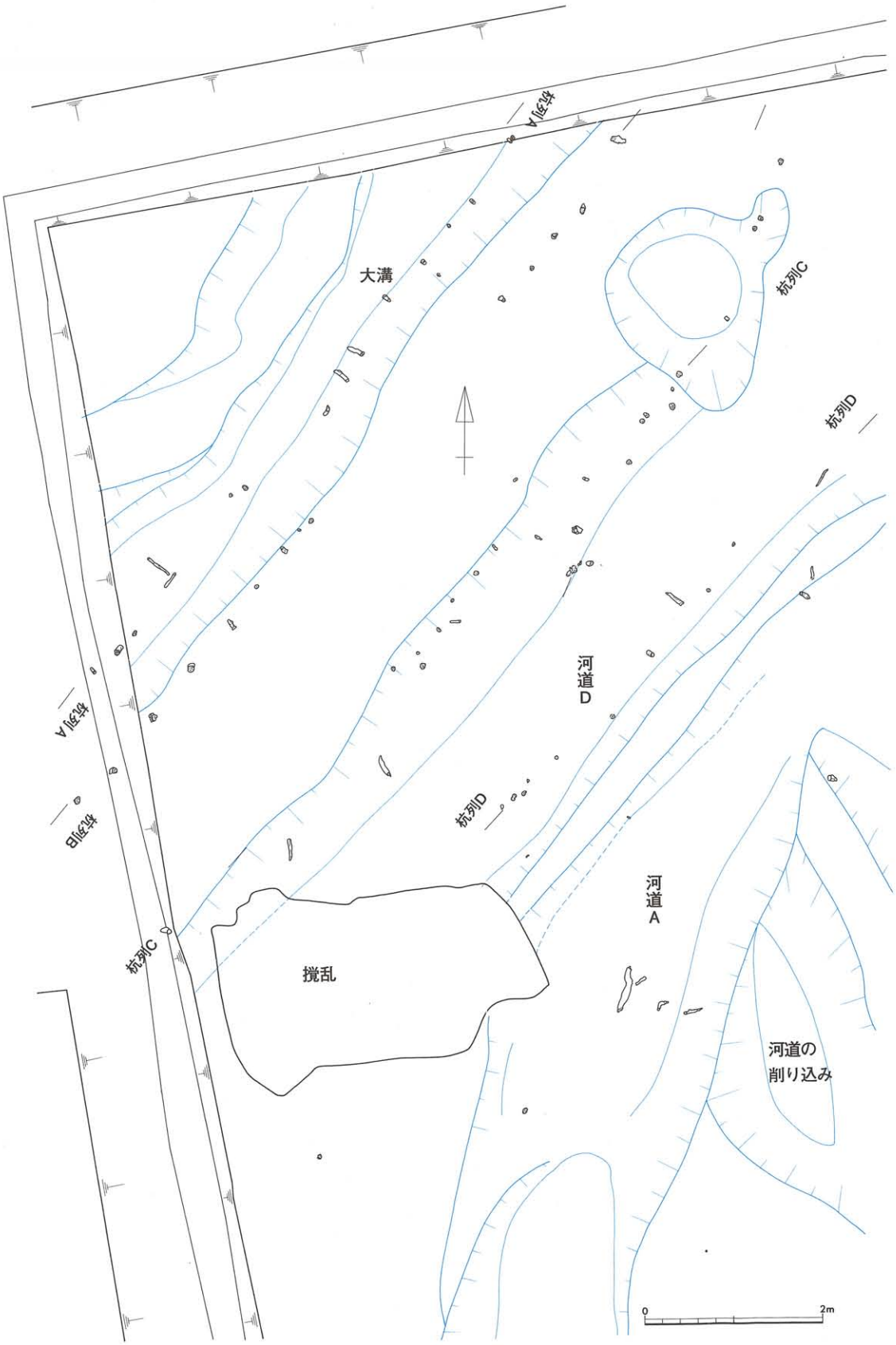


図200　F1区自然河道・大溝に伴う杭列平面図（S=1/60）

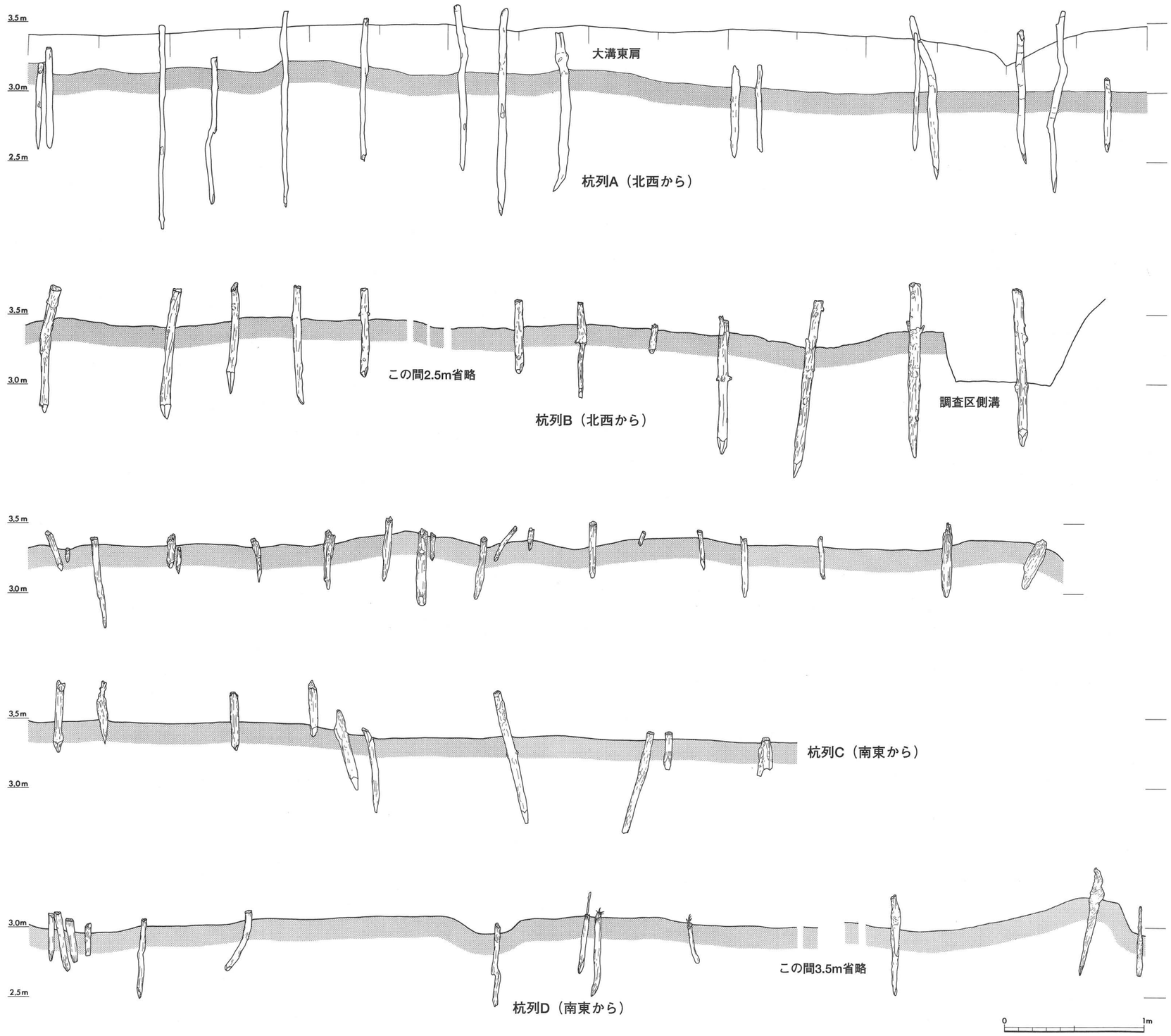


図201　F1区自然河道・大溝に伴う立面図（S=1/30）

4．自然河道出土遺物（図202・203）

図202の土器はいずれも河道内の粗砂～礫層から出土しており、小片でかなり磨滅しているものも見られる。1～9は弥生土器。1と2は前期の甕。1は復元口径23.8cmで外面にはヘラ描直線文を施す。2は口径は不明。外面に6条のヘラ描直線文を施す。3は前期の無頸壺の小形品。口縁部を欠いており口径は不明。頸部に5条、やや下がった辺りに4条のヘラ描直線文を施している。松本Ⅰ－4様式か。4は中期の壺。頸部に9条のヘラ描き直線文を施す。5は中期の甕。口縁部が短く外反する。6は中期の壺。口唇部に斜格子文施す。7は複合口縁の甕。口縁端部を欠く。8、9は底部。いずれも厚手の平底である。10～12は須恵器。10は高台を有する壺の底部。高台は外方に踏んばる形態である。11、12は甕の胴部。外面に平行叩き、内面は同心円当て具痕。13から20は中世土師器。16、17はやや厚手で坏の可能性もあるが、その他は皿と考えられる。13は復元口径7.4cm、器高1.4cm。14は復元口径8.0cm、器高1.5cm。18は最も残りが良い。体部は逆ハ字に開き、

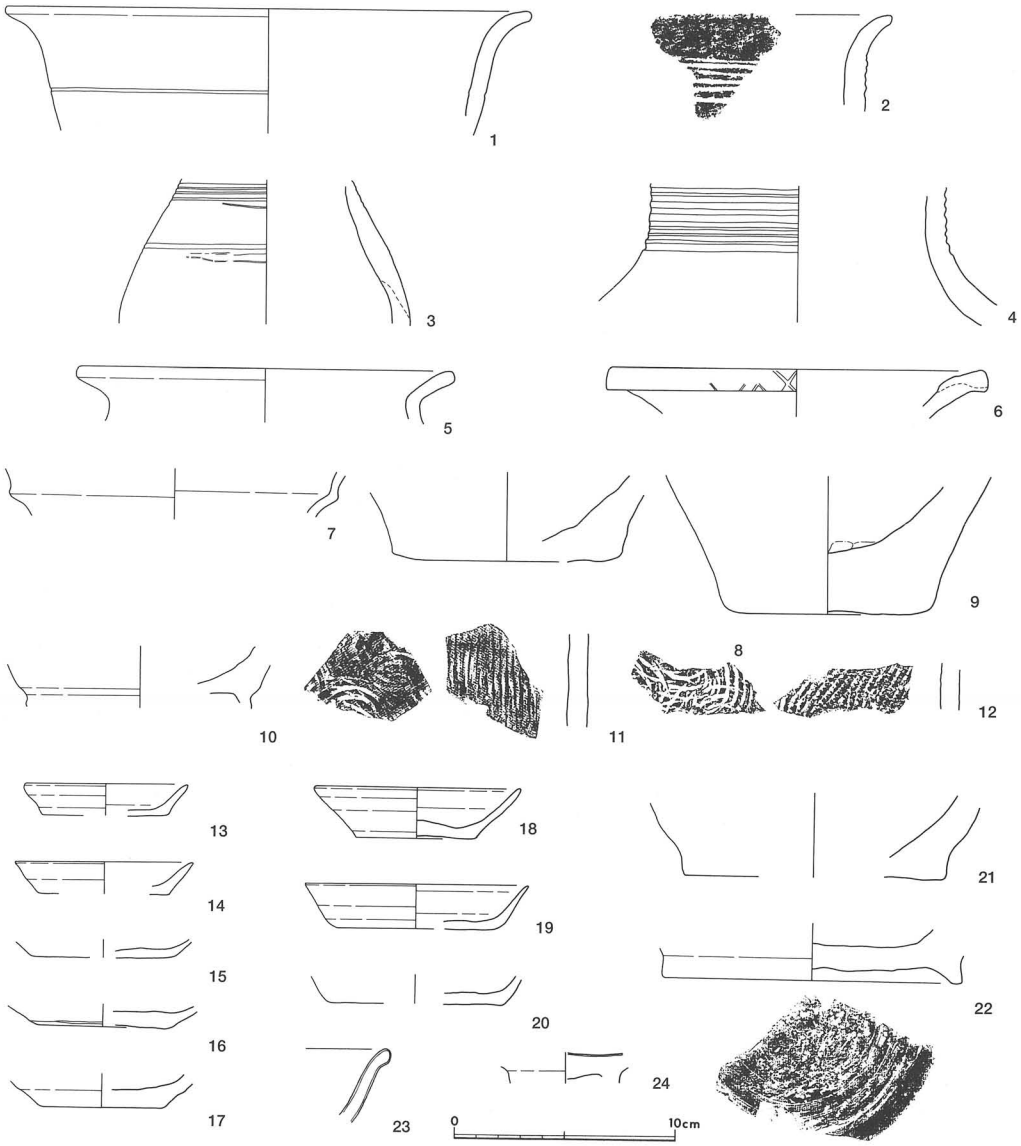


図202　F1区自然河道出土遺物実測図（S＝1/3）

底部の見込みはやや上げ底である。口径9.3cm、器高2.3cm、底径5.5cm。12世紀頃か。21、22は国産陶器。21が赤茶色、22が灰黒色を呈する。二点ともこね鉢と思われる。22は外方に少し踏ん張る高台を有する。高台径13.5cm。底部外面は回転糸切りの後指ナデを施している。23、24は青磁。23は外反する口縁部をもつもので上田D類。14世紀後半から15世紀前後。24は無文の椀。

図203の1から6は漆塗り椀。いずれも外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗布してあり、1と4以外は外面に赤色漆で絵が描かれている。出土した層位は河道内の粘質土層からであり、付近から投棄されたことが考えられる。1から3は口縁から体部にかけての破片で全形は窺えない。4から6は高台を有する椀。高台の断面はいずれも逆ハ字を呈するが、6のみ裏面のくりこみは浅い。6は漆膜の剥落によりロクロ成形の痕跡が観察できる。7、8は用途不明の木製品。7は板目取りの板材の側縁を加工したもの。現存する長さは22.5cm、厚さ7.5cm前後。8は工具などの柄かと思われるもの。基部から両側縁は木理と平行に丁寧な削りが見られる。上面は径3～4mmの小さな孔が

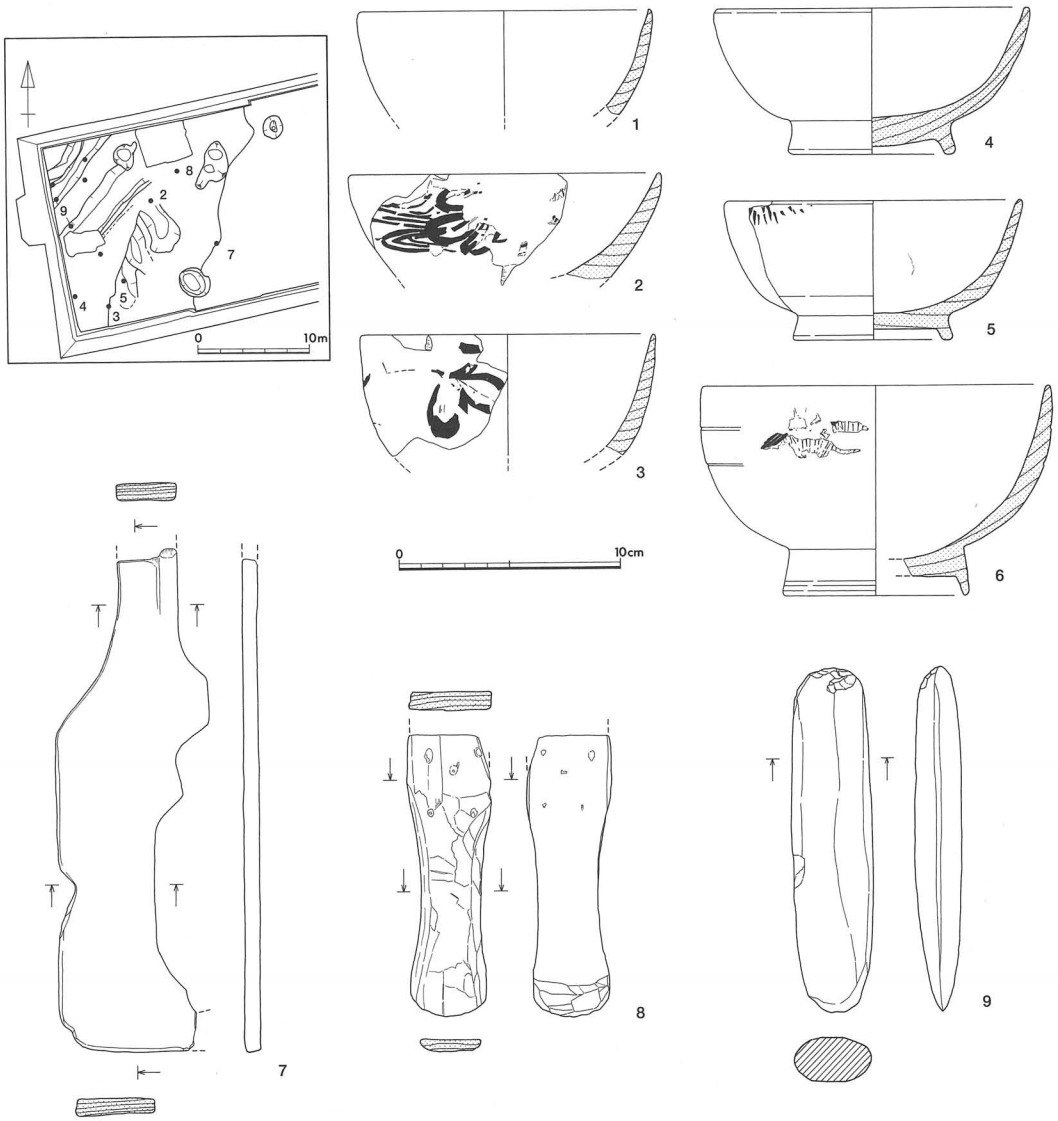


図203　F1区自然河道出土遺物実測図（2）（S＝1/600、遺物はS＝1/3）

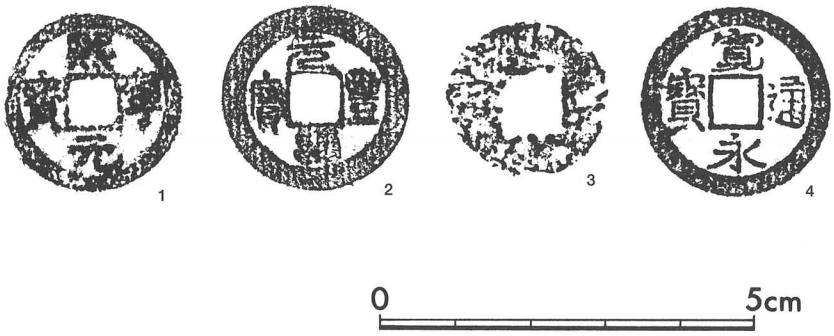


図204　F1区　出土銭貨拓影（実大）

5個空けられている。9は緑泥片岩製の小形の磨製石斧。長さ15.3cm、重量は200.88ｇ。

表　Ｆ１区出土銭貨観察・計測表

	名　称	初鋳年	銭径(A)／銭径(B)		内径(C)／内径(D)		銭　厚	量　目
1	熙寧元寶	1068	23.72mm	23.80mm	20.50mm	20.50mm	1.00～1.62mm	(7.4ｇ)
2	元豊通寶	1078	24.95	25.20	18.25	19.28	0.60～0.70	2.76
3	無 文 銭		20.58	21.42			0.60～1.21	1.44
4	寛永通寶	1636	25.43	25.35	20.76	20.31	0.70～0.92	2.85

銭貨（図204）　5枚出土している。このうち1の熙寧元寶にはもう1枚別の銭貨が錆着している。1、2は中国銭。1は熙寧元寶で真書体、2は元豊通寶で篆書体である。3、4は本邦銭である。3は無文銭、4は古寛永。

参考文献　永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会1994

表　は同書の「8．古銭の計測」（9～10ページ）をもとに作成している。

このほか図化していないが煙管の雁首が一点出土している。

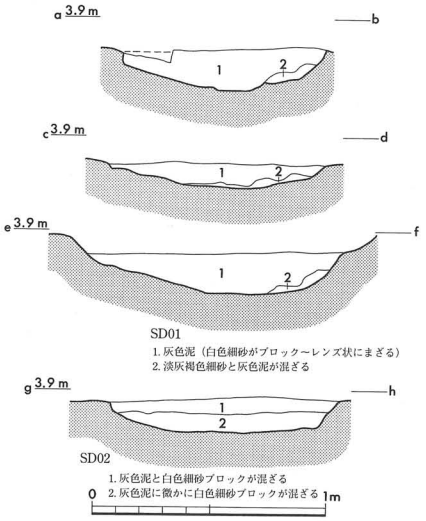


図205　F1区　SD01・02土層堆積図（S＝1/30）

5．河道東、微高地上の遺構（図205）

河道東側の微高地上からは溝2条と大形土坑3基を検出した（図195）。

溝跡（図205）　溝跡はいずれも河道と平行するように北東から南西に延びている。溝跡の底面の標高は均一である。埋土は二つの溝跡とも同じで、地山の淡灰褐色細砂をブロック状に含んだ粘性の非常に強い泥層である。ＳＤ01は断面Ｕ字形を呈するもので幅は0.87～1.17ｍ、深さは11.0～23.0cm。検出長は38.7ｍ。底面の標高は一定であり流向は不明である。ＳＤ02は調査区南西隅で一部を確認したもので、検出長はわずか4.8ｍである。幅0.98～1.25ｍ、深さは15.0cm。二つの溝跡とも遺物は出土していないため時期は明確でない。埋土の状況と、河